

因果律の鎖を越えて —ULTRA・ZEST—

猫丸又三郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スーパーヒーロー作戦にて因果地平に消えてったユーゼスさんが転生したお話です

※予めユーゼスさんの事を予習しておくとおもしろいかもしれません

|| 参戦作品 ||

- ・ スーパーヒーロー作戦
- ・ ヒーロー戦記
- ・ スーパーロボット大戦シリーズ (A・α)
- ・ 仮面ライダーシリーズ (昭和・龍騎・ディケイド)
- ・ ウルトラマンシリーズ (昭和・ティガ・ダイナ)
- ・ 魔法少女リリカルなのはシリーズ (StrikeS)
- ・ 戦姫絶唱シンフォギアシリーズ (G・GX)
- ・ ラブライブ！シリーズ
- ・ 快傑ズバット
- ・ その他諸々作品

and more……

|| あらすじ ||

イングラム達との戦いに敗れ、因果地平の彼方を漂っていたユーゼス・ゴッツオは、光の力で転生する。

かつての世界と似た状態の新たな世界を守るべく、光の力で超神ゼストへと変身する。

この世界の戦士達と出会い、彼は自分に絡み付く因果律の鎖を解く
為に戦う事になる……

・月に3回程度の更新をする感じです。それ以上更新するかもしれないのも私だ。

・新期作品参戦も考えています。良いアイデアがありましたら、活動報告にコメントして頂ければ幸いです。

目次

プロローグ	1
第一章 英雄達の邂逅	
第一話 転生、目覚め	6
第二話 破壊者と調停者	12
第三話 意思、形となりて	20
第四話 光と闇を持って	28
第五話 蒼き戦神、黒き巨人	34
第六話 ファーストコンタクト	45
第七話 護る為の力	56
第二章 動き出す悪夢	
第八話 新天地、そして新世界	68
第九話 招かれざる異邦者（Ⅰ）	78
第十話 招かれざる異邦者（Ⅱ）	94
第十一話 招かれざる異邦者（Ⅲ）	106
第十二話 招かれざる異邦者（Ⅳ）	120
第十三話 動き出した歯車	142

プロローグ

「――私は……………ウルトラマンにも、地球人にも為れなかったのか……………」

因果地平の彼方、と呼ばれる場所。
そこにユーズ・ゴッツオは居た。

己が神に取って代わろうと画策し、手にした『光』の力。歪んだ光を使つて全てを変えようとした彼は、同じく『光』の力……………ウルトラ一族の決死の一撃によつてその力を無力化された。

更に、もう一人の自身とも言える男、イングラム・プリスケンらの攻撃によつて完全に力を失つた。

そして、彼は今、ここに居た。

「結局、ウルトラマンになるには神の力など必要ないのだな……………」
光を手にした事で分かつた、『力を持つ』という事。

自身の経験と同じく、正しい方向にも歪んだ方向にも簡単に向けられる力……………。

そんなモノを必要とせずに戦つたイングラムやリュウセイ等こそが、ウルトラマンと共に生きていく者達なのだろう。

「私は……………お前が……………うらやましい……………イングラム」
薄々だが勘づいている。

自身の半身が、虚空からの使者になつた事。

並行世界の自分に、今の自分の記憶が流れ出している事。

その私が、再びイングラムや鋼の救世主によつて倒される事。

因果律の鎖によつて縛られた運命から、抜け出す事が出来ない事。

幾らやっても結果は同じであろう。

因果という烙印に縛られた以上、ソレを変える事は出来ないのだから。

クロスゲート・パラダイム・システムがあつても、ウルトラの光があつたとしても、その結末を変える事は出来やしない。

つくづく自分の情けなさに嫌気がした。

あの時……………新西暦155年にウルトラマンに出会わなければ

……あるいは、自身がウルトラマンへとなっていたら
……。

「馬鹿だな、私も。それこそ有り得ない話だろう……」
超人的な力はいずれ身を滅ぼす。それは重々承知だ。

……だが、もしそうなったならばどうなる？

私は神へとなろうとしただろうか？

それとも、私も彼らと同じく人間の為に戦ったのだろうか？

結果は知る由もない。だが、そんな考えを、ここへ来てから幾度となくしてきた。

叶いもしない夢物語を……。

「——じゃあ君は、その物語を望むのかい？」

「……ッ!? 誰だ!」

気付かぬ間に、見知らぬ男が立っていた。

妙に派手な服装の青年だ。まるで気取った神の様な恰好である。

……その割には背中にとても大きな風呂敷袋を背負っているが。

「私も、たった今しがたこの因果地平の彼方へとやって来たばかりさ。

……それより」

そう言うと、男は背負っていた風呂敷を広げた。すると——

「……っ、何だ、この負の力は……!?!」

黒く、漆黒よりも深い闇。

それは超神ゼストにあった歪んだ力よりも強大な邪悪であった。

「ある世界……といっても、並行世界の塊みたいな所で発生した『消滅しようとする力』さ」

「消滅しようとする……力」

次元修復した時に相殺しきれなかった分だね、と青年は付け加えた。更に、

「……これは、ある世界から流れ出した生きようとする力だね」

目の前に、光が現れた。邪悪な闇とは打って変わって、暖かい光であった。

「彼の言葉を借りれば、人の心の光……とでも言うのかな？」

その二つの力を目にして、ユーゼスは自分が使った力がどれだけ弱く小さいモノなのか思い知った。

ゼストの邪悪な力ですら、『消滅しようとする力』の数万分の1程度にも満たないだろう。

「これだけの強力な力だ……これを『生きようとする力』……ましてやそれ以上の力に変えられたら、君の言う『光』へとなるかもしれないな」

「何を馬鹿な……もし本当にそんな事が出来るのならば、私の因果の鎖も断ち切れる筈だな」

「なら、やってみるかいい？」

そう言った青年は、その二つの力を操るかの様に手を動かす。

すると、その動きに合わせて二つの力は衝突した。

直後、大きな閃光と共に、ユーゼスには何かが見え始めた。

鋼を纏った巨人、光の意思で戦う戦士、黒の創世たる王、魔の力を持つ少女、夢を叶える少女達……。

「何だ……私の知らない何が起ころうとしているのだ!？」

「既に『因子』は揃った……後は『鍵』となるモノとそれを操る『戦士達』が必要となるのか」

うむ、と自身の顎に手を置き、しばし考え事を始めた。そして直ぐに、

「後は君のその願いだだけだ。過ちと罪を認め、それを乗り越えるだけの『想い』だ」

「私は……」

目の前で炸裂する閃光は徐々に強くなってゆく。ウルトラマンよりも強大な、暖かみを帯びた光がユーゼスに迫る。

そして一呼吸置いた後、ユーゼスは絞り出す様に叫んだ。

「——彼らと同じ……ウルトラマンと同じように人間を護れる力が……欲しいッ!!」

閃光。

意識が遠のいていく様な気分。

ユーゼスはその謎の感覚に襲われた。

「力が君に答えた……………後は君次第だ、ユーゼス・ゴッツオ」

「…………あの光を…………あの力を手に入れるのは……………私だあああああつ!!」

何故か自然と出た言葉を最後に、ユーゼスの存在は因果地平の彼方から消えた。

「いや、ユーゼスはやっぱり叫んでいましたな」

ユーゼスが消えてなくなつてすぐ、オレンジ色の大きなロボットが近付いてきた。

「だが、その咆哮が新たな物語を呼んだんだよ」

ユーゼスを消した二つの力は、既に消えていた。

消滅しようとする力と存在しようとする力。この二つが合わさつた時、生きとし生ける万物の『生きようとする力』、生き物や人間全てが持つ力に変わる。

大極の力、スファイアでも重要ないがみ合う双子がそうであつたように。

そして、生み出されたこの力はどこへと消えたのか。

何処かに散つていったのか、或るいは——

「…………いずれにせよ、なんで勝手に私が持っていたZクリスタルの欠片を使つたんです!アレに残っていた並行世界の戦士達の虚憶を見て、楽しもうとしたのに!!」

青年の手に握られたZクリスタルは、もうただの石ころ同然になっていた。透き通る様な宝石感が感じられない。溜め込んでいた力を全て使い切っていたのだ。

「ジ・エーデル、君も懲りない人物の様だね」

「一度でも神を気取つた貴方に言われたくありません!!」

青年は無限に広がる彼方を見つめた。

ユーゼス・ゴッツオがどこへ消え去ったのか。それは消し去った張本人であるアドヴェントですらも分からなかった。

ただ、彼は思った。

因果律の鎖を、ユーゼス自身の力で解ける事を……………

第一章 英雄達の邂逅

第一話 転生、目覚め

名も無き何処か。

幾人かの人間達が集まっていた。

「——ユーゼス・ゴッツォが？」

「ああ。奴は因果地平に漂流していた筈だが、何時の間にか輪廻転生を行った」

「あの場所には誰か居たのか？」

「例の『負の無限力』らしき力を運んできた者が二人、それと奴だけだった」

空中に映し出されるフォロモニターには、ある世界からやって来た二人の人間の姿しかなかった。

かつて「御使い」と呼ばれた、因果律の番人よりも位の高い高次元生命体。その一派の一人であるアドヴェント。

もう一人は、黒の英知によって力を得た幾つかの人間の集合体。

ジ・エーデル・ベルナル。

「二人共『Z』の世界で大罪を犯した人物であり、自ら望んで因果地平へ降りたそうだが？」

「因果律を捻じ曲げる事は至高神Zですらもかなわなかった。ユーゼス・ゴッツォが可能性へと至ったのだろうか」

一つの空間に集まった人間達。

因果律を乱そうとする者から、本来あるべき因果律を守る為に戦う使者。彼らはそれぞれが各並行世界の因果律の番人であり、虚空からの使者であった。

「今のあの男は、クロスゲート・パラダイム・システムを悪用するであろうか……？」

議長のような立ち位置の男が、一人の男に向かって訪ねた。

白銀色の髪をした青年。その顔は、ユーゼス・ゴッツオに若干酷似していた。

「……イングラム・プリスケンの虚憶からCPSを造った奴ならまだしも、イングラムを認めた方のユーゼスなら、まだ変えられると思います」

青年は多少ためらいを感じながら、モニター上に映るユーゼスの姿を見た。

バルシエムシリーズを作り、打倒霊帝を掲げていた『α』世界の彼だったならば、遠慮なくクロスゲート・パラダイム・システムを使用するだろう。

だが、今転生したユーゼスはイングラムを駒としてでなく一人の地球人として認め、ウルトラマンの力を知っている。あんな暴走は起こさないと踏んだ。

「……最悪の場合、あの世界ごと彼を消さなければなりません」

「その時は、アレを使うがいい」

議長は重々しい面持ちでそう切り上げると、解散を指示した。

(……ユーゼス、貴方はまた因果律に縛られてしまうというのか……?)

光。

直視した瞬間、光が目を通り、網膜を刺激し、脳内に信号が届く。それと共に、彼の意識が覚醒した。

「——ッ、私は……………」
体が上手く動かない。

とても長い時間眠っていたかの様に筋肉が萎縮しているのだろうか。

「動く……………のか、動けるのか……………」

力を込め、やっとの思いで立ち上がった。両足が震え、筋肉痛で酷く痛む。まだ歩くには時間が必要だろう。

「痛み……………私は、生き返ったのか！」

体中に激痛が走る中、彼は喜び歓喜した。生き返った、という表現が正しいのかはつきりとは分からないが、だが現にユーゼス・ゴツツオは此処に存在していた。

体の痛みを噛みしめる様に、少しずつ歩き始める。同時に、この場所の散策を始めた。

「民家……………という事か？」

人気が少しも感じられないし、何より内装がボロボロでとても人が住んでいる環境ではなかった。

「……………何？私の顔が……………ッ！」

壁に掛けられた鏡を覗いて、彼は息を飲んだ。

顔が、元に戻っているのだ。

ユーゼスはかつて重症を負い、顔をザラブ星人に整形されていた。だが今の顔は、その整形前の顔であった。

「単に時を遡ったのか、それとも並行世界の私に今の私の意思が流れ込んだのか……………」

いずれにせよ、現状を整理する必要があった。その為にも、早く表に出なければ。

まだ体が本調子でないにも関わらず、ユーゼスは足を引きずるように廃屋から出ようとした。

その時であった。

「ギュルルアアアアアアッ!!」

奇声だ。だが、人間が出せるような声ではない。酷く響く叫び声に、ユーゼスは顔をしかめる。

「鳴き声……これは、怪獣の声か！」

かつてはE T F、フーマを使役していた事もあつてか、怪獣、怪人、超獣についての知識があつた。だが、こんな声をした怪獣は、ユーゼスも知り得ていない。

突然変異した怪獣若しくは超獣が打倒といった所であつた。

「……ともかく、一度確認する必要があるか」

もし元の世界を遡っていたならば、この世界の自分が犯すミスを取り消す事も出来るし、それに第二、第三の超神ゼストを生む事も阻止できる。

仮に違う世界の場合でも、ユーゼス自身の知識が怪獣退治の為に必要になるかもしれない。

そして、あの光に願つた『力』がどのように発現するモノなのか確認しなければならぬのだ。本当に願いが叶つたとなれば、その力をどう生かしていくのか重要にもなってくる。

この世界を護るのか、敵として立ちはだかるか……。

それを見極める為にも、一刻も早く外に出なければならなかつた。扉を蹴破る様にして開けた。瞬間、外の光に照らされ、一瞬周りが見えなくなつた。

「……コレは……!?」

大きな港。高層ビルが幾つか建つ此処は、どうやら日本の様だ。それも首都である東京。

世界有数の先進国の街が、怪獣一匹相手に半分以上が破壊されてた。

「何という事だ、コレは!?」

流石のユーゼスも、これには驚きを隠せなかつた。

廃屋はどうやら小山の中にあつたようで、周囲の風景が見渡せる。所々から火が出て、黒煙の筋が幾つも空高く立ち上る。

逃げ惑う人間達の波が出来ており、間違いなくあの中では事故も起きてるだろう。

目の前にそびえる怪獣……ベムラーに良く似た怪獣は人間の存在など無いに等しいと思つているのか、蠢く人の波を構わずに歩みを進

めていた。

遠く過ぎるせいでよく見えないが、ベムラーが歩く度に奴の脚周りが赤くなっている様に見えるなくもない。市民の犠牲は途方もないだろう。

あの巨体を相手に、宇宙刑事や超人機などの人間クラスのヒーローでは太刀打ちなど出来る筈などない（転生前、何度かギャバンやメタルダーがサイズ感関係なくブン殴ってた気がするが、眼の錯覚であろう）。

だが、防衛隊が出てくる様子もない。この世界にはウルトラ警備隊は無いのか？

そう思っていると、ユーゼスは音に気が付いた。

ブオオオオオ、という風を切る音だ。こんな音を出すは、彼の知るモノであろう。

『各機、連携して怪獣を潰すぞー！』

『了解!!』

「あれは……アルブレードか」

前の世界でも目にした事がある、人型機動兵器「パーソナルトルーパー」の量産機だった。ブレードトンファーとグレールガンの携行武装を持つが、果たして怪獣に効くのかは謎である。

「軍が戦っている間に……私は自分の力を知るべきか」

そう呟くと、廃屋から立ち去ろうとした。

アルブレード隊が展開している今、怪獣の目はそちらを向いている筈だ。

今が絶好の機会だった。あの『力』が直ぐ発現出来るのであれば、戦う事も可能はずだ。

ウルトラマンと同じ力をもつてして……。

「——何処へ行くつもりだ、ユーゼス・ゴッツオ？」

突如、目の前の空間に何か覆われた。白銀色のオーロラ。そのカーテンの中から現れたのは、一人の青年であった。

「っ……貴様、何者だ」

ユーゼスは即座に戦闘態勢を取った。

生身で戦えるかはだいぶ疑問点が残るが、それでも最低限、喧嘩程度なら出来る。

「おいおい、そう身構えるなって」

青年は、少しずつだがユーゼスに近付いた。一步一步、慎重な足取りで。

それと同時に、首から下げるマゼンタカラーのトイカメラを手にした。

今時珍しい二眼レフ、フィルムタイプだ。

(まさか、アレは武器なのか?)

等と思考していると、

——。パシヤリ

「クッ！」

突然の出来事に驚き、一瞬でバックステップを取った。カメラレンズから不可視光線でも出たと思ったからだ。無論、そんな攻撃ならユーゼスは回避も防御も取る事は難しい。

だが、青年は一向に攻撃を仕掛けてくる様子はない。

「考えすぎだ。俺は戦うつもりなどない」

青年はそう言うのと、両手を上にあげた。降伏の意なのか、非交戦の意なのか。

先ほどのシャッター音は単に、ユーゼスを撮っただけの事。どちらだろうと、今のユーゼスは安心した。

「貴様は何者だ?……何故、私の事を知っている」

問い詰める様に訊くユーゼスを睨みつつ、青年は口を開いた。

「俺は、門矢。門矢士」

そう言った瞬間、士はあるモノを取り出した。

辞書より小さいサイズの箱。カメラにも一見見えるソレを手にして、言った。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ」

——今ここに、全能なる調停者と世界の破壊者が並び立った。

第二話 破壊者と調停者

『お台場近くに怪獣が出現した』

そんな事を聞いて、急ぎ赤いバイクを駆る男が一人いた。多くの人が逃げ惑う中で、唯一逆方向に向かって愛車を走らせる。恐怖がない、という訳では無かった。だが、真実を公表するというOREジャーナルの方針の為に、この騒ぎを報道し切ろうと心に決めたのだ。

バイクを走らせている間も、爆音や悲鳴が絶えず響く。とてつもなく心が痛い。だが、今の自分は何も出来ない程無力だ。

人、一人の命すらも護る事なんて出来ないかも知れない。

——人々を護る『力』があれば……………。

ふとそんな言葉が浮かんだが、頭を振って考えを払った。一介のジャーナリストが、そんな事を持てる筈ないのだから。

——ここは素直にウルトラマンを信じよう。

そう思って、城戸真司はバイクのスピードを上げた。

「……………仮面ライダー、だと?」

聞きなれない単語に、ユーゼスは多少だが首を傾げた。

「そう。…………お前の言葉で言えば、正義の味方、って事か?」

そう言うと、持っていたデバイスらしきモノ——デイケイドライバー——を腰に当てた。すると、それがベルトとなり、腰に巻かれる。更に士はライドブツカーから一枚のカードを取り出した。中央に描かれるのは、トイカメラと同じくマゼンタピンクの色をした仮面の戦士。

そのカードを裏返すとベルト——デイケイドライバーに装填、サイ

ドハンドルを勢い良く押し込んだ。同時にある言葉を言いながら。
「変身」

—— K A M E N R I D E D E C A D E ! ——

突如、士の周囲に10人の似たような影が出現し、次々にそれが体に組み込まれる。更に幾つかの線が空に浮かび、それが顔面に刺さった。

体を覆うスーツがマゼンタに染まり、目が緑に輝く。

左右非対称の体。胸には漢字の「十」の様な意匠。

「——仮面ライダーディケイド」

「ディケイド……」

その姿を見た時、ユーゼスはある事を思い出していた。

転生以前の世界にも、似たような戦士達が居たからだ。

共にバード星からやって来た宇宙刑事達、ギャバン、シャリバン、シャイダー。

地球人によって造られた人造の戦士達、キカイダー、メタルダー。

士の様に変身し、戦闘スーツを身に纏う男、快傑ズバット。

彼らとディケイドの違う所は（一応色々差異はあるが）、彼らは仮面ライダーとは名乗らなかった所くらいだろうか。

「見て分かったか？コレが俺だ」

そう言うドライダーのサイドハンドルを引つ張る。すると、一瞬でディケイドから門矢士へと元通りに戻った。

ギャバン達もそうだが、この機能はどうやってたら出来るのだろうか。科学者の血が騒ぐのも無理もない。

「さて、それじゃあアンタの正体を見せてもらおうか？」

士は近くに倒れていた古木に座ると、興味と警戒が織り交ざった眼でユーゼスを見つめた。

「……………まだ、私は自身の力を試した事がない。無意味にこの『力』は使いたくないな」

ユーゼスは自身の変身を明かす事を拒んだ。

如何せん、まだ一度もこの『力』を使っていないし、何よりライダーの様な変身が出来るかすらも分かっていないのだ。

化け物、果て待てデビルガンダムの様な異形になってしまいうやもしれないのだ。

仮に『力』の加減を間違つて暴走した時にこの男——門矢士と言つたか——が止められるならまだしも、それでもし超神ゼストと同等、それ以上の力ならばこの世界が崩壊してしまう可能性も有つた。

かつての浄化弾の様な事は繰り返してはならないのだ。

「全能なる調停者という割には、思った以上に臆病なのか？」

「貴様ツ……！」

ユーゼスは士に駆け寄り、胸倉を掴んだ。臆病、という言葉が、彼の中で大気浄化弾の失敗に重なっていた。

浄化弾の失敗、警備隊に拘留され、重症を負い、アイデンティティを失いかける……。

ユーゼスにとっては、二度と思い出したくもない記憶だ。その失敗があつたからこそ今持っている『力』を使おうとはしないのだが。

「それに、俺の相手をしている暇があるのか？あの怪獣、もつと被害を増やしているぞ」

「何っ!？」

たった数分間目を離していた隙に、ベムラーは先ほどのアルブレイド隊を全滅に追いやるうとしていた。

大破しながらも辛うじて動いている一機が、ベムラーの頭部目掛けでグレールガンを放つた。

投射される実弾がベムラーの左目を抉り、そのまま左側頭部を吹っ飛ばした。

飛び散る脳漿と肉片。だが、ベムラーは何事も無かつたかの様に残った右目でアルブレイドを睨みつけた。

『うわああああああああああああ!!!!』

通常種ならば細い腕だが、このベムラーは片手でアルブレイド一機を軽々と持ち上げる。握りつぶされた頭部からはオイルが噴き出し、まるで断頭された騎士の様に見える。

そのままアルブレイドを頭一つ分程高く上げると、コックピットが丁度口と同じ高さになった。

ベムラーは大口を開け、口の中では閃光が灯る。

「マズい、あの距離で熱線をまともに食らうとなると……」

——ギヤアオオオオオオツ!!

叫びを上げながら、ベムラーは熱線を放射した。無論コックピットに直撃する。

放射された直後はまるで効いていないが、徐々にその装甲が鉛細工の様に蕩け出す。そして、

『助けてくれエ、助けてくれエ!!』

パイロットは迫りくる死への恐怖に、ただ泣き叫ぶだけであった。

無慈悲にも叫びは届く事なく、熱線は装甲を次々溶かし、アルブレードを両断した。

「まさか……この世界の怪獣は、あそこまで進化しているのか!?!」

E T Fにもヤプールが開発した超獣が居たが、あそこまでの凶暴な進化を遂げた者は少なかった。

ベムラーなど、ユーゼスにとってはアルブレードの様に使い捨てる駒の様なものであった(そもそもE F Tが駒だったけども)。

とてもじゃないが、P T程度では止められる筈もない。S R Xやウルトラマンでなければ——

「……………この『力』を使わなければならない、という訳なのか?」
確かに『力』に興味はある。だが、そんな興味が招いた結末を知っている故に動く事が出来ないのだった。

超神ゼスト。

捕獲したウルトラマンのカラータイマーを分析、複製を行い、その力を利用しあらかじめ造らせておいたアルティメットガンダムとクロスゲート・パラダイム・システムに力を与えた後の最終形態。

その姿はどことなく彼の光の巨人と似ており、繰り出す技もまた酷似したモノであった。

C P Sの力を完全に使える様になった状態のゼストはまさに生命を超越した存在、神の如き力によって因果律を支配出来た。

イングラム達にヤプール人が何度倒されても、気が変わらない限り復活させる事が可能であったし、それ所かイングラム達の存在自体を

消す事も出来ただろう。

再びその能力を手にした時、また同じ事を繰り返しかねない。そう自覚しているのだ。

力は人を増長させ、理性を消失させる。

ユーゼスの様な頭の良すぎる人間程、飲み込まれやすいのだ。

「この世界にはウルトラマンが存在する筈だ。彼らが居れば、私など必要ない」

そう言い切ると、ユーゼスは士に背中を向け、何処かに行くのか歩き出した。

「……………此処にそんな奴らが居るかなんて、俺が知る由もないけどな」
ぶつきらぼうにそう一言だけ士は言った。

「何を言う。お前はここの世界の住民では無いのか？」

「ああ。俺は、並行世界から来たからな」

「何……………」

ユーゼスは、自分と似た様なこの男を一睨みした。

「……………私の事を知っていた、という事も関係あるのだな？」

「そうだな……………アンタの事を知らされて、こんな世界に来たからな」

士はそう言うのと立ち上がり、ユーゼスに近付く。

「——お前、因果律を操作する気なのか？」

「ツ!!何故、その話を!?!」

「前の世界で会った奴からそんな話を聞いたからな。……………もしそんな事を再びやり始めた場合、ソイツを殺しても止める……………ってな」

大方、その者は因果律の番人が寄越した使いなのだろう。ユーゼスが犯した罪は重い。

だがそもそも、別世界のユーゼスが並行世界を無理やり繋げ、虚構の世界を作り上げていたのだ。

要注意人物に指定されるのも、当然といえよう。

「で、どうなんだ?今の所」

「……………今の私は、かつての罪を償おうとも考えているのだ。あんな真似はもうしなくはない」

ユーゼスは素直な感想を言ったが、聞いてきた本人である士は特に

面白くなさそうな顔をしている。

そんな事に若干イラつきを覚えるも、どうにか心を静めた。

「……しかし、参ったな。幾らディケイドの力があっても、あんなバケモン相手にどうしろって言うんだ？」

士はそんな事を言いつつ、ベムラーを眺めながら少し頭を掻いていた。

『世界の破壊者』なんて名乗っていたのだから、多少の『ルール無視』も容易そうだ。だが、あんな巨体相手ではどうしようもない。

仮面ライダーJのカードがあればまだしも、ソレを持つていたのは仮面ライダーディエンドこと海東大樹だ。別に40m程の大きさで戦わなくとも良さそうだが、現在の力だけであの怪獣を吹っ飛ばせられるかが問題だった。

「……それに、殆どのライダーにも変身出来ないしな」

ボソツと小声でそう呟いたので、ユーゼスには聞こえはしないだろう。

何故かは知れないが、士はこの世界では他のライダーに変身出来なかった。

クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、カブト、キバ。

7種のライダーカードを試したが、いずれも何故か『ERROR』扱いされて変身出来ずにいた。

その原因と思ってユーゼスを訪ねたのだが、どうやら彼の力ではなさそうさ。

ユーゼス自身、その力がどういう物なのか分かっていない為、確証は持てないが、彼から放たれる違和感やディケイドライバーとライダーカードに干渉する様な感じではなさそうであった。

無論、士の考えであるから、どう転ぶか分かったものではないが。

「ユーゼス・ゴツツオ自体がどうなるか分からないんじゃないしや、話にもならないな……俺は傍観者を気取ってみるか」

そう言うと、士の背後に再びオーロラが出現した。

……それに、まだ確認しなければならぬ事があった。

「っ、貴様、何処へ行くー」

「これ以上、この場所にとどまるとくのも危険なんだな。俺は一旦退散させてもらう」

「そう言い残すと、ユーゼスを残し一人オーロラの中へと消えていった。」

完全に土を飲み込んだオーロラもまた消滅し、元あつた空間に戻る。

「彼がそこに居たという証拠は一つ残らず消えていった。」

「……………私の力を傍観する気か」

「大体の土の予想を立て、ユーゼスはそう結論付けた。」

「ユーゼス自体、能力を知らないのであれば、外から観察する事が一番だろう。」

「……………なら、その手に乗ってやろう」

「ユーゼスは小山を降り始めた。」

「目指すべきはベムラーのいる街の埠頭。」

「そこならば被害が出て最局限で済むと思ったからだ。」

「——奴と、戦う——」

「どうなるかは分かったものじゃない。だが、これで再び死ぬのであればそれでも良かった。」

「どうせ因果律から逃れられる訳ではない。その時が終わりだったという事だ。」

「だが、この命は最後まで使わせてもらうぞ……………」

「かつてユーゼスが起こした事を、誰かが知っている訳でもない。」

「だが、彼はそれでも贖罪をしたかった。」

「ウルトラマンが教えてくれた事。宇宙に神など要らない。ウルトラマンもまた、人間と同じ銀河の同胞だという事。」

「それを命を懸けて気付かせてくれたあの巨人達に、今度は別の方向から近付きたかった。」

「同じ、同胞として……………」

「——私に応えろ、ゼスト。正義に立ち上がれるのであれば、再びその力を……………ウルトラマンと同じ力を、この私の示して見せろッ!!」

「ユーゼスの咆哮は、彼を取り巻く空間に響き、そして——」

——虚空の彼方から、かつて『超神』と呼ばれた者を呼び起こした。

第三話 意思、形となりて

——ウルトラマン

地球を守る為に遠き星M78星雲からやって来た、光の巨人。

人間の科学と力では倒す事が難しい怪獣や宇宙人を、光線やパンチで軽々と倒す存在。

人間からしてみれば、彼らこそが『神』であった。

だが、怪獣や宇宙人からしてみれば、それは勝手に宇宙警備隊を名乗り、勝手な理想の為に同胞を惨殺した存在。一族の仇である。

彼らからしてみれば、彼らこそが『悪魔』『敵』であった。

——立場によつては、ウルトラマンも殺戮者と化する。

そんな言葉を、ユーゼスは深い意識の底で聞いた気がした。

城戸真司は、人気のないビルの屋上に勇気を振り絞つて上つていた。

怪獣の吐き出した熱線が流れてくるかもしれない。だが、そんな事も恐れずに状況を記録していた。

手に持った今は懐かしいガラケーを急ぎプッシュ。周囲の状況、怪獣の特徴、その他諸々をメールに急ぎ書き込み、送信。今頃、大久保

編集長が確認している頃だろう。

「あと……………少しでッ!」

最後まで文字を打ち込み、送信。成功したダイアログが表示され、ガラケーを折り畳んだ。

「ふう……………」

途端に、肩と腰の力が抜ける。床に倒れ込む様に寝ころんだ。

真司はやり切ったという達成感と、この後果たして生きれ帰れるのかという恐怖感を同時に感じていた。

とつと走り出して逃げ出したい。そんな気持ちで取材をしていたが、終わってみれば呆気ないモノであった。

まだ力が入りにくいがどうにか立ち上がり、後ろを振り返った。

怪獣。ベムラーが廃ビル群の中を歩いていて、アルブレードによつて潰された筈の左目は何時の間にか再生しており、鋭く血走った双眸が周囲をグリングリンと見まわしていた。

見つかってしまったかもしれない危機感を抱きつつ、真司はビルの階段をダツシユで駆け降りる。

と、その時――

「ぎやあああああッ!」

「っ、大丈夫ですかッ!」

ビルの広間から飛び出した直後、目の前を走つて逃げていた少女が盛大にこけた。前のめりにいったものの、手が辛うじて受け身を取っている形になっていた。大事には至っていないだろう。

真司は少女に駆け寄り、怪我をしていないか診た。

案の定膝を擦りむいているが、大した事はない。

「おい、遼子ッ!大丈夫か!」

付き添いだろうか、学生服の少年が駆け寄つて来た。

少女に問いかけると「大丈夫だって……………」と返事が返ってくる。だが、苦痛に顔を歪めていた。

「俺が手伝うよ。さあ、肩を貸して」

こういう時に、人助けをしてしまう。

城戸真司の悪い癖なのかもしれないが、今がそれが少年少女にとつ

て心強く感じられた。

「すみません、ほら、肩貸せつての」

少年も真司に倣つてもう片方から少女を支える。

「避難シエルターはすぐそこにあるから、そこまで急いで行くぜ」

取材前にシエルターまでの経路をどうにか頭に叩き込んでいた真司は、二人と共に急ぎ足で向かう。

だが、少女が脚を引きずる形の為、足取りはとても遅い。避難する人の波の中でも後方になりつつあった。

「クソツ、怪獣がもうそこまで来てるつてのに！」

イラつくのは、怪獣に対して。

何故、今頃世の中に出てきたのか？

もう数年間も眠っていた筈のソレが、何故今という日になって蘇つたのか？

誰も答えを述べる事など出来ない。だが、唯一それを知る自然の化け物はもう後ろまで迫っていた。

「こんな所で、死んで堪るかよおおっ!!」

少年はそう叫ぶ。

真司も同じ想いであった。

——願いは届いた。

直後、真司はそう思うだろう。

何故ならば、頭の上が光った、そう思った時には、怪獣が後ろには居ないのだから。

轟音をたて、ベムラーは地面に伏した。

突然出現した“光球”がベムラーの腹部に体当たりしたからであ

る。

だが、ベムラーはまるで効いていないかの様にすぐさま立ち上がる。腕を使わずに、異常なまでに進化した脚と尻尾だけをバネにして起き上がると、その光球を見据えた。

ベムラーの中に刷り込まれた本能が、その光球の存在を敵視した。

——赤色の光ならば、忌まわしき『ヤツ』であるからだった。

だが、その光は赤紫色をしており、『ヤツ』とは違う感覚がした。

一時の間、同じ場所に滞空していた光が、強くなっていく。

——『奴』と同じ、又は似た存在が出てくる。

そう直感した時、再びベムラーの体は宙を舞っていた。

「ギョルルアアアアアアアアッ!」

突然の出来事に、ベムラーは驚きの叫びを上げた。

今度はしっかりと受け身を取った為倒れる事は無かったが、そのままだま立ち呆けしている事もマズかった。

「宇宙怪獣、ベムラー。その『亜種』、か」

未だ残る強い光が、徐々に消えていく。

その向こう側から現れた者はそう眩くと、腕を強く振った。

ブワツ、と突風が吹くと同時に覆っていた光が一瞬で消えて——いや、闇で中和されたと言うべきか——無くなった。

鋼色と黒が混ざり合った肉体。

胸部には青い球体が埋め込まれ、宝石以上の輝きを持ち合わせている。

背部から生えた羽からは悪魔、邪神の様な禍々しさを放っていた。

それは「光の巨人」とは似て非なる存在。ウルトラマンに極めて近く、限りなく遠い存在。

『光』と『闇』、相對する二つの存在を体内に備えた巨人。光が失せた空間上に、ベムラーを眼前に捉えて立ち塞がった。

「——まさか『あの力』が此処まで再現されているとは。……流石に、因果律を操作する事は出来そうにないが、戦うだけの力は有る様なだな」

ユーゼス・ゴッツオは巨人の中で、超神ゼストの意識として存在し

ていた。

ゼストの右手を握る感覚はそのままユーゼスの感覚となり、ユーゼスが歩む様にすれば連動する様にゼストは前に進んだ。

超神ゼストとユーゼスは再び一つになった。

かつてイングラム達と対峙した時と同じ、細胞一つ一つまでもが巨人の一部として完全に融合していた。

「……さて、私の力、試させて貰うぞ」

そう言うとゼストは地面を踏む。

跳躍。

力んだ事でコンクリートが吹き飛ぶ。小さなクレーターが出来、同時にゼストの体は弾丸の様にベムラー目掛けて飛んだ。

風を斬るその速度に、ビルのガラスが一斉に割れた。ソニックウエーブによって粉塵が舞うのと同時に、ベムラーもまた大空に吹っ飛んだ。

「——ッ!？」

声を上げる事さえ出来ない程の速度。

高速に繰り出されたナツクルは的確にベムラーの顎を捉えていた。

アッパークットされたベムラーが重力降下してくる。だが、ベムラー自身は大した事が無かったかの様に、腔内に閃光を蓄える。

「そうか……ならば、その手に乗ってやろう」

ユーゼスはそう言うと、手を十字にクロスした。だがその手は、ウルトラマンのスペシウム光線を意識して。

ゼストの腕からスパークが放出され、それが掌を包むように滞留する。

「フッフ……ファイナルビームッ!!」

ベムラーの口から熱線が放出された。ベムラー自身も鋭く光らせる閃光が、ゼストに向けて降り注ぐ。

だが同時に、ゼストの十字にされた手からも光線が発射された。素粒子をも溶かしつくす光線。全てを焼き尽くす力がベムラーの口を目掛けて飛び行く。

当然ながら、その二つの光線は一点で交わった。

空中で爆発的な閃光が生まれる。光線の融合点の周囲が揺らめき、時空を震わせる。

「ギャアオオオオオオッ!!」

ベムラーの叫び。何を意図して放たれたのか、その咆哮はビルを崩壊させる程空気を震動させる。

ゼストに、その中に居るユーゼス・ゴッツオにもその響きが伝わった。

「す、凄え……………」

未だシエルターに入る事に手こずっている真司はそう呟いた。

ビルの隙間の端々から見える怪獣と巨人。

それはこれまでもも起きた怪獣と巨人、両者の闘いにやはり酷似していた。

十年前に起きた『怪獣総攻撃』と『第一次異星人戦争』。

人類が三人のウルトラ戦士——マン、セブン、ジャックと共に、怪獣・異星人と戦った戦争。

ずっと膠着状態だったが、ウルトラ戦士が全ての光の力を使い果たす形でどうにか異星人を撃退し、暗黒の戦争は幕を下ろす事になった。

それからというモノ、対異星人用の機動兵器『パーソナルトルーパー』が開発され、より怪獣対策に特化したチーム『GUTS』が発足された。

そして二年前……………。

再び蘇った怪獣達、再度侵攻してきた異星人達、世界の最後を示すかの様に現れた邪神ガタノゾア、そして全ての宣告者ジュテッカ……………。

超古代から蘇った光の巨人『ウルトラマンティガ』と異星人との闘いの為に開発されたスーパロボット『SRX』、そして様々な協力者

達によって、ティガを失いつつも戦争を終わらせる事に成功した。
全てが終わったそれから、ウルトラ戦士を誰一人として見た者はい
なかった……。

………筈だったのだが、

「だけど、何でまたウルトラマンが………」

真司は持った疑問について考え始めていた。

あの白黒の巨人は、限りなくウルトラマンに近い姿をしていた。つ
まり、アレは新たに現れたウルトラマンなのかも知れない。

だが、どうも腑に落ちない。あのカラーのウルトラマンを見れば、
人々は彼を敵と怪しむからだ。

何せ、パツと見ではイービルティガにそっくり過ぎる。

二年前、マサキ・ケイゴと呼ばれる科学者が変身した悪の巨人。神
となり人類を導こうとした彼の悪行は、O R Eジャーナルの一大
ニュースとして取り上げた。

そんな事もあってか、突然現れた巨人に対する期待感も不信感も、
両方が人々を取り巻いていた。

「………アレは、味方のウルトラマンです」

さつき少女と共にいた少年がそう言う。その眼差しは、巨人に向け
られていた。

「何で………そう思う？」

「あ、いや、何となく………ですよ？」

特に理由などなかった。信じれば、それが正しい。そんな気がし
た。

「あの怪獣と戦っているから、そうも思えるけど………」

真司はそう言いながら、再び怪獣と巨人を見やった。

(俺は無力だ……。戦う事など出来ない……)

戦う、という言葉は色々な事を意味する。殴り合う事が全てではな
い。真司の戦いは、正しい事を報道するという事だった。

………だが、あの闘いを見て、真司の中の何かが切れた気がした。

戦う事……人々を助ける事が出来たのではないのか？

平和を作る『力』を持っていたのではないのだろうか？

そんな詮索をするが、そんな『力』を持った覚えはない。

断片的なナニカが彼の頭を掠めていった。

自分が人々を護る『力』を持つビジョン。それはかつて経験したか
の様に見えた。

「クソツ……………」

だが、今の彼は何も出来ない。真司は頭を振って、変な考えを払っ
た。

「頼むぞ、ウルトラマン……………」

第四話 光と闇を持つて

旧ダイバーシティ跡地に急ぎ建てられた救助キャンプ。シエルターに避難していた人々はそこに集まっていた。

既に怪獣の姿はない。骸は何処にも見当たらず、ただ破壊された都市の惨状しか残っていなかった。

——それでも、まだマシな程度だが。

お台場周辺のビルは全壊しているが、その他の区には被害が出ておらず、人的被害も想定された数を大幅に下回っていた。

「……約270名が行方不明又は死亡し、2000人が重軽傷。被害総額は約1000億円まで相当する、か」

ユーゼス・ゴッツオは救助キャンプに居た。体中に出来た打撲に擦傷、軽い火傷の治療の為に立ち寄った時に、この数字を聞かされたのだ。

治療をした医者には愚痴る様にそんな話を言っつて、サツサと処置を終えた。別に腕が悪いわけではないらしいが、こうもけが人を診過ぎると人間鬱になるのも分かるというものだ。

「怪我は大した事ないが……これからどうするべきか……」

腕に巻かれた包帯を見ながらそう呟いた。

つい先程、この世界にて覚醒したばかりのユーゼスは身寄りなどない。生きていく為にも、何か行動を起こさなければならぬのだ。

怪獣と戦う以外にも、ユーゼスの『戦い』は始まっていた。

「この世界の混沌……立ち向かう為には組織が要るか……」

心当たりはある。だが、この世界ではどういう形になっているか等分かる筈もない。ともかく、この世界にも存在する『彼ら』と接触する事を急がねばならなかった。

そんな時、ふとユーゼスは目を他の場所にやった。

キャンプの端、炊き出しが行われるそこには、人々が“笑顔”を忘

れずにいた。生きとし生けるからこそ笑える。

かつて人間としての道を踏み外した事もあったユーゼスは、自身が護った者達を眺め続けた。

彼らを護る。笑顔を。命を。それは人間として、銀河の同胞として……。

「——流石に、腹が減るものだな……」

グウ、と鳴った腹をさすりつつ、彼も炊き出しの方へと歩き出した。

——数時間前——

「ギュララアアアアアアアツ!!」

「——ッ、グハツ!」

ゼストは地面に叩きつけられていた。

ゼストファイナルビームと熱線がぶつかり合った直後、超神ゼストの力が弱まったのだ。

「な……何故だ!?何故、この力があの怪獣に負けるのだ!!」

ユーゼスは自分の力を過信していた訳では無い。

だが、ベムラー亜種と闘うと徐々に力が抜けるような感覚がしていた。

まるで闘う度に命が削れるかの様な、まるで呪われているみたいだった。

「ヤプール人や、かつての亡者共に憑りつかれた訳は無いだろうにッ!」

そもそも因果地平の彼方まで付いてくる邪霊などあるわけない、等と無駄な考えを起こし始めたのと同じくして、ベムラー亜種はゼスト

と距離を取り始めていた。

クロスレンジでの戦闘になれば、最初の時と同じく相当な速度の打撃を食らってしまう。

先ほどのアツパーカット程度ならば問題など無いが、懐に潜り込まれればそれだけ大ダメージを受けてしまう。数回の打撃を受ければ再起不能まで陥る可能性だってあり得るのだ。

「ギョルルウ……………」

誰かに是非を問うかの様に唸る。ゼストに聞こえる事はないが、その声は『彼ノ方』へと繋がった。

———そうか、アレが不確定要素の一つですか……………
何処からともなく聞こえる声。

———やはりこの世界『でも』、あの男は現れる訳ですか……………。

流石は『因果律の鎖』によって魂と記憶を縛られた男———
ベムラー亜種の瞳がゼストを見る。その奥に輝く瞳孔が開き、レンズが露光される。

同時にベムラー亜種の脳内に映し出された『映像』が何処かへと送られる。

———おや……………？超神ゼストの力を持っている……………という事は、因果の力を？———

未だ立ち上がる事が出来ていないゼストだったが、廃ビルを支えにどうか立ち上がる。

体がふらつくものの、立ち尽くす程度なら問題はないだろう。……………つまり、戦う事は出来る事など現状では不可能に近かった。

腕を上げる事ならまだしも、それを先ほどの様に振り抜く事は出来ない。

ベムラーを見やると、まだピンピンしている様子だ。

「ええい、奴に劣っている筈など……………」

ゼストの力はかつてと寸分違わずあつた筈だ。だが、何故か徐々に失われていく。まるで、異物を『世界』自身が排除しようとしているかの様に……。

「……まさかクロスゲート・パラダイム・システムが無い故に、か？」
ゼストの中にあの装置は感じられない。因果律を操作出来る程の力がなければ、あの超人的な力は出せなかったという訳だ。

……それもそうだ。不死身でいられたのも、因果律を操作する事によつて攻撃自体を『無かつた事』にしていた故に、CPSの力が影響していないゼスト自身が無敵な訳など無いのだ。

体が重く感じるのもゼストの力が不完全故だろう。

「先程までのあの感覚は、どうすれば元に戻るといふのだ！」

誰も答えは知らない。だが、誰かにそう投げ掛けたくなるのは致し方無いのかもしれない。

ユーゼスが天才だとはいえこんな事態を想定している事はないし、それ以前に不可解過ぎるこの事態への対処を考える時間があまりにも少ない。

頭脳派であるは、こういう時にどうするかというのを知らないのだった。

……ある事を除いて。

「フッフツ、私も焼きが廻つたのか？根性だけで、立ち上がろうとするとは……」

少し力の弱まりが抑えられた事で、ゼストは再び戦闘態勢を取る。すると、心臓が締め付けられるかのような激痛が走った。

「ッ、これは……！」

——ピコン、ピコン、ピコン——

胸部に埋め込まれたクリスタルが、先ほどまでの青から赤色で点滅し始めた。警告音の様な音を発しながら……。

「三分間……いや、それ以上の時間が経過している？なら、何故点滅し始めたのだ！」

ウルトラマンは、太陽エネルギーが届きにくい地球圏では約三分し

か活動する事が出来ない。その活動限界を知られるのが、胸にあるカラータイマーだ。

その光が失われる事はすなわち、ウルトラマンの死でもある。

だが超神ゼストはカラータイマーの力を応用しているとはいえ、純粹なウルトラマンではない。CPSの莫大なエネルギーを使用していた故に、胸部のカラータイマーもどきが点滅する筈などなかった。それが、現に点滅している。これはゼストの活動限界なのか、それともユーゼス自身の体力の限界なのか……………。

「さしずめ、ライフゲージとでも言うべきか……………?」

どうやら、力の低下はカラータイマーもといライフゲージの点滅と連動している様だ。なるほど、ウルトラマンに変身していた者達もこの様な思いをしていたのだろう。

「ギュロロオオオオツ!!」

ベムラー亜種が突進してきた。ゼストの力が少なくなつた事を感じたのだろうか、止めと言わんばかりに駆けだしてくる。

ゼストは迎え撃つ為にも、腕を再び十字にクロスした。だが、ゼストファイナルビームの一撃が限界だろう。

力が消える、という事まではいかなくとも、一時的な再起不能に陥る事は必死だ。

「……………だが、それでも私は、戦わなければならんだ!」

ウルトラマンなら、こんな時でも諦める事はない。

ユーゼスは己の信念を信じた。かつての彼らと同じように。

「ゼストファイナルビーム……………デット・エンド・シユートオオオツ!!」

手がスパークし、放たれる光線。先程とは威力も随分落ちている。だが、

「ギュルアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

それがベムラー亜種の腹に直撃した。削り取るかの様に皮膚を消滅させる。それが徐々に腹の肉まで抉り返す。

苦痛の叫びを上げるベムラー亜種だが、それと同時に口から熱線を乱れ撃つ。乱射された光は、ゼストの全身に叩きつけられた。

「グツ……………だが、まだアアアツ!!」

ユーゼスは心が熱くなるのを感じた。

全身に激痛が走る中でも、力が失われていく中でも、奴を倒す事を諦めたりなどしない。

(成程……………イングラムもまた、こんな気持ちで私と戦ったのだな……………)

そんな事を思いながら、ユーゼスは意識を目の前の敵へと向けた。それに応えて光線も勢いを増し、ベムラー亜種にぶつかっていく。ライフゲージの点滅音すら聞こえない程にユーゼスは集中していた。残された力も全て持つて行くかの様に。

「貴様は……………虚無へと帰れツ!!」

ユーゼスは振り絞ってそう叫んだ。

「ギヤアアアアアア……………」

ベムラー亜種の咆哮が途絶え始める。——否、徐々に聞こえなくなった、と言うべきか。

ベムラーの体が、存在が、空間から消えた。

消し飛ばした訳ではない。それは本当に『存在を消した』のだ。

ゼストファイナルビームに付加された力。

肉と魂を虚無へと還す、ゼストに残っていた『闇』とも言うべき力。完全に事象自体を制御出来たCPSから取り出されたその力は、ゼストの体内で一对の天秤として存在していた。

『光』と『闇』

かつて闇の巨人であり、今は光の巨人となった超神ゼストの中に眠るそれは、ユーゼスの新たな力。

世界を変えられる程の、強大過ぎる力。

巨人が再び現れたこの日を境に、世界は、崩壊の序章へとページを進めた……………。

第五話 蒼き戦神、黒き巨人

「――何故だ……………」

鋼の巨神は、遂に地に伏した。

目の前に広がるは、共に戦ってきた仲間たち。

……………の動かなくなった姿。

眼前に立つ者は、青き鋼鉄の巨人。

両目と胸にある意匠のみが光を放ち、それ以外は漆黒の闇の如く黒い。

まさに恐怖の象徴。死を誘う死神。そして、人間に宿りし『闇』……………。

あのユーゼスですらも経験のないであろう程の闇。

ゼストの力など到底及ぶ筈もない程の深い闇の力は、既に幾人もの仲間を惨殺した。

二つの力を使う超神、太陽の輝きを持つ仮面の戦士、光を宿す巨人、純白の魔導士、戦場で歌う戦姫、漆黒の亡霊……………。

皆、この悪魔によって命を失われた。

横たわるゼストの胸部、ライフゲージは既に光を失い、動かなくなった亡骸は寸前まで最後の足掻きを見せたのか、ゼストファイナルビームを放とうとしていた。

だが既に立ち上がる者は居ない。横たわる骸のみが無情に転がっているだけ。

最後まで戦う意思を持った戦士は、たった一人だけ。

「……………何故なんだア！何でアンタが!!」

既に全身の制御も困難になった鋼の巨神、SRXは、最後の力を振り絞って立ち上がるようにしていた。だが……………

——デユワッ！——

「ッ、グワアアアアッ!!」

巨大な凶体を、一撃で蹴り倒された。それと同時に、頭部が吹っ飛ばされる。

——否、その下から二回りも小さな頭部が露わになった。

試作型パーソナルトルーパー、R-1。そのメインカメラである。

その鋼鉄の機神の内部に居る男——リュウセイ・ダテは、意識が遠のくのを耐えながらモニターを見た。

先ほどの衝撃のせいでヘルメットが割れ、頭部からは出血していた。もう助かるかも分からない程度、出血が激しい。

ぼやけた視界に映し出された者は、目の前にただ立ち塞がっていた。

……
無言で、だがその口角を上げて、無残な姿のSRXを見下ろしていた。

邪悪な笑みが、念動力者であるリュウセイの脊髄を一瞬で凍てつかせる。

巨人は右手を構える。手刀の様に手を鋭くし、それを後ろに引く。ポタポタと滴る液体はパーソナルトルーパーのオイルなのか、それとも誰かの血液なのか……。

「何故だ………何で………」

絞り出す様に一言一言言葉を紡ぐ。

だが時は冷酷に、彼の終わりを告げようとする。

「何でこんな事ッ——」

咆哮を上げたりユウセイだったが、その眼前には既に巨人の腕が迫っていた。

——フンッ………

巨人から突き出された右腕。それが向かう先、それはSRXの胸部。

「あッ——」

軽々と装甲を突き刺した。それと同時に液体が巨人の顔面に付着

する。背部まで貫通した腕には、幾つかの小さな塊が付着していた。真つ赤になったソレは、たった数秒前までリユウセイ・ダテを構成していたモノ。見るも無残に挽肉になった姿であった……………。

最後の一人の息の根を止め、巨人は再び笑みを浮かべた。

——地球最強の部隊は今ここで、滅び去ったのだった。

北米、テスラ・ライヒ研究所。

パーソナルトルーパー、特機の開発を手掛ける一大研究所である此処に佇む、一つの陰があった。

全身が蒼く染まった機神。テスラ研が開発したスーパーロボット、ソウルゲイン。

顔面には白いひげの様な角が伸び、体中にちりばめられた緑色の球体が勇ましく光っている。

異星人や怪獣との闘いを念頭において開発せざるをえなかったこの機体は、機動兵器というよりも『戦神』の様に思えた。

そんな雄々しき戦神はただ一点の方向だけを向いて、その時を待っていた。

『……………聞こえる、アクセル?』

通信機から聞こえる女性の声。 “転移” も近い為か、画面には『S

OUND ONLY』と質素に描かれていた。

「ああ、聞こえている……………来たか？」

ソウルゲイン内のコックピットに居るアクセル・アルマーは音声通信に応える。

彼が首を動かすのと同時にソウルゲインも同じように動く。

モーショントレースによって動かされるソウルゲインは、まさしくアクセル『自身』として戦ってくれるだろう。

『ええ。コードはお馴染みの……………あの頃で言う《テイガ》、ね』

——テイガ。

その言葉を聞いて、アクセルは両手に力を込めた。連動して、掌に少しだが蒼いエネルギーが放出される。

「……………アレが化け物になってから、俺達は苦汁をなめさせられた。

……………因縁はキツチリと断っておくべきだな」

そう言うと、ソウルゲインは両手を構える。モニターの端に一つのマークが映し出されたからだ。

登録コードはやはり《テイガ》となっていた。

かつては人類の守護者として君臨していた、光の戦士。

守り人として幾つもの戦いに参戦し、地球を異星人の手から守り抜いた『ウルトラマン』であったモノの、成れの果て。

同胞である筈の他のウルトラマンを殺害し、更には共に戦ってきた地球の仲間達をも手にかけて。

それによつて異星人が一気に地球へ襲来し、国連軍は敗退。残る戦力は幾つにも満たない程であった。

「レモン、貴様はワインデルや人形共と先に往け」

既に、転移の準備は整っていた。『箱舟』さえ飛び立ってしまえば、幾ら超人的な力を持った《テイガ》ですらも追っては来れないだろう。

『待つてアクセル、貴方は……………』

「俺は奴との決着を付ける……………それに、転移までの時間を稼がね

ばならんのだろ」

まだ転移するのに必要なエネルギーのチャージが済んではない。せめてあと数分間はこの場を持たせなければならぬのだ。

自分達の、シャドウミラーが目指す『闘争が日常の世界』を実現する為に……………。

「っ、力に溺れた異星人めが」

——お前たちが、宇宙にとっての『悪』であり、それを駆除する必要がある——

——地球人こそが、望まれない世界を……………宇宙を造る——

脳髓にまで響いてくる声。

これが、奴の——ウルトラマンティガの声だとしても言うのだろうか？

「ふっ、だが俺はその世界と決別する。……………この敗北の先に、勝利を得る為に！」

そう、ここで負ける事が終わりではない。新たな始まりへのプレリウドにしか過ぎないのだ。

地球人も異星人も関係ない、力でのし上がった者こそが全ての世界……………！

——勝利、敗北……………そこに意味はない。破壊されるか創りだされるか……………——

——創造は破壊……………破壊の創造……………人間は箱舟と共に朽ちよ——

口がニヤリ、と歪んだ。それは悪魔の微笑み。死を誘う笑みだった。

「寝言はそこまでだあぁあつ!!」

一気にブーストし、ソウルゲインを飛ばす。

目の前からは、漆黒に染まった巨人が猛スピードで突っ込んでく

る。

両者は激突する事も厭わないかの様に速度を上げた。そして――

「うおおおおおおおおおっ!!」

ぶつかり合う拳。

《テイガ》とソウルゲインは真つ向から組み合った。

衝撃によって、足元にクレーターが発生する。それほどの力と力のぶつかり合いだった。

曲がりなりにもウルトラマンであつた《テイガ》の力は圧倒的。だが、対異星人、それ所か対ウルトラマン用に調整されたソウルゲインは、相対するだけの出力を持たされていた。

「舐めるな、パワーならッ!!」

製作に携わつたユーゼス・ゴッツォオですらも驚く程のこの機体は、《テイガ》を倒す為には十分過ぎる力を持っている。更にそこにアクセル・アルマーという最高の操縦センスを持ち合わせた者が乗り込めば、人類の守護者も圧倒できるとの計算であつた。

――だが、

――奴を押し……闇の力よ!――

一瞬《テイガ》の周りに黒いオーラが纏わると、次の瞬間にはソウルゲインが押され始めていた。

計算上ならば互角以上。

だがそれはそれまでのウルトラマンの力から算出された結果であつて、遥かにパワーアップを凶っている《テイガ》は計算外なのだ。

だが、それでもアクセルは止まる事はない。

「何っ、ならば!」

組み合っている左手に意識を集中させる。それによって発生するエネルギーの本流を、《テイガ》の腕に向かわせた。

「青龍鱗ッ!!」

ソウルゲイン唯一の遠距離武装。

エネルギーの本流を両手、若しくは片手から放出可能であり、収束、拡散、エネルギー弾と、幅広く応用する事も可能である。

放てるだけの最大出力で、左手から青龍鱗を放出。その直撃は大きく爆発を起こし、あっけなく《ティガ》の腕を吹きとばした。

確かな手ごたえ。アクセルはニヤリとしつつ、ソウルゲインにバツクステップを踏ませて後方に飛んだ。

ぬあああああつ!!? ——

思わぬ事だったのだろう。《ティガ》は苦痛に顔を歪めた。

千切れ飛んだ腕が地面に落ちる。爆発のせいか殆ど原型を留めていなかった。

「まずは右腕一本頂いたぞ!」

たった数秒の取っ組み合いにも関わらず、アクセルは異常なまでに汗をかいていた。

冷や汗が少しずつ乾いてきたのか、肌寒く感じる。悪寒の様にも感じられたが、それでも《ティガ》にダメージを与えられた事で気合が入り直した。

このまま押せば……或るは……

「どうやらまだ勝機は……ッ、何?!」

その時だった。

——我は、滅びぬ……!! ——

アクセルは自身の見た光景を簡単には信じる事が出来ない。だが、現実が起こった。

喪った右腕の切断部から触手が出現し、新たな腕を構成したのであった。

単なる再生能力ではない。別の何かの力が働いている、としか言いようがない程、その光景は異様であった。

いや、案外ウルトラマンという者はこういう奴らなのかも知れなかった。

自爆したウルトラマンタロウだって地味に再生していたのだから、不思議ではない。

——ヴウウウウウウウツ!!——

奇怪な唸り声と共に、闇とも言うべきオーラが更に量を増す。それはやがて《ティガ》の数倍もの大きさになり、そこで本体と一つになっっていく。

巨大化、とでも言うのか、悪夢の様な出来事は続いて行った。

「くっ、やはりな……………」

その姿に、アクセルは見覚えがあった。

二年程前に起きた、ウルトラマンティガの事実上最後の戦い。俗に『邪神戦争』とも呼ばれる闘い。

ガタノゾーアと呼ばれる超大型怪獣との決戦に敗れたウルトラマンティガは、世界中の子供たちから発せられた『光』を吸収し、更にパワーアップして復活した事があった。

現在の《ティガ》は、GUTSが『グリッターティガ』等と呼称したその形態の『闇』版とでも言うべきか。

タダでさえ全身が漆黒だったにも関わらず、更に闇に深く沈んだ様に変わっていた。

もはたかつての守護者としての姿など一つも見当たらない、まさに化け物その物だった。

邪神戦争にて滅んだ筈のガタノゾーアに似た甲殻や体組織が盛り込まれ、先程の触手が所々に現れる。怪獣とも取れる禍々しい姿へとなっていた。

「守護者というよりは外道に過ぎるぞ……………《ティガ》っ!!」

——お前たちは純粋な存在……………高次元生命体にはなりえん——

——俺が……………そう、俺こそがあああああっ!!——

咆哮し、一気に気を放った。

それと同時に、胸を覆っていた甲殻——どう見てもガタノゾーアの装甲と同じだが——が二つに割れ、中身をさらけ出した。

純粹に黄色く光った、大きな光球。

「……………あれは、奴のカラータイマーか!?!」

ウルトラマンには必ずと言っても過言ではない程付いているエネルギー球、カラータイマー。

その名残はまだ彼の体内に残されていた。

だが、そこから放たれるドス黒い狂気は、完全に人類の味方では無かった。

——ゼペリオン……………——

「っ、マズイッ!!」

開かれた甲殻の中心、光球の目の前でスパークが起きる。それが横に伸び、そして一気に拡大された。

——ブラスタアアアア!!——

前方の物体全てを薙ぎ払うかの様に放射される負の波動。

それはテスラ研の地上施設の殆どを消し飛ばし、地下への孔まで丸見せさせてしまった。

更に何より、回避が若干遅れたソウルゲインの左側腹部を掠め、装甲を融解させたのだ。

「何だ!? 想定上なら、ゼットンの火球も耐えられる筈がッ!?!」

脇腹以外に被弾箇所は見受けられなかったが、それ以上に得れたモノがあった。

あの光線に当たると最後、存在が消えゆく事……………。

ソウルゲインの後ろに存在していた筈のテスラ研施設が、丸々と削られる様に無くなっていった。

大出力のせい、地平線の彼方まで地面が抉れているのがまた強大さを物語っている。

「くっ、地下の『門』と『箱舟』がッ!!」

大きな穴をかつぽじられて、アクセルは流石に息苦しさを感じていた。

既に地表からでも十分見えてしまう位置に『アギユイエイオス』と『リユケイオス』、二つの転移装置、システムXNがある。それを両方破壊される訳にはいかないのだ。

『アクセル、今のは何なの!?!』

「っ、レモンか! 思った以上に《ティガ》が手強くてな……こんな様子」

下から浮上してくる機動兵器が一つ。ヴァイスセイバーと呼ばれるロボットがソウルゲインの隣までやって来た。

通信を入れて来たレモン・ブロウニングは思った以上に錯乱していた。

それは当然だろう。唐突に戦術核並みの被害が地表に出たのだ。

冷静に立ち回れる事は無理だろう。——たった一人を覗いて。

『……これが、巨人の真の力という訳か』

「ウインデル、出てきて良いのか!?!」

『悠長に構えている暇など無いだろう。奴を殺らない限り、我々の計画は始める事も出来ん』

更にながってくる機影が一つ。

ソウルゲインの兄弟機であり、上位機と呼べる存在、ツヴァイザーゲイン。

シャドウミラー隊の隊長であるウインデル・マウザーは戦闘形態を取りながら、ソウルゲインの前に立った。

『奴の弱点……間違いなくあの胸部に隠されたカラータイマーだろう』

『そうね、あんなに頑丈そうな甲殻で包む程だから、余程用心深い様ね』

「だろうな。……だが、その一点さえ崩せば奴は倒せる」

三機の機動兵器は、それぞれ構えた。

一方の《ティガ》は発射の反動で動けなかったのか、やっと重そう

な凶体を動かし始めた。

『速攻で片付ける。各機、集中攻撃を掛ける！』

『了解』

「やるしかない……………やれるのか、俺に？」

《《テイガ》の甲殻が再び開き始める。それはあの光線、ゼペリオンブラスターが発射される事を示していた。

「——いや、やるんだ！」

そう叫ぶと、アクセルは音声入力であるプログラムを立ち上げた。

「認証コードOK、起爆時間セット……………タイムラグは5秒……………ただの博打だな、コイツは！」

——この世界に蔓延る『悪』よ……………消え去れエツ!!——

「コード：麒麟……………！」

『コード：麒麟・極ツ!!』

『ソリッド・ソードブレイカー!!』

放たれる閃光。これまで以上の出力のそれが、大地と空を抉った。

それと同時に飛び出すツヴァイザーゲイン、ソウルゲイン、ヴァイスセイバー。

二つの閃光がぶつかり合い、時空を歪めた。

それはまるで、この世の終わりを指し示すかの様に……………。

「貰っていくぞ、貴様の首をなアツ!!」

「————マドカ・ダイゴオオオオオツ!!!」

第六話 フアーストコンタクト

「——以上で、終わらせて頂きます」

壇上に立つ男が舞台袖に歩いて行った。

ステージ端で司会を務める男がマイクを手にとり、次に進める。

「では次は……ユーゼス・ゴッツォ博士、登壇して下さい」

「はい」

司会に呼ばれ、ユーゼスは座っていた椅子から立ち上がった。そして、そのままズカズカとステージ上に登る。

その姿を見て、他の席に座る者達は「なんて奴なんだ?」「礼儀も知らんとは!」等と口々に漏らしていた。

だが、ユーゼスは気にする様子もない。

ここは日本の東京。ある会場で行われているのは、国際研究者フォーラムだ。

世界中の一大研究者たちが、自身の成果を発表する為の場。表立てはそう言われているが、実際には有名博士達のお膳立てだ。一介の名も無い博士が登壇する場ではなかった。

そこをどうにか金で買収したユーゼスは、このステージに立っていたのだった。

(このチャンス……物に出来れば、私の勝ちだな)

手にした紙を広げる。カンペなのだが、それは全く何も書かれていない白紙だった。

あんな紙など必要ない位、設計や理論は覚えている。これが発表された時、世界は戦慄する事だろう。

「私の名はユーゼス・ゴッツォ。貴方がたの様なちんけな成果などよりも、素晴らしいモノをここで発表させて頂こう」

そんな挑発的な言葉に、他の科学者達が笑い始めた。

「ははは、君の様な青二才が何を言うのだね?」

「我々よりも優れたモノだつて？馬鹿な事を言う若造だ」

ユーゼスはそんな戯言を無視して、マイクに顔を近づけた。

「私は、世界中にこの技術を提供しよう。——この大気浄化弾の技術を」

ユーゼスがこの世界に転生して二ヶ月。

日本の復興スピードが飛び抜けて早過ぎるだけなのか、お台場は既に元通りになり、ごく普通の平和な日常が戻っていた。

ユーゼスはこの世界に生きる場所が無かった。だから、最初はホームレス同然で生活をし、その間にユーゼスは色々な事を調べ回っていた。

この世界の事、ウルトラマンの事……。

最初に調べたのは、この世界の歴史であった。

この世界に生きる為には、最低限の世界の成り立ち程度は覚えておかなければならない。

そこでまず知ったのが、ウルトラマンがいつ現れたか、であった。

事の始まりは10年ほど前。宇宙怪獣ベムラーの飛来と共にやって来た初代ウルトラマンを皮切りに、ウルトラセブン、ウルトラマンジャックが地球の守りにっていた。

……だが、そんな時に現れたのが、宇宙人達の連合部隊、ETFであった。

MATと共に戦ったウルトラ戦士達は、自ら光の力を全て使って地球を守護した。

ウルトラ戦士達による決死の攻撃によってETFは壊滅。後に『第

『一次異星人戦争』とも呼ばれる戦争は幕を閉じ、それ以降8年間もの間はウルトラ戦士も怪獣も現れる事はなかった。

だが、人類のみでも地球を守る為にとの事で、ビアン・ゾルダーク博士率いるチームは人型機動兵器「パーソナルトルーパー」を開発し、来るべき異星人との決戦に備えた。

そして2年前。

古代の巨人像を人間が発見した時から、再び宇宙人と怪獣による地球攻撃が開始された。だが、呼応するかの様に人類を守る新たな守護者も同時に現れた。

現れた新たな光の戦士、ウルトラマンティガ。

地球を守護する為に造られた機動兵器、SRX。

二対の巨人の死闘によって、復活した邪神ガタノゾーアと宣告者ジユデツカは倒れ、『邪神戦争』は終結した。

世界は再び平穏を取り戻し、怪獣も現れなく無くなった。

依然として特異災害であるノイズの出現はあるものの、つい3ヶ月前前に開示された『シンフォギア』と呼ばれる対ノイズ兵器や都市伝説としてよくスレ板を騒がせる『仮面ライダー』の存在によってある程度の治安は維持されていた。

二ヶ月前に出会った門矢士も仮面ライダーであったので、後者は都市伝説ではなく実際に存在しているのだろうが、一向に顔など見せてはくれないらしい(ちなみに、現在までに確認された仮面ライダーの数は10人である)。

次に知った事。それはウルトラ警備隊やMATの事であった。

10年前までは科学特捜隊、ウルトラ警備隊、MATの三つの組織があったが、その三つを統合した新組織『GUTS』が造られていた。

2年前の邪神戦争でも最前線で戦ったらしいが、その組織も新たな組織形態に移行しようとしているらしかった。

まあ、そんな事はユーズスには関係などないが。

……だが、防衛隊というモノは利用できる存在だ。ゼストの力以外に、ユーズスは様々な技術を知っている。

パーソナルトルーパー以外にも、バード星人でしか造れない技術を。

そのブレイクスルー技術を生かせば、何処からかGUTSの者が声を掛けてくる。そう思っていた。

だからこそ――

「この大気浄化弾は、私以外の誰もが造り得なかったモノだ。それを見ても、青二才と呼べるのかね？」

だからこそ、今この場に立っていた。

結論から言うと、GUTSは釣れなかった。

だが、幾つかの研究所や組織、更には米国政府から雇いたいとの声が上がった。その数は20。やはり大気浄化弾は地球人に大きな衝撃を与えたらしかった。

かつての失敗点はCPSを造り上げていた40年の中で改善していた。

今思えば、あの改良がなければこの地に立つてはいなかっただろう。せめて、この世界の大气浄化弾は完全なモノにしたかった。

設計図は来場していた科学者全員に配っていた。一度この世界で実験した所、成功しているので大丈夫だ。レーダージャミングなどは起きる筈もない。

ユーゼスはこれからどの技術を公開しようかと悩みつつ、先程声を掛けてきた組織を比べ始めた。

この世界で役立てる場所に就きたいとは思っているが、軍事関係に

直結している企業や研究所には行く気などなかった。

そもそも米国関係が殆どな為、とりあえずは日本単一で絞って見てみる。すると、

「……………ほう、これは」

目ぼしい所が幾つか見つかる中、一つだけ、妙に鮮明に映った。

その組織は『特異災害対策機動部二課』という。

私立リディアン音楽院高等科は既に一日の授業を終え、学生達は全員各々青春を謳歌していた。

部活に精を出す者、自分の趣味を全うする者、友達と楽しく過ごす者…………。

それぞれが今日という一日を過ごしていた。

「ふいふ、今日も授業が終わったぞおーっ！」

両手を挙げ万歳している少女、立花響は叫ぶ。これでも本人的には声量を落としているつもりだったのだが、

「もう響、声が大きいよ」

隣に並んで歩く小日向未来は笑いながら言った。本人的にはこんな事が日常であるから気にする必要ないが、外なので一応の注意をする。

「立花、人の目に触れる場所でそうやっているのはどうかと思うぞ?」
「それに、もしかしたらノイズが出るかもしれないぞ?」

響の後に付いている風鳴翼、雪音クリスの二人も冗談交じりにそう言った。

平和な日常。4人にとっては一時的な平穏の日常。

シンフォギア装者達は今この一瞬を、大切に生きていた。

「……………響、アレ」

「ふえ? 未来、どうかしたの?」

最初に気が付いたのは未来だった。

通りに隣接する公園を指を指す方には、今まで見たことない風景があった。

「なっ、何なのだアレ……………」

翼が遠目から見ても不自然過ぎるソレは、クレーターだった。

3ヶ月前、『ルナアタック』によって発生した月の破片は地球の引力に引かれて落ちてくる事象が発生したが、隕石が公園に落ちたなんて事は聞いていない。

そもそも、落ちたならソニックウェーブなりなんなり起こっているだろうに。

「まさか、新手の宇宙人の仕業だったりな」

悪い顔をしながらクリスがそう言うと、未来と翼は「それはない」ときっぱり言った。

冗談をこつとも簡単に切り捨てられ、流石にクリスは口をとがらせる。

「まあどうであれ、見てみようよ!」

そう言うと、響は一人駆け出して行った。3人も渋々それに付いて行く。

「……………アレ、これ、人間……………?」

「何? それは本当か!」

響が見たモノは、クレーターの中心で見事に鼻ちようちんを作つて寝ている男だった。

赤色の髪の男は、いかにも涼しげな表情で寝ている。……というより気絶しているのだが。

「何してやがんだ、コイツ」

「クレーター作って寝るって、物凄い物好きだね」

まじめに突っ込むクリスと、ボケというよりも天然に近い事を言う響。

クレーターを作って寝る以前に、何で公園で堂々と寝ているのかも問題なのだが、それを誰も突っ込まないと、すると、

「……うう……レモ……ン……」

男はうなされるかの様に呟いた。

レモン、という名前は女性だろうか。

「……………ん……………ここは……………って、うおっ!?!」

「!!!!」

目の前に少女が4人立っている事に気が付くと、男が飛び起きた。一時目をパチクリして、状況を整理しようとしているのが目に見えて分かる。

「貴方、何故ここで寝ていたのですか?」

翼が先に口を開き、取り敢えず訪ねてみた。絵面的には、女子高校生に職質される大人。中々シユールなのは気にはいけないだろう。

「えーつと……………何で寝てんだらう?」

「いや、理由をコツチに聞くなよ」

ボケたかの様に言う男に、クリスが速攻にツツコミで切り込んだ。グサツ、という音がしたかの様に、男が苦悶の表情を浮かべる。

「ちよつと待て……………俺は……………誰だ……………どうしてこんなところに……………?」

男はそう言い始める。酔っ払いじゃあるまいし、と翼は思った。

「誰だ……………って、貴方ふざけているのですか?」

「……………ふざけるなら、もっと気のきいたことを言っているよ」

男はぶつきらばうにそう言った。もしかして本当に自分が誰か分

かかっていないのだろうか。

「もしかして……………記憶喪失？」

半笑いながら響が冗談で言ってみた。すると、

「くそ…思い出せない…。記憶喪失というやつらしい…」

「ええー」と小さく言う響。流石に本当に記憶喪失だとは思っていなかった。

それをネタにしてしまったのに若干罪悪感。

「アンタ、名前ぐらい覚えてんだろ？まさか、ソレまで忘れちゃったのか？」

クリスが若干脅す形で尋ねる。だが男は何か思った様子もなく——多分そういう癖なのだろうか——口は勝手にこんな事を言った。

「……………君の様な美人がキスしてくれたら思い出せるかもな」

一時の沈黙。だが徐々にクリスは顔を赤らめていく。

「なっ……………なあっ……………!？」

「こっちは冗談さ。……………自分が誰なのかわからないのは本当だけだね」

本当に笑えない冗談に、クリスは羞恥で真っ赤になって立ち尽くした。響がクリスをいじっているが、それもどうやら頭に入っていない様子だ。

そんな彼女を放っておいて、翼は代わりに言葉を続ける事にした。

「……………全く笑えない冗談ですね」

「本当に、全くだな」

笑いながらそう言う男は「ん？」と呟くと、少し考える。

「ちよつと、待ってくれ……………そうだ……………アクセル……………」

「それが貴方の名前何ですか？」

思い出したかの様にそう言った男に未来は聞く。男Ⅱアクセルは首を縦に振って肯定の意を表した。

「そうらしい……………よく分からん。それ以外はサツパリだ」

そう言いつつも、アクセルはほぼ無意識に近い形でクレーターに落ちていたあるモノを持ち上げた。

「えっ、刀……………」

「とうより、トンファーに近いよ？」

アクセルが寝ていた隣に落ちていた立派な凶器に、未来と響は驚きつつもそう言った。

トンファーの様な形をしているが、芯の部分には鋭利なブレードが付いている。

この状態でお巡りさんに見つかり、立派な銃刀法違反だ。

「コイツは……そうだ、ミズチ・ブレードってんだ。……ちゅうことは、俺のモンなのかな？」

正直自分でも分かっていない様だが、たぶん彼が記憶喪失になる前から所有していたモノなのだろう。

「随分と良い刀ですね」

「分かるのかい？コイツがどういうもんなのか」

「いえ……ただ、これは幾つもの戦場に駆り出されたモノですね」

幾つか刃こぼれを起こし、錆が出来ている事からそう見抜いたのだろう。翼はミズチ・ブレードを歴戦の名刀だと予想していた。

「そんなもんかねえ……」

どんなモノなのか分かっていないアクセルが空返事した、その時――

『聞こえるか、皆！』

「!?」

「ん、どったの？」

アクセルを除く4人の少女は、携帯通信機から聞こえてきた声に一齐に反応した。響、翼、クリスは特に顔を強張らせる。

一人だけ状況が読み込めていないアクセルはポツンと佇んでいた。

声の主は風鳴弦十郎。特異災害対策機動部二課の司令官であり、翼の叔父だ。

『お前たちのいる地域に、ノイズの反応が出た。数が多くはないが、気を付けろ！』

「了解！」

「ちよ、あの……何が起こってんの？」

何が起きているのか分かっていないアクセルは、未来に取り敢えず

尋ねてみた。

「アクセルさん、ノイズの事まで忘れちゃったんですか!？」

呆れたというか何というか、ともかく説明するのも面倒な奴らの事をすっかり忘れたアクセルに、未来は手短かに答えた。

「ノイズは特異災害であって、人間が触ると炭化してしまう危険な存在なんです」

「それって、アレの事?」

呑気に指さす方向には、ノイズが丁度出現した所であった。

それを見て未来は後ずさりし、同時に3人が前に出る。

「オイオイ、危険だって!下がれよ美少女三人組!」

アクセルは3人に向かって叫ぶ。だが、彼女らは引く事などしない。

「下がる訳には参りません……防人として!」

「アンタは黙ってな!アレは私たちの獲物だ……!」

「あいつ等を倒せるのは、私たちだけですから!」

各々がそう口にするのと、全員揃って深呼吸。そして、彼女たちは――

――歌い始めた。

――聖詠――

「っ、な、何だ何だあ!」

突然、少女たちから大量の閃光が放たれる。その輝きにアクセルは思わずひっくり返りそうになった。

「あれが響たちの力……『シンフォギア』です!」

「し、シンフォギア……?」

未来が言った言葉。シンフォギア。

厳密には彼女たちは装者である事を明かす事は禁じられているが、この場はシンフォギアを纏う以外には仕方がない。

ガングニールが、天羽々斬が、イチイバルが起動し、彼女たちを包んだ。

(……………なんだ……俺は、コレを知っている……………)

脳裏を掠めたビジョン。それに映されたのは、シンフォギアと呼ばれる「兵器」。

アクセルは喪われた記憶の断片に、何かを感じた。

「はぁーッ!!」

「ハッ！」

「ばぁくん☆」

3人を包む光が消え、そこにはシンフォギアを纏った少女がその場に佇んでいた。

「か、カッチョイイ〜！」

シンフォギアの姿を見たアクセルは、先程のビジョンが無かったかのように感嘆の声を上げた。

「3人とも、頑張れえ！」

少々間拔けな声援だが、彼女たちを震えだたせるには十分だった。

「行くよ二人とも！」

「言われなくとも！」

「ぶっ飛ばしてやるぜ！」

響の腕のアーマーが可動し、肩まで伸びる。その駆動音が、開戦の合図となった。

「ハアアアアアアッ!!」

3人は守るべき明日の為に、ノイズの群れへと突っ込んで行った。

第七話 護る為の力

「——マジかよおおおおおっ!!!」

愛車である赤のズーマーが猛スピードで街を駆け抜けていく。法定速度なんてとつくに越え、それでもなお城戸真司はアクセルをかける。

日本を象徴させる東京の繁華街には人気一つもない。特異災害、ノイズの出現によって、市民は避難シエルターへと避難している為であった。

これまで幾度か真司も体験した事のあるこの事象だが、今日は外で取材を行っていた最中であつた為に迅速な避難が出来なかつた事が災いしていた。

「くそッ……高見沢グループの専用シエルターに俺も入れてくれても良いじゃんかよお！」

日本有数の企業、高見沢グループの総帥である高見沢逸郎の経営手腕についての特集を書くために駆り出されていた真司であつたが、そこが独自に造っていたシエルターには入れさせて貰えなかつたのだつた。

紳士的であつた取材時の態度から一変していた所を見ると、どうもあの男は傲慢で卑劣な輩であるようであつた。

そんな、ある意味ネタになる事を拾えたものの、命なくてはどのようなもならないので、こうして愛車共々全力疾走しているのであつた。

「うおっ!?!目の前にノイズがあつ!?!」

球体もとい両生類みたいな姿をしたノイズが道路上に群がっている。それも進行を邪魔するかのよう。

バイク自体は触れても無害なので、真司は脚を上げてどうにか避ける。通り際にバイクに突き刺さる（正確には別位相な為何も起こっていないが）ノイズ達の異様な光景に、真司は肝を冷やすばかり。

冷や汗を拭いつつ、再びバイクのスピードを上げた。

……だが、

「ん……って、うわあああああつ!？」

サイドミラーから見える後ろには、びつしりと敷き詰められたノイズ達。それは完全に真司を追って来ていた。

追跡しているノイズ群は陸を移動している為に速度が遅いが、空を飛んでいる奴まで合流されたら一巻の終わりだろう。

「ま……まだ死にたくねえええ!!」

そんな叫びを上げながら、真司はシエルターの方へ駆けていく。

これが断末魔の叫びとまらない事を祈りながら……

一方、ノイズたちが少しずつ集まりつつある避難シエルター前には、避難誘導を行っている未来とアクセルの姿があった。

「押さないで、ゆっくりと入って下さい!」

安心させるようにこう言ってはいるが、既に目と鼻の先にまで迫りつつあるノイズ群に未来が一番焦っていた。

「ごめんねえ兄ちゃん、私なんかあ……」

「お婆ちゃん、心配すんなよ。もうシエルターん中なんだな、これが」
何時の間にかご老人を抱えていたアクセル・アルマーがシエルター内に入っていく。どうやら、脚が悪い方らしかった。

いつもならない男手がある事で、女子高生の未来はいつもよりも気を回さずに済んでいた。

遠くでは、親友達が戦っているのだろう。命を懸けて、多くの人々の為に。

響の事が心配でならない未来であったが、それよりも重要な事はまだ終わっていないのだった。

『未来さん、無事ですか!』

通信端末から聞こえた男の人の声に気付き、未来は端末を耳に当て

た。

「緒川さん！」

通信の相手は、平時は風鳴翼のマネージャーであり特異災害対策機動部二課のエンジニアトである緒川慎次であった。

『そちらにノイズが接近しているようです。早く避難を完了させて下さい！響さんをそちらに向かわせますので!!』

「了解です！」

端末の応答を切り、シエルターの入り口を振り返った。

アクセルのおかげ様で、あと数人で収容完了と言った所であろうか。

ふう、と未来が息を付いた、そんな時である。

「おーい!!」

目の前にシエルターが見えた事で、真司は喜びをあらわにしながら叫んだ。

だが、未来はやって来た彼を見て凍り付いていた。

「な、何じやありやあああ?」

アクセルもその光景を目にし、驚きと焦り、呆れの三拍子が混ざって驚愕した。

真司はノイズを振り切れず、結局引き連れたままシエルターに近付いていたのだった。

そんな軍団光景を見て、未来とアクセルが震えない訳などなく、

「こ、コッチ来んな!!」

「べ、別のシエルターに行って下さいっ!!」

と、各々が真司のシエルター避難に対して拒否する始末であった。

「な……そんな事言わないでくれよおお?!」

半泣きでバイクの速度を上げる真司。その彼の頭上には飛行型ノイズが多数飛び交っていた。

鳥の様な風体の飛行型ノイズは自身を捻り、槍の様な形になって真司の周囲に降り注ぐ。

地面を穿つ様に落ちてくるソレを奇跡的に回避する真司だが、そん

な事は数度しか起こる筈がないのが世の中である。

「うわあああつ!!」

垂直にノイズが降ってきた事で、堪らずバイクから飛び降りる。あと数秒遅ければ完全に炭になる所であったが、現状はもっと悪くなる一方であった。

丁度未来達の足元に転がった真司だが、それはつまりシエルター周辺を囲まれたという訳である。

「くそつ、ノイズちゃん達が群がってやがんぜ……」

生身の風鳴司令でも対処出来る事は例外として、ノイズに対抗出来る兵器は現状の所はシンフォギアのみである。響が向かってきているとしても、それでは間に合う筈もない。

未来達が炭にされてしまうのも時間の無駄であった。

「……………」

もの言わぬノイズ達が動き始める。未来、真司、アクセルの3人を抹殺せんと、その体を引き延ばした形に変形させて飛び掛かった。

「くそつ、ここまでかあつ!!」

「いやつ、響っ……!」

「畜生……ッ!!」

3人は死を覚悟し、目を瞑る。

風を斬るかの様な音。

地鳴り。

爆音がし、空気が震える。

そして遠くから響くバイクのマフラー音。

「……………マフラー音?」

ちよつと待て、と言わんばかりに真司は目を開けた。

そして目にした光景は、今までの常識をひっくり返すかの様であった。

飛び交う、桃色の光弾。

ノイズたちがそれに当たり次々と“消滅”していく。

炭化しバラバラと舞う中、佇む男が一人いた。

マゼンタと白、黒の3色のバイクにまたがり、手にする長方形の異形な銃からは光弾を吐き出し、次々とノイズを消していく。

シンフォギア装者ではない筈なのに、何事もないかの様にノイズを消していくその男はヘルメットを外して素顔を露わにした。

「お前……………城戸真司だな？」

男はバイクから降り、真司に近付きつつそう訪ねた。

「ああ、そうだが……………」

そうか、というと、男——門矢士は顔をコチラに向けて一言。

「——何故、龍騎に変身しない？」

「龍……………騎……………？」

だが、真司はその言葉の意味を知らない。

まるで、何もかも忘れてしまったかの様に。

「一体、何の事なんでしょう……………」

「いや未来ちゃん、ここで突っ立ってないでシエルターに逃げようぜ!？」

アクセルはそう言って逃げ出そうとするが、彼の目の前に別のノイズが立ち塞がる。

完全に四方を囲まれていた。

「城戸真司、お前……………まさか？」

一方、士はまさかの真司の返答に少し困惑していた。

この“世界”に彼がいる事が分かり、会いに来たまでは良かったが、龍騎の事を全く知らない様子である事は想定していなかったのだ。

てつきりこの世界で都市伝説となっている『仮面ライダー』とは、龍騎の世界に存在する13ライダーの事だと思っていたが、当てが外れた様だ。

「そ、そもそも、アンタ誰だよ……………」

真司は若干不審者を見るかの様に言う。

その言葉を聞いた士は、独りでに「聞かせるよりも見せた方が分か

りやすいか……？」と呟いた。

そして、カメラにも見える形のデバイス、デイクイドライバーを腰に当てつつ真司らに向かって叫ぶ。

「俺か？……そうだな」

ベルトが腰に巻かれ、ライドブツカーから1枚のカードを取り出す。

そしてそれをデイクイドライバーに挿入してサイドハンドルを押し込んだ。

「通りすがりの仮面ライダーだ……覚えておけ」

10枚のカードが空に舞い、それが重なる。それと同時に士だった者に色が入った。

マゼンタ色が特徴的である戦士、仮面ライダーデイクイドに変身完了する。

「な………か、仮面ライダーだつて!？」

真司は目の前に立つデイクイドを見て、思わずそう叫ぶ。都市伝説として、その存在はほのめかされていた『仮面ライダー』が、目の前に立っているのだ。

「行くぞっ………!」

デイクイドはライドブツカーをソード・モードに変形させ、ノイズ群に斬り込んでいく。

一番手前に居た人型ノイズを、頭から真つ二つに両断した。一撃のもとに斬り伏せられたノイズは、やはり炭化して消える。

「………どうやら、俺の力はこの『世界』でも有効らしい」

士が懸念していた「世界のルール・理の無視無効」能力が発動するかという事は証明された。

やはり『破壊者』らしいこの力だが、今回は功を奏する様だ。ノイズを容易く倒す事が可能であり、逆にノイズに炭化される事もないのだ。

……単純にライダーの装甲はノイズでも炭化出来ないだけなのかも知れないが。

「凄げえ………あんなにノイズを滅多打ちにしてやがる」

「シンフォギアじゃなくても、ノイズが倒せるの……?！」

アクセル、未来は獅子奮迅するデイケイドⅡ士を見て、その戦いぶりを感心していた。だが一方、真司の方は少しずつ心の中に疑念を抱き始めていた。

(何だ……この感じ……俺もノイズと戦っていたのか……?)

先ほどの士の言葉……『——何故、龍騎に変身しない?』というその一言を聞いて、拭いきれない違和感を感じていた。

士の言葉と共に、頭の中にうっすらと浮かび上がったビジョン。

二人の戦士が敵と戦う、というその映像に真司は見覚えがある様に感じていた。

目の前で戦うデイケイドではない、他の戦士がノイズや異形の怪物と命を懸けて戦っているのだ。

(……龍騎。この言葉の事も知っている……俺は一体何者なんだ!?)

身に覚えはない。だが、記憶のどこかに引っ掛かっている感覚があるのだ。

その感覚が繊細過ぎ、真司をイライラさせて始めてもいた。

「くっ……くっ、どうすりゃ良いんだよ!？」

自身のそのイライラからの憤りに、怒りの叫びを上げる。

それを聞いて反応したのは、目の前でデイケイドと戦いを繰り広げるノイズであった。

「くっ……あの馬鹿野郎ッ!」

デイケイドがまとめて相手をしていたノイズの一部が、真司たちに向かって走り出した。無論、彼らを炭へと還元する為である。

せっかく注意を引いていたにも関わらず、それを無にした真司に、士は悪態をついた。

まだライドブッカー・ガンモードで十分攻撃可能な範囲ではあるが、クロスレンジで攻撃を繰り返すノイズのせいで変形からの射撃を行う隙などない。

せめて出来るのは、ライドブッカーからライダーカードを取り出してカメンライドする事位しか——

「……ッ！城戸ッ、受け取れッ!!」

ある事を思いついた士は、ライドブツカーからライダーカードを一枚取り出した。そしてそれを即座に真司に向かって投げつける。

物理的攻撃判定があるのかノイズ一体を真っ二つにしつつ、真司の足元にカードが落ちた。

「これは……あ、ああ……!!」

カードを拾い上げた瞬間、真司は呻く様に声を上げ始めた。

「おい、どうしたんだアンタ!?!」

「えっ、な、何が!?!」

アクセルと未来が慌てて駆け寄る。目の前から徐々にノイズも迫りつつあった。

真司が手に持つ、一枚のカード。赤と黒、白銀色のライダーが描かれ、額には龍の意匠が刻まれていた。

その名は――

――仮面ライダー龍騎――

(……そうだ、俺は……人間を護る為に戦った……仮面、ライダー……)

鮮明になっていく記憶。失われていた過去。

全ては、あの戦い……ライダーバトルによって封印されていたのだ。

(13人のライダー、神崎優衣、ミラーワールド、秋山蓮、ミラーモンスター、アドベントカード、神崎士郎、願い、霧島美穂、20回目の誕生日、そして……俺の死……)

全てが頭の中に巡り、それと同時に様々な記憶が蘇る。

2年前の記憶。

13人の選ばれた者達が、己の命を懸けて戦うデスゲーム。最後に残った者にはどんな願いも叶う。

(……………俺は、人間を護る為にライダーになった……………)
少女を庇った時にミラーモンスターから致命傷を受け、そして全てを親友へと託して死んでいったあの瞬間……………。

痛み、後悔、希望を抱えながら、確かに真司は死んだ。

だが、現に彼は生きている。『ミラーワールド』というモノが完全に消え去った、この世界で。

神崎兄妹によって創りかえられた、この世界で……………。

(優衣ちゃん……………俺は大切な事を忘れていたよ……………)

既にこの世には存在しない彼女にそう伝わった気がした。

そして、真司には『力』が蘇った。

——人々を護る為の力が——

「城戸真司ッ、戦え！お前の成す事の為に!!」

士はライドブツカーでノイズを斬り伏せ、そう真司に向かって叫んだ。

それと同時に、真司たちに向かってノイズが攻撃を掛ける。

未来とアクセルは、今度こそ死を予感した。

——変身ッ!!

……………だが、二人は無傷だった。暖かく、人を傷つける事ない炎に

包まれて。

「俺は……………」

地面に円を描いて揺らめく炎の中心には、紅の戦士が立つ。

左手に龍を模したデバイスを持つ戦士は、腹部のバックルからカードを一枚取り出した。

デイケイドのライダーカードとはまた違ったそれをデバイスに挿入し、龍の顔を上げる。

ノイズは現れた謎の戦士を観察するかの様に立ち尽くし、隙をあらわにしていた。

——ファイナルベント——

「俺は、人間を護る為に戦うんだッ!!」

天空から赤い龍が降臨し蜷局を巻くのと同時に、戦士も上空へと飛び上がる。身を捻りつつ、龍の吐く火炎に合わせて片足を突き出した。

「うおおおおおおつ!!」

群がるノイズにぶつかると火炎弾。

それは大気を揺るがしつつ、ノイズを炎に包んだ。

徐々に炭化してゆくその中央で膝を付き佇む戦士——仮面ライダー龍騎は、立ち上がりつつ右手の握り拳を上げた。

「……………っしやッ!!」

決め台詞を呟いた仮面ライダー龍騎Ⅱ城戸真司は

「……………もしかして、お前……………?」

「城戸……………さん?」

自分達を助けた仮面ライダーに恐る恐る質問してみるアクセル＋未来。

それを聞いて真司は二人を振り返りながら拳を握りしめた。

「二人とも、俺が護ってみせるから!」

そう言つて、デッキからアドベントカードをドロウする。

描かれた絵は、一つの剣。青龍刀にも見ええないそれを、ドラグ

ライザーに挿入する。

——ソードベント——

デバイスが読み込んだカード名を言い、同時に天空から剣が降ってくる。

それを手にした龍騎はデイケイドが戦っている所に駆け抜けていった。

「てりやあああああつー！」

剣で斬りつけた胴体からノイズが炭化していく。

それを見たデイケイドは、仮面ライダーならばノイズにある程度對抗出来る事を知る。

「やつと思いい出した様だな」

「ああ。アンタのおかげ……なのか？」

「コッチは大事なライダーカードを使ってやったんだ。感謝して貰いたいな」

とは言え、どうせカメンライド出来ないカードであつた為に結果オーライとでも言うべきか。

笑いながら冗談交じりに言ったデイケイドは、ライダーカードを一枚取り出す。

「さて………コイツで終いだ」

——ファイナル・アタックライド——

デイケイドが飛び上がると同じくして、ノイズ達に向けて数枚のカード型のエネルギーが上空に浮かび上がる。

デイケイドの必殺技であり、ライダーの特徴的な技、ライダーキック。

「ハアッ!!」

カード型エネルギーごとノイズを蹴る様に蹴った。

エネルギーが数枚重なるごとに力が増し、最大威力となってノイズ

群に襲い掛かる。

数トンの威力を放つ衝撃がソニックウェーブを生み出すのと同様に炭化したノイズを一気に消し飛ばした。

「ふう……………」

周りを見渡し、周囲の安全を確保した士はディケイドライバーのサイドハンドルを引いて変身を解いた。

そして、龍騎が纏っていた鎧も光となって消え、その場には真司が立っているのみであった。手には龍騎のカードデッキが握られているが。

「……優衣ちゃん、俺はこの力をもう一度使っていくよ。この『世界』を護る為に……」

そう呟いた真司は、龍騎の紋章を撫でる様にデッキに手を乗せた。

再び蘇った龍の力。

仮面ライダーとして、人間として戦う事を、城戸真司は始めるのであった。

第二章 動き出す悪夢

第八話 新天地、そして新世界

【都内シエルター付近】

周囲一帯のノイズの反応が消えた頃、特異災害対策機動部二課メンバーが地上で情報操作や被害情報の収集を行っていた。

その中で、司令である風鳴弦十郎もまた、最前線にて立ち仕事を行っていた。

「——全く、とんでもない被害だな」

二ヶ月前の怪獣再来騒ぎに比べればまだマシンなレベルだが、それでもここ数か月分のノイズ出現での被害にしては大きかった。

活動の活発化が激しくなった一端があるとするれば、ここ最近“ルルイエの遺跡”で計測されつつある高いエネルギー係数が関係するのであろう。

未だ関係性は不明ではあるが、かつてから怪獣が出現する度にノイズの活動も連動して高まっていた。

つまり、ノイズの活性化⇨怪獣の出現とも取れる。

現在の特異災害対策機動部二課が巨大怪獣に対抗する手立て。

それはシンフォギア装者と、今は封印されし“あの機体”——。

『司令、例の男三人を連行してきました』

耳に入れたイヤホンからオペレーターである藤堯朔也の声。彼らがやっと到着したらしい。

弦十郎はタブレットを操作し、カメラ映像を眺めた。

「……ノイズの大量出現、それとノイズを倒せる事の出来る奴らから……」

視界に捉えられた三人の青年、その内の二人が“あの存在”であるらしい。

未来の報告にあったそれは、自分も聞いたことがある都市伝説で

あった。

「仮面ライダー。人類の味方、か」

今まで観測出来たライダーは1号・2号を初めとした、10人の仮面ライダー。

彼らはクライシス帝国の滅亡後に各地へ旅立ち、その地を護っているらしい。

だが、伝えられてきた情報にはない、新たな仮面ライダーがこの世界に現れた。

ディケイト、龍騎の両者。

それぞれがノイズの炭化攻撃を無効化出来、特殊な力を持ったカードを使役するらしい。

彼らの力、そして、訪れて来るあの男の力があれば――

弦十郎は、来るべき時を予感していた……………。

因果律の鎖を越えて ― URTLA・ZESTY

第8話 新天地、そして新世界

【特異災害対策機動部二課仮設本部・潜水艦内】

「――ようこそ、特異災害対策機動部二課へ！」

そんな弦十郎の声を合図に、複数のクラツカーが鳴らされる。

二課の仮設本部となっている潜水艦のブリッジは、異様な空気に包まれていた。

天井から吊るされたパネルには『ようこそ、ユーゼスさま！』等と書かれ、歓迎の意がこれでもかと表されていた。

そして、大量の職員たちの拍手に迎えられたユーゼスは若干顔を引き攣りながら「何だコレは……………」と呟いた。

無理もない。

試しに、と思つて訪ねた先に現れたのは潜水艦。そして、スーツを

来た青年（何か忍者に見えたのは気のせいかな？）に案内されて入ったその中であつたのが、こんなお祭り騒ぎだったのだから。

「いや、大気浄化弾を開発した世紀の科学者、ユーゼスさんにお会い出来て光栄です」

そう言つて近付いて来る司令官の風鳴弦十郎は、ユーゼスと半ば無理やり握手を交わした。

ユーゼスがそんな彼を訝しむ事に反論は出来ない。

赤いTシャツに変にボサボサに見える髪、何故か胸ポケットに先端が入つて曲がつたネクタイ。こんな男が司令というのはどう見てもおかしい。

ユーゼスはしらつと「この組織……マトモじゃないのか？」とも思ひ始める始末であつた。

「ああ、ありがとう……で、いい加減手を離してくれないか？ 凄く痛いのだが」

結構な力で手を握られていたので、ユーゼスの手が真っ赤になっている。弦十郎には悪気は無かつた様子だが、どうも思考を読めない雰囲気ユーゼスは困惑していた。

「あ、失礼した……では、本題へと入りましょうか」

そう言つと、弦十郎は先ほどまでのおちやられた雰囲気から一転して、真剣な顔になつた。

「……我々、特異災害対策機動部二課は現在、世界中で依然発生している特異災害……通称、ノイズによる人的被害を最小限に抑える為に活動しています」

そんな事はユーゼスは下調べし尽していた。

三ヶ月に起きた『ルナアタック』にて、落下する月の破片を破壊した三人の英雄、シンフォギア装者と共にノイズと日夜戦っているらしい。

ルナアタック以前までは極秘であつたシンフォギア・システムの開示によつて、世界中でやつとノイズに対するマトモな対策が取れる様になつたのだ。

「……ですが、我々には未だシンフォギアやその他の設備も完全に

揃わず、防衛もままならない状況です。そこで――」

弦十郎は頭を下げながら、言葉をつづけた。

「――我々と共に世界の為に戦って下さい、ユーゼス・ゴッツオ博士」

そう言われて、ユーゼスはうつむきつつ少しだけ考える振りをした。

ここに来るまでに大体そんな事を言われるだろうとは気が付いていたが、ユーゼスは未だどこの組織に組するかを検討している最中だ。

大体、最初に望んでいた組織はGUTSであった訳である。

ウルトラマンティガや過去のウルトラ戦士のデータを持っているのもそこであるし、何より昔の経験が一番生かされそうな場である。

ノイズもそれ相当に重大な存在であるが、倒す事の出来ない怪物相手にどうやってベストで立ち向かえばいいのやら分からずじまいなので、ここまで決断するのを渋っていた訳である。

「無論、衣食住や自由、超法的な措置の提供もご用意できます。国際問題になりえない程度の事ならば、無理にでもご用意するつもりです」
弦十郎は中々悪の顔をしつつそう言う。どう見てもヤバい集団臭がするのは気のせいではない。

だが、そんな言葉に騙される程安い男ではないのがユーゼス・ゴッツオであった。

「……………なら、『シンフォギアシステム』の構造を開示して貰えるか？」

流星に無理だろう、等と思いつつ無理難題を引っ掛けてみる。あっさり開示したらそれはそれで『セキュリティどうなっているんだ?』
とも思いい、開示しないならば立ち去るのみだ。

やっている事は酷いとは分かっているが、これ位したって損はないと思う。

「シンフォギアシステムの開示……………ですか。それは、我々の組織に加入して頂ける事として受け取ってもよろしいのですかな?」

「開示し、そのデータを渡して頂ける約束が守られるなら、宜しいで

しよう」

こう口先では言ったが、ユーゼスはシンフォギアと呼ばれる装着兵器に興味がある訳ではなかった。

どうせ解析し生産可能になったところで基となる聖遺物はそうそう手に入るものではないし、手に入ったとしても起動できる程のフォニックゲインを持つ者を見つけ出すのは相当骨が折れるであろう。

そんな面倒な事をしてまでGUTSに取り入れる必要もない。

この問答も、特異災害対策機動部二課を試している、とでも言うべきか。

「……………分かりました。我々の持つシンフォギアシステムの詳細なデータ、全て開示しましょう」

弦十郎はそう言って笑った。人柄の良い男である証拠が見える。

ユーゼスは彼の笑顔に釣られ、少し笑う。

だが、簡単に了承した弦十郎とは反対に一気に焦る者たちが数人いた。管制オペレーターの藤堯朔也、友里あおい、それとシンフォギア装者本人である風鳴翼である。

「し、司令!! そう簡潔に処理出来る問題ではありませんよ!!」

「幾らシンフォギアシステムがある程度開示されたと言っても、ウチで管理する三基全て開示するなんて…………」

「司令、この男を組み入れる為とはいえ、その様な事は…………!!」

そう言われた弦十郎だが、彼はあっけらかんとしている。

ユーゼスはブレる事がない弦十郎の態度に若干感銘を受けつつ、

「三人の言う事の方が当たり前じゃないのか？」等とも思っていた。

「二応形式上は斯波田事務次官にこの件を上申するが、あの人はどうせ了承してくれる。だから、俺はこうして大きく構えられるのさ」

そう格好つけて言う弦十郎だが、例の事務次官のイメージがいつも蕎麦を啜っている風景しかない事に気が付き渋い顔を始める。

ともかく、突然現れた天才科学者を組織に勧誘する事に成功した事で、特異災害対策機動部二課はある程度(?)の技術力向上を行えたのだった。

「――さて、ユーゼス博士の次は君たちの処遇だが……」

別室に待機させていた三人組、アクセル&真司&士の方を訪ねた弦十郎は、彼らの顔を一通り眺めてから一言だけ言った。

「シンフォギアシステムがある程度開示した今日とはいえ、その装者である者達の事は明かされてはいない……だが、それを知ってしまった以上、コチラは黙って帰す訳にはいかないな」

先ほどとは打って変わって、ドスの効いた声でそう言う弦十郎。

だがアクセル・アルマーと門矢士はその雰囲気を感じないかの様にケロリと、

「おいおい、俺はシンフォギアなんてモノの存在を今日初めて知ったんだぜ？」

「俺はそんなモノには興味はない。早く離せ」

と口々に言う。

だが、それなりにそういう規則を知っている城戸真司だけは顔を青くしていた。

「口止めだけじゃなくて、もしかして退社させられるのか……いや、それ所か禁固とかまで……」（泣）」

大久保編集長のコネ程度じゃ、とても救われそうにはない。実に終わった。

とことん運がない自分を嘆きつつ、訪れそうな未来を予感していた。

シンフォギア装者の立花響、風鳴翼、雪音クリスと小日向未来は、そんな残念イケメン三人組を壁の端から見る。

未来にとつては自分の命を助けてくれた恩人、響たちにとつては共にノイズ達を倒した戦士。

そんな彼らを敵と疑うのは失礼だが、唐突に現れた彼らが某お隣の自由な国とかからのスパイである可能性も拭えなかった。

「あの人達……疑われちゃうよね、そりゃ」

「でも、記憶喪失のアクセルさんまで疑われるなんて……私を助けてくれたのに」

その場に偶然居合わせた……もとい目覚めたアクセルは、潜入スパイの容疑がかけられていた。

まず、公園で平然と寝ている時点でだいぶ怪しい人間なのだが、唯一の持ち物とも呼べる変形機構付刀「ミズチ・ブレード」の存在
響と未来は、出会ったばかりの時のアクセルを思い浮かべる。

あんな風な阿呆(?)みたいな雰囲気の中にはスパイなんて器用なマネなど出来ないだろうし、そもそも記憶喪失で潜入するという新しいスタイルで来る事もないだろうに。

「へっ、あの野郎を信じるっていうのか、じゃあ!? あからさまに怪しい奴だろ!!」

クリスは懐疑的な目をしてそう言う。……いや、よく見ると頬がほんのり紅くなっている。

響と未来は、最初に出会った時にクリスがアクセルにセクハラ的発言をされていたのを思い出す。

「何だったっけクリスちゃん……確か『……君の様な美人がキスしてくれたら思い出せるかもな』だっけ?」

そう訊いた響に反応してか、クリスは更に顔を真っ赤にさせる。

「ばっ、馬鹿な事を思い出させるなッ!」

だが本人的にはあの言葉が十分に効いていたのか、プルプルと真っ赤になって震えている。こんなクリスを見たのは、響もクリスも初めてであった。

どうやらそういう言葉に対する免疫は無かったらしい。からかえる素材を手にした響は悪い笑みをこぼす。

「ふふふっ……」

「な、何だよその笑い……(汗)」

年相応なじやれ合いを繰り広げる響たち。

その姿を、ユーゼスは遠くから見つめていた。

「……まだ年端もいかない少女達が戦わなければならない世界、か」
かつての世界でも学徒兵はいた。だが、彼らが前線に駆り出される

事は殆どない。

目の前にいる少女たちは、命を懸けて戦っている。

一瞬で灯が消えるかもしれない戦場で歌っている。

ユーゼスは彼女たちをイングラムの仲間たちと重ねる。

決戦の最中、最後の力を振り絞って散っていった超人機メタルダー
こと剣流星。

彼と同じ末路を辿る者がいずれ現れてしまう事を、ユーゼスは恐れ
ていた。

「……彼女たちを戦わせない世界にしないでな」

自分に出来る事はベストとして戦う事だけではない。

この頭脳を生かし、仲間たちを可能なまでサポートする事も彼の戦
いだ。

「必ずこの知識と経験を生かさなくてはな、イングラム……」

この世界には居ない自分の半身を思い、ユーゼスは歩き出した。

生きていくべき新天地へと――

【???

「——世界の終焉が訪れる……もう間もなく……」

暗闇の中に佇む、一人の男。

手に持つ箱は起動スイッチらしく、幾つかのボタンが並んでいる。

「もはや、誰も我々を止める事は出来ない………『影』が現れる時が来たのだ！」

スイッチを押し込む。

すると、部屋中を激しい光が包んだ。

時折電流が迸り、壁伝いに閃光をまき散らす。

「フハハハッ、我らに栄光あれエエエエ——」

その男の狂気と共に、その実験施設は光に包まれた。

「一足、遅かったか……」

閃光と共に爆炎が響く中、研究所が崩落していくのを目撃する。

あと数分早ければ、こうはならなかつただろう。

漆黒の闇と同化した黒鉄の亡霊、ゲシユペンストType Rはメイ
ンカメラを赤く光らせる。

「……だが、これではつきりした。やはり『彼ら』は私のいるこの『
世界』にやって来る筈だ。その前に、立ち向かう為の力を集めなければ……」

コックピットに座るギリアム・イエーガーは操縦桿をより一層強く
握りしめながら、自分が出来る事を模索していた。

彼のせいでこれから起こる事を、なるべく早期に終結させる為に。

「俺の予知が正しければ……彼が力になってくれる筈だ。どうにか接
触しなければならぬ様だな……」

そして、その男の顔を思い浮かべる。

「超神ゼストいや、ユーゼス・ゴッツオ……彼なら、この『世界』を
縛る鎖を破壊出来る……」

世界を包もうとする影が、
侵攻を始める……。

第九話 招かれざる異邦者（I）

——そこは、極めて近く、限りなく遠い世界——

【ホワイトスター内部】

薄れていく意識。

激痛が走る肉体。

異形の神を創造させるフォルムの機動兵器はその機能を殆ど破損し、静かに地面に伏していた。

コックピット内でぐったりと横たわる男、イングラム・プリスケンは眼前のモニターを見る。

目の前に映る、鋼の巨人。

対異星人用の切り札、スーパーロボットタイプエックス——通称「SRX」と呼ばれるその機体の手によって、彼の乗機「R—GUNリヴァーレ」は大破した。

『終わりだ、イングラムッ！』

SRXに乗る元部下、リュウセイ・ダテの声がスピーカーから響いた。

機体はもはや爆発寸前。数々の悪行を繰り返した彼にも、もうじき神の裁きが訪れようとしているのだ。

彼は死への恐怖など感じていなかった。

むしろ、“解放された”事に対しての感謝を感じていた。

「フ……フフフ……」

イングラムの口から笑みがこぼれる。

やっと宿った自身の人格は、この結果に満足している事が分かった。

『何がおかしい!?!』

「…よくやった、リュウセイ……」

『!?!』

明らかに彼は驚いている。

イングラムは今までやって来た事が実った事を嬉しく思っていた。これで、この世界の“奴”は倒される事だろう。

「これでいい……」

そう、これでいい。課せられた使命はこれで果たされた。

虚空の使者としての、使命を……。

「俺が……ジュデツカの枷を解くには……この方法しかなかった……」

『枷だと!? てめえは一体何者なんだ!?!』

無限に続く因果の鎖……それは、“あの時”から重く押し掛かり、彼自身の運命を定めてきたモノ……。

あの時……仲間たちと共に超神ゼストを葬ったあの時からこの結果だけは変わる事など無かった。

今回も、結局は運命を覆せなかった。

「俺は……地球人でもなければバルマー人でもない……」

ましてや、バルシエムシリーズですらない……。

並行世界を彷徨う定めを背負わされた、イングラム・プリスケンという男。

「任務を遂行するために……作られた……虚ろな存在に過ぎん」

『な……!?! 虚ろな存在……?』

『……作られた人間、という事か……?』

リュウセイに続いて、キョウスケ・ナンブがそう訊く。

頷こうと頭を動かすが、イングラムの体は既にいう事が聞く状態では無かった。

(そう、俺はユーゼス・ゴツツオのクローンとして生み出された存在……。神へなろうと画策した、愚かな男の半身……)

「だが……俺の任務も終わった。お前達の手によってな……」

これからやって来るであろう、“あの男”との戦いに向けて——地球を守る守護者達を覚醒させるという任務は完了した。

確実にクロスゲート・パラダイム・システムの力で世界が崩壊する事はない。

(——仮に敗北したとしても、アイツが奴を葬る事だろう……因果か

らは逃れられない……………)

コックピットの各部からスパークが飛び散る。どうやら、この機体もここまでの様だ。

イングラムは残された力で、コンソールパネルを操作する。

そして、モニターに映し出されたのは一機の機動兵器。

憑依させていたアストラナガンにR―GUNリヴァールから放出した。機体内にあった力がすべて抜けた様に、体がボロボロと崩れ始める。

『て、てめえ…………何を?!』

リュウセイはイングラムがどういう人間であるかすらも理解出来ていない様子だ。

(まだ少し…………教えておくべきだったな……………)

多少の心残りが生まれたものの、それを押し殺して決められた運命を受け入れる。

機体の崩壊が大きくなり、内部フレームが剥き出しになっていく。

「フッフ…………さらばだ…………選ばれし戦士達よ……………これからの戦い、お前達に勝利あらん事を……………」

『な……………ツ!?!』

『少佐…………!!』

アヤ・コバヤシのその一言に、イングラムは薄れつつあった意識を呼び戻す。

体力など残っていない。それでも、最後に自分を信じていた彼女に最後の力を振り絞って言葉を掛けようとする。

惨めだと分かっている。贖罪し切れない罪ばかり背負ってきた。

だが、これも“TIMER”の使命であり、運命であった。

「…………アヤ…………。これからは…………過去に囚われず…………新しい道を歩め……………」

最後の力は全て使い果たした。

だが、彼女にこの一言は言っておかねばならないのだ。

彼女にこれから絡みつく“鎖”は重く過酷なモノだと知っている。だからこそ、それに打ち勝つ為の楔を打ち込んだ。

「イングラム……少佐…… ああ……!!」

機体のフレームが徐々に砂の様に崩れ落ちる。バラバラになるリヴァールに、アヤは悲しみを隠し切れない。

イングラムはその声を聞いて、一息つく。

(……ようやく得た完全な自我が……死の狭間にあつたとは……)

当然の報い、と思えた。だが――

(例え、一瞬でも……俺はイングラム・プリスケンという人格を……確立……出来たのだ……)

それが、何回目なのか、何人目のイングラムなのかは定かではない。だが、一つだけはつきりしている事がある。

(……迎える結末は……全て同じ……らしい……)

視界が徐々に白く輝き始める。

それはイングラムを暖かく包み、やがて全てを持ち去っていく。

「ま、待て、イングラムー!」

リュウセイはそう咆える。

だが、それと同時にリヴァールは完全に崩壊し消滅した。

そこにはイングラムの姿はない。まるで、*“この世界から消えた”*かの様に……

「くそっ……イングラムウウウウツ!!」

リュウセイのその咆哮は、彼に届く事は無かった。

因果律の鎖を越えて — URTLA・ZESTI —

第9話 招かれざる異邦者 (I)

【??】

「ここは………何処だ？」

ユーゼスは、宙に浮いていた。結構な高さの空中に漂う彼は、自身に起きている状況がうまく理解出来ずにいた。

兎も角、彼は状況を整理しようとする。だが――

「ジュワァッ!!？」

「ッ!？」

ウルトラマンの声が響いた。苦しみ痛みを含んだ声。

ユーゼスはすぐに後ろを振り向いた。

そこにあつたのは、二体のウルトラマンが戦い、その内一方がガッツウイングを護っている様子であつた。

「あれは……ウルトラマンティガ………!!」

ウルトラマンティガはカラータイマーを点滅させながらも、後ろを飛行するガッツウイングの盾になつてもう一人のウルトラマンの攻撃を受けていた。

そのウルトラマンは女性型であり、黒っぽい色と黄色のカラーがゼットン等の凶悪怪獣を連想させる。

「何だ………これは!?! 私、一体何を見ているというのだ!!」

光の鞭で体中を攻撃されるティガ。点滅が激しくなり、瀕死である事を周囲に知らせている。

更に、ティガに追い撃ちを掛ける様に、大量のノイズ達が攻撃を仕掛けていた。

「ニセモノのウルトラマンだけでなく、ノイズまでもが………!?!」

恐らく炭化される事は無いのだろうが、それでも物理的なダメージは受けている筈である。

ユーゼスはこの突然の窮地を救う為に、懐から一つのクリスタルを取り出す。

菱形で青と緑の二つが交わる様に光るそれは、二カ月前の戦闘後から開発していたモノであつた。

一種のエネルギーコンバーター、とでも言うべきか。

それを使えば、超神ゼストの能力を更に活用できる代物である。

「私の力は、こういう事を防ぐ為にあるのだ……ならッ——」

それを片手に、空へ掲げようとしたその時——

「——ッ、グオッ!!」

唐突に、全身に電撃の様なモノが流れた。

走る激痛に、つい手を降ろしてしまう。

「デュワァッ!!」

その時、ティガは最後の力を振り絞ってゼペリオン光線を放っていた。

出力はいつもより遥かに少ない。だが、目の前に立つ者を倒す為にはコレしかなかった。

『……その程度なのかしら、ダイゴ?』

「…何だ、コレは………思念会話か?」

ウルトラマンと同等の力を持つユーゼスは、その言葉が聞こえる様だ。

『例え僕が力尽こうとも……お前を倒す……!!』

『それは出来ないわ………例え光の力があるうとも、私の中にある闇は消す事は出来ない………』

闇、という言葉にユーゼスは反応する。

「闇の力……ティガは、その力を光に変換して戦える筈だ………!!」

そう言ったユーゼスは直後、自身が放ったその言葉に疑問を抱く。

「っ、な、何故私はそんな事を知っているのだ………!?!」

自分の放った知らない情報に、恐怖する。そして、ある事を思い出した。

「まさかこれは………私の脳内のクロスゲート・パラダイム・システムが………!」

そう自覚した途端、急に彼の視界が歪み始めた。

色々な色が混じって、混沌が空間に生まれる。

「待て! 私はこの未来の結果を知らない!! 教えてくれ、何が起きているというのだ!?!」

だが、そんな言葉で収まる事などなく、ユーゼスの周囲の空間を残して全ての世界が『無』へと還っていく。

「これが、訪れる未来だと言うのか!? 混沌すらない、虚無となると言うのか!」

やがて、ユーゼスの体が光の粒子となって消え始める。パラパラと空間に霧散し、消えていく。

「認めない……………私は、この未来を認めんぞオオオオ——」

「——ッ!!」

唐突にユーゼスはベッドから跳ね起きた。

全身から嫌な脂汗が吹き出し、両手は少しだけ震えている。

ベッドボードに置いてある時計を見ると、朝の4時を示していた。

【特異災害対策機動部二課仮設本部・潜水艦内】

「……………やはり、まだ脳内に残っていたのか」

かつての大罪の一部が、未だ体内にある事に恐怖し始めた。

あれは、クロスゲート・パラダイム・システムが見せていた「訪れる未来」だった。

かつて自分がいた世界で、脳内に埋め込むナノマシン型CPSを開発し自身に投与したが、それがまだ残っている事には気が付いていなかった。

「くそっ……………こんな所で能力を発揮しなくてもいいだろう!」

完成したCPSはアルティメットガンダムとカラータイマーの力と共に超神ゼストの一部になった。

今現在のゼストには、完成版CPSの力など残っていない。

狂気の発明がない事で安心していた矢先の事だった。

「……………もしや、この未来を覆せという事なのか？」

ユーゼスはこの世界に訪れる事を知っている事となる。

もしそういう意味を持つのであれば、この情報はとんでもなく重要になってくるだろう。

だが、そんな嘘の様な話を信じる者が居るのが一番の心配である。

「幾ら私が忠告しようとも、聞く耳は持たんだろうな」

そう考えると、ユーゼスは一つの結論に辿り着いた。

「……………この組織と、GUTSのみで全て対処しなければならぬという事か」

数日前に特異災害対策機動部二課に協力者として迎え入れられた二人の仮面ライダー、門矢士と城戸真司、シンフォギア装者達、そして未だ接触出来ないGUTSにある戦力を動かす事が出来れば、来るべき未来を阻止する事も可能に思えた。

「……………この件は、時を見て報告するとしよう」

今はまだ開示する時ではない。

立ち向かうべき力を集めた時に、全てを打ち明けようと心に決めた。

ユーゼスは一度深呼吸をし、そして立ち上がった。

手の震えは収まっている。だが、胸の高まりだけは抑え切れない。

「私の力で、この世界を救うのだ……………必ず……………」
贖罪ではない。

未来を知ってしまった者としての、使命。

人々を護ると決意したユーゼスの覚悟であった。

朝早くに起き、それ以降部屋に籠って個人的な研究を行っていたユーゼスは、朝のブリーフィングの時間にやっと表に出て来た。

「お、やっと出て来た様だな」

部屋を出たそこに、門矢士が立っていた。

二か月前に出会って以来、喋る事すら無かった男が何の用なのか気にしつつ、自室の施錠をする。

「お前か……正式に協力者としてこの所属になったらしいな」

ああ、と言うと、士は歩き始める。それに並ぶ様にユーゼスも付いて行く。お互い、ブリーフィングルームに向かう為である。

今はこの潜水艦は何処かの港に停泊しているので、廊下は揺れ無く静かであった。

「……ユーゼス・ゴッツォ。並行世界にて神に成り替わろうとしたものの失敗、その後因果地平へと堕ちていったが、何らかの力でこの世界へやって来た……」

士は自身が知っているユーゼスについての事を独りでに呟き始める。

「うむ……一体、誰が私の情報をお前に与えたのだ……？」

自分しか知り得ない情報をこうもスラスラと並べられると、奇怪というより興味が湧いてきたユーゼスである。そういう性分、とでもいうのか？

「俺の腐れ縁の男……鳴滝って奴と、もう一人の男からな」

「もう一人？」

鳴滝、という者についてももっと聞きたい事もあったが、それ以前に二人目の情報提供者について知りたくなってしまった。

「お前をよく知る人物……早川健、とか言っただな」

「何っ!？」

士の言葉にユーゼスは驚愕した。

早川健。人呼んで「快傑ズバット」であり、かつてユーゼスと対峙した男でもある。

彼は、ユーゼスについての記憶を持ち合わせたままあの虚構の世界から元の世界に戻されたのだろうか。

(……いや、それ以前に、この世界は「快傑ズバット」の世界ではない。幾つかの世界が繋ぎ合わされた世界の筈だ。何故、奴がこの世界に

……?)

士に彼がこの世界に来た理由を聞こうとした時、彼は歩みを止めた。

丁度ブリーフィングルームの前まで来ていたからだ。

「……その質問の返答は、後々で良いか?」

「そうだな……ブリーフィング後に話して貰うぞ」

約束を取り付けて、ユーゼスと士はブリーフィングルームのドアをくぐった。

「——おつ、ゴッツオ博士も到着しましたか」

既にシンフォギア装者と城戸真司がパイプ椅子に座って待っていた。

彼らの目線がユーゼスに突き刺さる。興味、疑心と様々な感情が見えるが、ユーゼスは敢えてそこに触れない事にしておく。

「……司令、別にユーゼスで構わん。そっちの方が呼び慣れているからな」

そう言いつつ、ユーゼスは空いている席に座った。

隣には風鳴翼が座っている。

先日、協力の条件としてシンフォギアシステムの開示を要求した事が災いして、疑いの眼差しが横から飛んでくる。

(……この少女、読みは良いが、まだ私の正体には気が付いていないな……)

まさに防人、とでも言うべきか、風鳴翼という少女は年に似合わず十二分な考察力と判断力を持つ。

そんな考察をしつつ、正面を向く事にした。

「さて……正式に善意の協力者として共に戦う仲間になった士君、真司君にも、今度の作戦から任務を与える事となった。精一杯励んでくれ」

弦十郎は嬉しそうに言う。

慢性的な人手不足の自体が続いていた二課にやって来た仮面ライダーの存在はとて大きい様だ。

「期待に応えなきゃなあ……」

真司は気合を入れる様に「っしやあ！」とガッツポーズをした。

それを眺めつつ、弦十郎は少し顔を厳しくしながら言葉を続ける。

「さて……今回の仕事だが、米軍の基地がある岩国に『ソロモンの杖』が輸送される。その護衛を響君、クリス君、土君、あおい君に頼みたい」

「……『ソロモンの杖』輸送の護衛、だど？」

土は何だそれ、と言いたげに呟く。

「ソロモンの杖……三か月前のルナアタックにおいて、フィーネがノイズを召還する際に用いた完全聖遺物、か」

ユーゼスが事前にリークしていた情報にあった『ソロモンの杖』は、かつての事件においても重要なポジションにあったモノである。

今現在も、ノイズを召還する事が可能らしく、それ故に嚴重な管理体制が敷かれているとか。

そんな管理のモノを岩国にある米国基地まで輸送するのに、何故シンフォギア装者と仮面ライダーディケイドを付ける必要があるのだろうか、とユーゼスは思う。いや、多分土達も同じ事を考えているであろう。

「……最近、ノイズの発生は比較抑えられているが、奴等や、悪用しようとする他の勢力」によって杖が奪取される可能性もあるんだな。」

他の勢力……とは、例えばかつて世界を恐怖に陥れようとしていた悪の組織、シヨツカー等の事を指しているのであろうが、敢えてそこには触れない弦十郎である。

「——それと、このソロモンの杖輸送と並行して、もう一つ作戦を遂行してもらおう」

「「「「!?」」」」」

その場に居た装者&ライダー&超神はほぼ一斉に同じ様な驚いた顔をした。

今までの二課は、基本的に単一の作戦——「ノイズの殲滅」にのみ焦点を絞って来た。だから、そんな彼らが部隊を二つに分けてまで行

う事などなかったのだ。

……単純にシンフォギア装者3人しか居なかったから、というのは秘密である。

「こちらにはユーゼス博士にお願いしたいと思っておりますが……宜しいでしょうか？」

「別に、私は一向に構わない。恩を返す、とまではいかないが努力しよう」

ユーゼスはいつも通りの仏頂面だが、言葉に想いを乗せてそう言った。

「ありがとうございます。……全員にも知らせておくが、二つ目の作戦は正体不明の物体の調査だ」

そう言うと、弦十郎はフォロモモニターを付ける。空中に浮いた画面に映し出されたのは、青空の中に佇む真っ黒いナニカであった。

「司令、な、何でしょうかそれ？」

響が興味津々に訪ねてくる。いつもより眼が輝いている気がするのは気のせいか？

「うむ……これは昨夜撮影された写真なのだが、これを拡大処理してみるとトンデモないモノが写っている事が分かった」

「トンデモないもの……？」

「空飛ぶ豚、とか、金色のカエル、とか珍動物ならOREジャーナルに載せられるんだけどなあ……」

画像がスクロールされ、拡大されたモノが表示される。

黒い物体がより鮮明になり、そして、それはあるシルエットを映し出していた。

「……人型か。何処かの国が造ったパーソナルトルーパーか？」

士は呟く様に言う。

それに反応してか弦十郎は頭を横に振った。

「国連全体でも調査されたらしいが、これは何処かの国が造り上げたPTではないらしい。ましてや、テスラ・ライヒ研究所が造った特機でもないときた。だから、国連はこの所属不明機を捕らえたいそうだ。」

真つ黒な人型機動兵器は、二つの翼の様な物体を背負っている。その姿は少しだけ——本当に少しだけだが、『黒の天使』に見えなくもない。

そんな見た目からか、国連軍はこの機体を「ブラック・エンジェル」等と呼んでいるらしい。

(黒い天使……何だ、この、頭に引つ掛かる感覚は………?)

ユーゼスは唐突に謎の気分の悪さを感じ始めた。

脳裏に引つ掛かる、というより自身に宿っている過去の記憶——虚憶と脳内にあるクロスゲート・パラダイム・システムが何かを知らせている様にも感じられない。

(……成程、アレは『別の世界』で私に関係する何か、なのだろう)

二か月前から時折感知する気分の悪さは、やはり並行世界のユーゼスから発せられるナニカの意思であろう。

今のところ解決の見込みが見えないでいたが、現れた正体不明の機動兵器が何かを知っている筈だ。

ユーゼスはブラック・エンジェルの拡大写真をもう一度まじまじと見つめた。

「——なお、翼君は合同ライブを控えているので今作戦には参加できない。それと、真司君には彼女の専属カメラマンとして同行して貰いたい」

「ま、マジですか!! いやあく、ここに来て俺付いてるぜ!」

真司は大層嬉しそうに笑顔を見せる。大方、SP代わりになるからでだろうが、そういう事まで考えないのがこの男であった。

「……そうだった、ユーゼス博士は現地にて調査の専門家達と合流してください。それと調査の結果は、コチラに持って来て貰えれば助かります」

「了解した。………それと風鳴司令、一つ頼み事があるのだが」

解散しようとしていた弦十郎を呼び止めたユーゼスは、立ち上がって彼の目の前に立つ。

「何でしようか、博士?」

「例の青年……アクセル・アルマーを調査に同行させたいのだが、良い

か？」

そう言った瞬間、ブリーフィングに出席していた者全員がポカンとなった。

士と真司は無事に二課のメンバーとなっていたが、アクセル・アルマーのみは一人独房の中に押し込められていた。

他国——特に、お隣の自由な国からのスパイであるという疑惑は晴れる事なく、結局は観察保護的扱いを受けていた。

独房にぶち込められた日には「オイオイ、俺はスパイじゃねえって！」等と一日中怒鳴っていたが、流石に数日も入れられていれば大人しくなっていた。

毎日腹筋や腕立て等のトレーニングをして過ごしているらしい。

ユーゼスは、この不思議な男の事が気になり今回の調査に同行させ素性を探ろうとしていたのである。

「そうですよ、アクセルさんを出してあげましょうよ、司令」

「いや！ あの色男は何か気に食わない！ 私は反対だ!!」

「クリスちゃん、まだ引きずってるんでしょ、言われた——」

「あーっあーっ！ な、何を言ってるんだ響オマエー！（棒）」

夫婦漫才みたいな響とクリスの掛け合いを横目に、ユーゼスは何時になく真剣な眼をして弦十郎に迫った。

「だが、しかしなあ……………」

「もしもの時は、私が責任は取ろう。 だから、彼を私の護衛に付けて戴きたい」

深々と最敬礼し、ユーゼスはそう言った。

思えば、こうして人に頭を下げるのはユーゼスにとって大分久しぶりな気がしていた。

「……………分かりました、彼を護衛として同伴させましょう」

渋々、といった顔をした弦十郎に、ユーゼスは「勝った…！」等と心の中で思うのであった。

「ちよ、ちよっと待てよ！ あの軽口色男を仲間にするのか!？」

「お、落ち着け雪音！ どうした今日に限って!？」

響どころか翼にもなだめられる。だがそれでもクリスはアクセル

の事が気に入らない様だ。

「いやあ、あの人はいい人だと思うんだけどなあ……」

未来と共に避難民を助けていたアクセルを思い返す真司。

危うく真司が被害拡大の手助けをしそうになった事は今は忘れているのだが。

「悪いが、これが決定らしい。……お前達は心配しなくても良い。私がすっかり見張っておくのでな」

ユーゼスはそう言いながら静かに冷笑した。完全に悪者のする顔である。

——たかが一瞬だったその顔を、翼は見逃さなかった。

(……やはりあの男、何か気に入くない……)

ある意味クリスと同じなのだが、そこを気にしないのが防人スタイル。未だガミガミと言うクリスと片手で制しつつ、彼女が彼女なりにユーゼスという存在を危険視し始めた。

「——さて、それじゃあ全員、作戦開始だ！」

弦十郎の発破が掛り、約一名を除くほぼ全員が即座に出動の支度を始める。

ユーゼスもその仕草をしつつ、ブリーフィングルームを出て行くこうとする士を見つけた。

「待て。約束だったな、早川健について……何を知っている？」

すぐに追いかけてそう問い詰める。

士は瞬時に「面倒なヤツに捕まった」と言いたげな表情になる。

「俺も詳しく知っている訳じゃない。ただ、偶然声を掛けられただけだ」

「偶然？」

「二か月前……お前と別れた後に、な。どうせ鳴滝の野郎が仕組んだんだろうが、俺にユーゼス・ゴッツォの恐ろしさ、強さ、そして全てを一方的に言ってきたやつだ」

成程、やはり早川健——快傑ズバットはかつてユーゼスが居た虚構の世界の記憶を持ち合わせているらしい。

だが、ユーゼスには引つかかる点が一つあった。

「……あの時、微かだがあの世界に居た者全てが元の世界へと帰還していくビジョンが見えた……もはやそれすらも虚構だった、という訳なのか？」

「さあな……それはそんな世界を創ったお前に聞いてみな」

そう冷たく言うと、士はその場を後にする。

残されたコーゼスは士が放った言葉を噛み締めながら、一人茫然とするしかなかった。

第十話 招かれざる異邦者（Ⅱ）

【某所自衛隊基地】

特殊災害対策機動部二課のメンバーは各々作戦遂行の為に地上に出ていた。

一つ、ソロモンの杖を岩国の米軍基地まで輸送する手伝い。

二つ、東京に落下してきた謎の機動兵器「ブラック・エンジェル」の調査

三つ、風鳴翼のライブの護衛。

ユーゼス・ゴッツォは機動兵器の調査を行う為に、自衛隊基地内で待機していた。

「……………これで準備は完了したな」

ユーゼス自ら指名したスパイ疑惑男は今頃、護衛兵に連れられている筈だ。

あとは彼がやって来ればコチラは「ブラック・エンジェル」の調査へと向かえる。

まだ余っている時間を、ユーゼスは静かに過ごそうとしていた。と、その時であった。

「——貴方は、ユーゼス・ゴッツォ博士ではありませんか!？」

ふと、ユーゼスは男から声を掛けられた。

男もユーゼスと同じく白衣を身に着けているところを見ると、どうやら同業者——研究者であろう。

メガネを掛けた白髪の研究者はユーゼスに近付いてきた。

すると、何処かで見ることがある気がしてきた。

「お前は……………確か聖遺物研究の……………」

「はい、米国にて聖遺物研究を行っているウエル、と申します。……………」

いやあ、まさか世界を驚愕させた世紀の博士が日本に居るとは、思いもしませんでしたよ!」

ウエル博士は気さくに握手を求めてきた。

成程、岩国の米軍基地からアメリカまでの輸送及び本土での解析作業に従事するのは彼なのだろう。

ユーゼスは握手に応えようと手を差し出そうとして、ふと自身の掌を見た。

先程まで自身の研究課題である、超神ゼストの為のエネルギーコンバーターの調整を行っていた。その時に着用していた真つ黒煤まみれな手袋を今の今まで着けている事をすっかりと忘れていた。

「済まんな、今手袋を外そ——」

「いえいえ！ 世界を救える貴方がわざわざそんな事をする必要はありません！」

そう言って、ウエル博士はそのままユーゼスと握手をした。出会えた嬉しさなのだろうか、彼はユーゼスの腕をそのまま上下にブンブンと幾度も振った。

多少のうざったらしさを抱えつつも、ユーゼスはこのウエルに対しては好意的であった。

(少し抜けているが、彼は相当優秀な人材なのだろう……)

だが、そんな人間がとんでもない過ちを犯す危険性がある事を、ユーゼス自身が身をもって知っていた。

しかし価値観や意識が暴走してしまうのは天才故なのか。

次回の研究発表の議題にしてみるのも良いのではないかと考え始める。

「ああ、失礼しました！ ……私、貴方が学会で大気浄化弾を発表した時の会場に居たんですよ。いやあ、あの時はたまげました。貴方はこの世界を救う英雄となりえる人物です！」

「英雄、か」

——私は英雄等では無い。

そう一言口にしそうになって、直前で止めた。

『英雄』というものの価値観は、所詮個人個人が抱く理想像だ。ユーゼスが思い描く英雄というモノがウルトラマンであるように、彼はユー

ゼスの事を英雄だと思っている。

それに一々口出しをしていては、彼にも失礼であるし、何より自身自身の存在を否定している様にも思えた。

「私程度は英雄の器ではない。君の様な、次世代を担う者達こそが英雄になる事が相応しいだろうな」

適当にはぐらかしつつ、自身は英雄という存在ではない事を言った。

しかし、この言葉を聞いたウエル博士は何故か尚更ヒートアップする。

「確かに、次の時代の英雄は僕たちが担っていくべき……。だから、僕は英雄になるんだ。この世界を救う英雄にイ！ ウルトラマンすらも越える英雄にイ！」

一人そんな事を叫び出したウエル。何だか顔が崩れてきている気がしなくもない。

この男の「英雄に対する執着心」が異常である事に、ユーゼスは少し引いていた。流石にそれはない、という感じで静かに冷めた眼で眺める。

(仮にウルトラマンを越えるとして、どうやって越える気だ)

冷静に突っ込みを考えつつ、この男をどうやってなだめようか考え始める。

すると、丁度そこに風鳴弦十郎司令が姿を現す。

「ウエル博士、ここに居らっしゃっていたのですか！」

「……ああ、はい。憧れのユーゼス博士にお会い出来たので、少し話し込んでしまいました」

(それはお前が一方的に語っていただけなのだがな)

先ほどまでの顔芸——もとい顔面崩壊は瞬時に収まり、ウエルは最初の好青年風に戻っていた。

そんな豹変ぶりにユーゼスは少し気味が悪くなっていた。

(成程……私もあの様な感じに成り得る可能性があった訳か……)

それも私だ、それも私だアアアッ！、と叫びまくるビジョンが一

瞬見えた気がした。

「そろそろ岩国に出発します、ご準備を。……ユーゼス博士、失礼」
未だ喋り足りない感じのウエル博士だったが、弦十郎は彼を引きずってそのまま退散する。岩国輸送組には時間があまり残っていない様子であった。

因果律の鎖を越えて — URTLA・ZESTER —

第十話 招かれざる異邦者（II）

ウエルと別れたユーゼスは、懐から一つの結晶を取り出していた。深い青と淡い緑が混ざり合い、異質なコントラストを描く結晶体。それは、かつてユーゼスがカラータイマーの研究を行っていた時に得たデータを元に開発した、いわば「超神ゼスト版ベータカプセル」であった。

特に名称を決めている訳でもなく、単に「コンバーター」と呼んでいるコレの実践的な起動実験は未だ行っていないかった。

一応、こんな仲介器が無くとも超神ゼストに変身する事は可能であろうが、如何せん爆発的なエネルギーの制御が出来ないのが弱点であった。

二か月前、ベムラーとの戦闘においては何ともなかったが、その時に微かに異常さを感じしていた。

暴走、という事はないであろうが、それなりに異変が起こらない事は保障などされていない。

邪悪な力と光の力。二律背反である二つの力は、それぞれが＋と－のエネルギーであるにも関わらずに反発する。

二年前の邪心戦争時、イーヴィルティガと呼ばれる邪悪なウルトラ

マンが出現したらしいが、それも二つの相容れない存在の力同士が存在した事によつて暴走したのだろう。

ウルトラマンオタク、とも言えるユーゼスのウルトラマン研究はここまで導き出していた。

「……いくら今の私が正義として立っていても、ふとしたきっかけで悪に染まる事も有り得るのだろうか」

かつて犯した罪の事も含めて、ユーゼスはそう思った。

そんな風に干渉に浸っていると、数人の武装した自衛隊員たちが近づいてくる。

「ユーゼス博士、例の男——アクセル・アルマーを連行してきました」

兵士に引つ立てられながら歩くアクセル。数日間も独房に入れられていたせいか、少し怒っている様でもあった。

「ちつ、今度は何の用だよ、博士さんよ」

そう食つて掛かるアクセルに、ユーゼスは少しだけ笑った。

「フツ………なに、お前の嫌疑を晴らす事を兼ねて、私の護衛をすればいいんだ」

そう言うと、ユーゼスは一人の自衛隊員に合図を送った。その兵士は渋々、という顔で、大きなトランクを担いでくる。

「これは………」

「お前の持ち物………唯一の記憶を探れるかもしれないモノだろうか？」

「ミズチ・ブレード！」

愛刀を手にしたアクセルは、その感触を確かめるかのように軽く振る。

空気を引き裂くブツツ、という音が響くと、彼は今までとは一変して笑顔になる。

「なんだよ、アンタ話分かってくれるじゃねえか！ なら、今日はしっかり働くとしますか！」

ケラケラと笑いながらミズチ・ブレードの切っ先を折り畳む。そして、それをトンファアの様持ちながらユーゼスの前に立った。

「宜しく頼む。アクセル・アルマー」

「ああ、宜しく！」

二人は堅く握手を交わした。

【車内 移動中】

「——そう言えば、俺とアンタが行く所は一体何があるんだ？」

アクセルはそう問う。

「東京に落下した未確認の人型機動兵器——通称『ブラック・エンジェル』の調査と回収だ。……もし、危険な勢力に奪取されては困るのでな」

そう言いながらユーゼスは窓の外を眺める。

落ちた時の衝撃か、それなりのクレーターが出来上がっていた。

割と都心から離れた郊外であったものの、街のビルは幾つも倒壊し生活インフラは完全に停止してしまっていた。

住んでいた住人達は廃屋の撤去に追われながら、各自明日からの生活をどうするか考えなければならなかった。住む場所も仕事も失う者達が続出したからであるが、こういう状態を解消出来ないのが「この世界」の日本政府であった。

（かつての——アノ世界であったならば、こういった災害の復興が万全かつ迅速に行われたが……怪獣騒ぎが無くなった途端に政府は墮落したか）

この世界の日本は、数々の災害や事件に巻き込まれてきたらしい。幾度も現れる怪獣の恐怖。その度に多くの犠牲が出て、人々は恐れ慄いた。

邪神戦争もそうであったが、それよりも甚大な被害を出したのが十年前に起こった世界規模の戦争「第一次異星人戦争」であった。

全世界に現れた怪獣、異星人の総攻撃によって都市機能は長らく停止し、あわや人類滅亡が迫っていたらしい。

3人のウルトラ戦士が死力を尽くし、どうにか撤退に追い込んだらしいが、それ以降、3人のウルトラマンは現れる事がなかった。

以降、人類は自らの手で地球を守る為にパーソナルトルーパーを製

造し、防衛戦力の増強をしていた。

(……ウルトラマン以外にも、この世界を護る戦士達は数多く存在する。門矢の様な、仮面を被りし戦士達が)

仮面ライダー、と呼ばれる存在が、ユーズスの脳裏に浮かんだ。

それまで、一部の人間しか知っていなかった。

……仮面ライダー、という存在を。

だが、現在彼らは都市伝説として、人々の記憶の中に語り継がれている。

例え、歴史に名前が刻まれなくとも、彼らは確かに存在していた。公で人々が知る事になったのは、第一次異星人戦争終結から1年も満たない頃であった。

世界各地で復興が進む中、突如として「それ」は名乗りを上げた。

——神に愛されし者「BADAN」——

彼らの世界征服によって、世界は、特に日本は大打撃を受けた。

再び滅亡が始まろうとしていた矢先、バダンを壊滅させた者達がいる。

自らの死すら厭わず、無償で戦う戦士達。

強靱な機械の肉体を持つ者達。

仮面を被り、マシンに乗り颯爽と駆けつける彼らが、世界を救った戦士達「仮面ライダー」であった。

10人のライダーによって世界は救われた。英雄として語り継がれる彼らはその後、行方をくらませたらしいが、一説には再び悪を追い続けていたらしかった。

その後、日本に出現した秘密結社ゴルゴム、クライシス帝国と戦った者も仮面ライダーであるとされたが、その真相は闇の中である。

独自ルートで調べた「仮面ライダー」に関する事を思い出し、ユーゼスは物思いにふける。

(……仮面ライダーという存在は11人の筈だった。私と同じく時空を渡って来た門矢士はまだしも、何故城戸真司の言う『13ライダー』の事だけ存在がないのだ?)

城戸真司が仮面ライダー龍騎へと変身した後、取り調べにて明らかにされたのは「13人の仮面ライダーによる潰し合い」であった。

城戸が戦っていた当時、ミラーモンスターと呼ばれる怪物と13人のライダーを巡る戦いが勃発していたらしい。

その戦いで城戸真司は一度死んだが、神崎兄妹の手によって世界は『修復』され、元ライダー達は記憶を失って蘇った。

——世界は『修復』された。

(いつも引つ掛かる……。何故、「ミラーワールド」に関する事だけが消され、残りを修復したのだ? 怪獣や怪人の事まで含めて消去すれば良かったのではないのか?)

そうなれば、他の仮面ライダーも普通の「人間」として生きるのではないだろうか?

怪獣が襲来する事も無かったのではないだろうか?

ユーゼスの疑問は答ええないが、それに答えられる者は居ない。その事に絶望するしかなかった。

そして、こんな考えをする自分が一人生き急ぐ様な感覚がし、少しむず痒さを覚えた。

(一度死んだこの体は、もう死ぬことを恐れないというのか……)

フツ、と息を吐くと、車が突然揺れた。

その揺れで、こっくりこっくり船を漕いでいたアクセルが目を覚ました。だらしなくよだれが垂れている。

どうやら、ユーゼスは長い間考え事をしていた様だ。

「おいおい、どうしちゃったんだよ?」

「路面のアスファルトが剥離していただけです。車体には、何も問題ありません」

運転手の自衛隊員はそう答える。

ユーゼスは窓の外に視線を合わせた。

先程から見えていた廃墟が殆ど無くなり、一方でコンクリート片の残骸ばかりが目に入ってきた。

「もう近いな」

「はい、もう間もなくです」

そう言われた時に、検問所に辿りついた。

隊員が書類を渡すと、そのまま車を通す。どうやら、この先が落下の中心地点らしい。

数十秒の間揺られた後、ユーゼス一行は現場に到着した。

「着いたか……あれが調査団か？」

「ひえー、あれはパーソナルトルーパーじゃないか？」

アクセルは車から降りると、目の前で片膝立ちする黒いパーソナルトルーパーを見上げた。

長く使われているのか年季が入ったそれは、その場を護るかのよう配置されている。要人警護の為であろう。

「——貴方が、ユーゼス・ゴッツォ博士ですね？」

調査団のテントから、一人の女性がコチラに向かってきた。

メガネを掛けた彼女もユーゼス同様、白衣を身に着けている。

「そうだが……確か貴方は、エリ・アンザイ博士でしたか」

そうユーゼスに言われ、安西エリは光栄です、と一言返した。

「本職は考古学なんです、この調査にも協力させていただいていきます」

本部に案内します、と言われ、アクセルを引きずりながらユーゼスはテントに向かっていった。

「少佐、お二人をお連れしましたよ」

安西に「少佐」と呼ばれた男が、ユーゼス達の方を振り向く。

どうやら国連軍の軍人らしい。だが、立ち振る舞いは一介の研究者と言われてもおかしくはない。

「これはどうも、遠路はるばる起こして頂いてありがとうございます。

……私は、国連軍の秘密情報部で活動しているギリアム・イエーガー少佐です」

ギリアムはそう言いながら手を差し出した。

「私はユーゼス・ゴッツォ……いや、もう私の説明は不要だろうか？」

ユーゼスも応える様に手を出し、握手を交わした。

——瞬間、

(……………!? ここ、コレは……………!)

ユーゼスは、何かが流れ込んでくる様な感覚に襲われた。

こんな経験は流石の彼も初めてである。

(ユーゼス・ゴッツォ……………。俺と同様、並行世界を彷徨う宿命を背負った男、か)

(!? 心の中に話しかけているのか?)

ギリアムの声と共に、ユーゼスの中で徐々にナニカが入り込んでいく。

侵食されている、という訳ではなく、共鳴していると言った方が正しいのだろう。

(ああ……。だが、コレは俺の力じゃない。あの「機体」が俺達を仲介しているんだ)

すると、「機体」のイメージが徐々に浮かび上がる。

(…………ブラック・エンジェル)

(あれは、我々を求めている様だ。……いや、俺よりも貴方の方だろうか)

(どういう……………、ツ!?)

突如、頭痛の様な鈍い痛みが走る。

意識に深く抉る様に走るそれは、ユーゼスの体を蝕もうとしていた。

(限界か……………。これ以降は、口頭で説明させて貰おう)

ユーゼスの中に流れ込んで来ていたモノが、消えていく。そして、徐々にユーゼスは五感を取り戻していった。

「……………!」

目の前には、ギリアムが立っている。

だが、既に握手は解かれていた。

「――それでは、あの機動兵器についての説明をしてもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ……………」

先程起きた共鳴現象の影響が残っているのか、少し立ちくらみがしたが、ユーゼスはそれを振り払いながら説明を聞き始めた。

【???

何一つ見えない闇。暗闇。

無限に広がる虚空の中に、ポツンと浮かぶ影が一つあった。

人間。

いや、それはかつて“ニンゲン”であった存在。

「……………ここは……………」

意識が覚醒した男は、自分の周囲の現状を確認するかのよう眼をぐるり、と廻した。

「因果の果てよりも深い場所にある深淵の果て……………」

周囲には何も見えない。それどころか、自身の肉体すら見る事すら出来ない。

その深淵は、存在が消えた者たちが堕ちていく場所。

“彼”もまた、幾度、幾十度目の死によってこの場所を訪れていた。

「……………まだ俺は、因果に縛られるのか」

男はそう言いながら溜息をついていた。

縛られた鎖は、未だ強く絡みつく。

何度脱出を試みようと、抜け出すことなど出来はしなかった。

だから、彼は半ば受け入れる様な形で、その宿命を背負ってきた。無限に彼を取り巻く転生と死の輪廻の中で、かつて彼と共に戦った者たちに『力』を与える為に……。

「……俺は、何の為に……」

ふと、彼の体が軽くなっていく。

まるで体が少しずつ消えていくかのような感覚。

それはもう飽きる程体験した、転生する合図であった。

男の存在は、再び何処かの世界に彷徨う。

だが、その世界には確実にある三つの存在がある。

自身の半身である、漆黒の墮天使。

自身が育て、やがて刃を向けなければならぬ、雌伏の戦士

自身を縛る因果の元凶であり、彼という存在を造った、『ユーゼス・

ゴッツォ』という男。

「——ユーゼス、今度こそ俺たちの因果は断ち切る事が出来るのか……?」

男は、イングラムはそう小さく呟いた。

第十一話 招かれざる異邦者（Ⅲ）

【数時間前 岩国 米軍基地前】

ユーゼスがブラック・エンジェルの調査に向かっていた頃……

「——これで、搬送任務は完了となります。ご苦勞様でした」

軍服を着たアメリカ人は、そう言うのと電子ハンコが押されたタブレットを脇に抱えた。

岩国にある米軍基地まで完全聖遺物である『ソロモンの杖』を輸送する、という任務を終えた立花響、雪音クリス、門矢士、友里あおいの四人は、やっと終わったと胸を撫で下ろした。

「ありがとうございます」

軍人さんから握手を求められ、一応代表のあおいがそれに答え手を握った。

輸送任務中、何処からか現れたノイズに対抗し、シンフォギア装者と仮面ライダーディケイドは必死になって防衛した。

（ただし、士曰く「シヨツカー軍団を相手するよりかはだいぶ楽」との事）

そのおかげでここまで被害が最小限で済んだし、何よりソロモンの杖とウエル博士を失わずに済んだのであった。

やっと仕事から解放された事に安堵し、響、クリスの兩名は顔を見合わせて笑顔になる。

一方、士だけは何処か遠くをじーっと見続けていた。

（……何か、腑に落ちないな）

彼をそう思わせているのは、輸送中に襲ってきたノイズの集団。

動きやパターンはいつも通り単調かつ残忍であったが、そこ以前に違和感があった。

——何故、感情や思考を持たない彼らがソロモンの杖を狙うのか？

士個人でも色々と調べたが、この世界にもシヨツカー等の悪の組織

は存在している。

仮に、彼らの手によってある程度ノイズを操作できる手段が造られてしまえば、それこそ世界は本当に手も足も出なくなるだろう。

そんな輩が、ソロモンの杖を狙っているとすれば……？

(考え過ぎか……。まさか、米軍相手に喧嘩振っては来ないだろうしな)

既に杖とウエル博士は米軍に引き渡され、ここから先は彼らの領域だ。

仮に悪の組織が攻めたとしても、士が訪れてきた世界の様に脆弱ではない。何より、パーソナルトルーパーという大型機動兵器も存在する事だし、これ以上事態が急展開する事もないだろう。

「……つたく、手間かけさせやがって」

ぼそつと悪態をついたが、それはそれで士のデレであった。

「——確かめさせて頂きましたよ。皆さんが、ルナアタックの英雄と呼ばれる事が、伊達ではないとね」

ウエル博士が響とクリスに近付いて、そう言った。

その言葉に反応したのは言わずもがな響。

「英雄!? 私達が!? あっ、いやあく! 普段誰も褒めてくれないので、もつと遠慮なく褒めてくださ〜い! むしろ、褒めちぎってください……アイダツ!」

余計な事を口走る響に、クリスは横から側頭部目掛けてチョップをかました。

その光景を冷たい目で見るとあおい。

(何やってんだ、あいつ……)

「この馬鹿! そういう所が褒められないんだよ」

実にその通りであると、士もその言葉に頷く。

だが本人はそんな事気にしても無かったようで「痛いよ、クリスちゃん……」と呟く始末である。

「世界がこんな状況だからこそ、僕たちは『英雄』を求めている……そう!」

ん?、と士、あおい両名はウエル博士の方を向いた。

「誰からも信奉される、偉大なる『英雄』の姿をオ！」

少し熱が入りながらそう言った。

(オイオイ、顔芸がスゲエな)

もうこんな段階で若干顔が崩れるウエル博士に、士は少しだけ引いていた。

「なっはっは〜！ それほども〜！」

だが響はそんな事もお構いなしに、再び上機嫌になっていた。

ウエル博士は落ち着きを取り戻すと、後ろに控える軍人を見ながら言葉をつづけた。

「……皆さんが護ってくれたモノは、僕が必ず役立てて見せますよ」

にこやかな笑顔でそう言ったウエル博士に、士は少しだけ違和感が消えた。

「不束なソロモンの杖ですが、宜しくお願いします！」

「……頼んだからな」

シンフォギア装者二名は各々そう投げ掛けた。

【岩国 基地近くにて】

「——無事に任務も完了だ！ ……そして」

「うん！ この時間なら、翼さんのステージにも間に合いそうだ！」

響とクリスはそう楽しみそうに話した。

「翼のステージ？ ……そういや、風鳴のヤツはライブだとか言ったな」

作戦説明の時の弦十郎の言葉を思いだす士。

確か、専属カメラマン（という言い訳）兼護衛の為に城戸真司もマネージャーの緒川慎次と共に付いていた。

城戸曰く「ダブル・シンジだ！」なんて冗談を言っていたが、彼の方もそれなりに大変な目に付き合われている事だろう。

「士さんも含めて二人が頑張ってくれたから、司令が東京までへりを出してくれるみたいよ」

通信端末を持つ友里あおいはそう言った。

「マジすか!?!」

眼をキラキラと輝かせる響。

その瞬間を取ろうと、士が首からぶら下げるトイカメラを手にした時――

――ドンツ!!!

派手な音と共に、黒煙が立ち上がる。

そして、その中から巨大なノイズが顔を出した。

「なっ……………」

「マジすか……………!?!」

一気に目が点になる響。

「マジだな……………」

クリスは響に答える形で言った後、即座にノイズ目指して駆け出していく。士もまたそれを追って走った。

「立花、お前も早く来い!」

「ああ、は、ハイ!!」

響も一目散にその後を付いて行った。

【岩国 米軍基地敷地内にて】

突如として出現したノイズ達。10匹はいるであろう奴等は、基地内を暴れまわっていた。

米軍の軍人達は各々銃火器を片手に応戦しているが、効き目などありはしない。

位相差障壁によって、こちらの世界での存在比率が限りなく0に近いノイズは、一方的に兵士たちを虐殺していった。

「ぐ、どああああ……………」

「うわああああ……………」

ノイズの攻撃によって炭化していく兵士達の叫びと鳴り渡る銃声だけが、この戦場を満たしていた。

棒状に変形し、兵士達へと突撃していくノイズ。成す術なく、次々と兵士達は炭化し死んでいった。

「……これ以上やらせる訳には行かないな。立花、雪音、やれるな？」
基地内に駆け込みながら、士は二人にそう問う。

「当たり前だ！ これ以上は好きにさせるかよ」

「私だって、大丈夫！」

「そうか……。行くぞ！」

ライドブツカーからデイケイドのカードを取り出す士。それをデイケイドライバーに挿入し、サイドハンドルを押し込んだ。

—— KAMEN RIDE ! DECADE!!

士達の急速な対応によつて、事態は間もなく沈静化した。

だが、被害は小さいとは言い消えるものではなく、犠牲者は数百人にも上った。

ノイズの群れを何とか倒した響とクリスの二名は、現在は米軍の救護テントで休み、あおいと士は本部への報告を行っていた。

「——はい、既に事態は収拾。……ですが行方不明者の中にウエル博士の名前があります。そして……」

通信端末を手にするあおいと士。

あかりが言うのを少し躊躇った時、その言葉を士がそのまま代弁した。

「そして、例の完全聖遺物……ソロモンの杖も、どっかに行きやがった」

『そうか……。分かった、急ぎコチラに帰投してくれ』

端末の向こうの弦十郎は重々しい口調でそう告げた。

「分かった。ガキ共を連れて戻る」

「直ぐに帰投します」

間もなく、通信が切れた。

士は、一人この状況を推理し始める。

先にかけていた違和感が、まさに当たっている気がしたからだ。

(この事態を、何かの組織が仕組んだとしても……この世界には、既にシヨツカーもクライシス帝国も居ない……。なら、一体何の仕業だと言うんだ?)

見えない相手程、怖いモノはない。

こんな時に鳴滝がいれば、等とも思ったが、あいつに頼るのも癪である。

士は、忍び寄る悪意を確かに感じ、そしてそれを警戒していた。

因果律の鎖を越えて — URTLA・ZESTI —

第十一話 招かれざる異邦者(Ⅲ)

【数時間後 ブラック・エンジェル落下地点】

「——この機動兵器は、明らかに地球で作られたモノではない……それは分かるが、だがそれ以外は全くだな」

ユーゼスはそんな風に匙を投げた。

隣にいるギリアムも同じ様にため息をついている。

ユーゼス達が現地に到着して、数時間が経過していた。

既に日は落ち、

例の謎の機動兵器——ブラック・エンジェルの装甲の一部を採取して、その場で簡易ながら様々な調査を行っていた彼らは、早く詰まりそうになっていた。

「古代文明が作り出した技術ではない事も確かですが、それ以前に地球外で作られたモノだとは思いますができませんよ……」

安西エリは二人とは違いやけに疲れている表情をしていた。それもそうだ。

そもそも、こういう異文明は彼女の得意分野でないし、それ以前に地球上に存在する物質で構成されていない事が彼女のストレスをマツハで加速させていた。

「だがなんだ……？　この金属は異質にも程があるな」

先ほどから顕微鏡で細かい作業をしているユーゼスだったが、ようやく顔を上げる。

顕微鏡の画像がパソコンに映し出されると、ギリウムと安西もそちらに目を向けた。

「先ほどの金属片か……」

「そうだ。だが……妙な事に、この金属は少しずつその形態を変化させつつある」

「何？」

「そんな事が可能なのですか……!？」

ギリウムは今一度、金属片が映る画面を見た。

微かだが、小さな破片が振動している様にも見える。

ユーゼスは手元のパソコンを操作すると、もう一つウィンドウを表示した。

「先ほどから定期的に撮影した画像だが——」

金属片の画像が断続的に表示される。

パラパラ漫画の如く表示される画像は、金属片が少しずつ変形していつている事を顕著に示していた。

最初は無造作に割られた破片であったが、それが長方形や三角形などの凶形に様変わりしているのがよく見て取れる。

「——この様に、形を自由に変化させる金属らしい」

「流動金属の類か……」

パーソナルトルーパー用の武装に、「流動金属」と呼ばれる特殊な金属を使った武装がある。

テスラ・ライヒ研究所が独自に開発したスーパーロボット、グルンガスト参式が装備する武器の一つである日本刀を模した刀「斬艦刀」は、流動金属を使用する事でその刀身を自由に調整する事が可能である。

この特殊な金属は、電氣的、磁氣的、機械的な信号を読み取る事によつて形状を変化させる為、その信号を送信する発信装置が存在しなければずつと水飴状のままである。

だが、目の前にあるこの謎の金属は、自己的に形状変化を行う。

まるでこの金属の原子一つ一つに「意思」でもあるかのように動き回り形を変えるこれはもう一種の生命体なのではないかとも思われる次第であった。

「まさか、外宇宙で活動できる金属生命体なつて事はないだろうが……」

冗談交じりにこう言ったユーゼスであるが、冗談で済まない様な気がしてならなかった。

一種の直感とも言うべきか、それとも彼の体内のクロスゲート・パラダイム・システムから発せられる危険信号か……。

どちらにしろ、彼は何か危険が迫っている様で気が気ではなかった。

そんな時、ギリウムが画面を操作しつつ、安西に向かって口を開く。「案外、新手の宇宙人の可能性も考えられる。……二年前の邪神戦争の様に、また新たな戦いが始まらなければいいがな」

宇宙人の恐怖は、全ての地球人が周知である。

だが、そう思っていてても危うく利用される事があるのが怖い。人の心に付け入る悪質な宇宙人は、特に、だ。

ユーゼス自身がかつてそうであった事もあつてか、隣でギリウムが言つた言葉を真摯に受け止める。

今は「地球人」サイドであるユーゼスは、宇宙人の脅威から人々を

護れる様に努力しようとか今一度考えていた。

——テレテレテ、テツテレテツテ、レツテ、レツテ、レツテ……」

突如、調査団のテント内でメロディーが流れ始めた。

何だかゲームの戦闘BGMみたいなその曲を聞き、ポケットから通信機を取り出すのはギリアム・イエーガーであった。

「済まない、私の通信機だ。ちよつと失礼する」

「ああ、別に構わんさ」

その言葉に甘え、ギリアムはテントの外に出ていった。

「フツ、大層気楽なものだな……」

ユーゼスはそう呟きながら、気晴らしにとギリアムについて考え始めた。

(ギリアム・イエーガー少佐……所詮、階級と個人データは偽造なのだろうが……)

ギリアムと呼ばれる男。

ユーゼスが並行世界からやって来た事を知る正体不明の男。

警戒していない訳ではないが、何か彼にはシンパシーを感じる部分があった。

それ故に、放っておいても良い存在だと認知しつつあった。

(奴は『俺と同様、並行世界を彷徨う宿命を背負った男』等と言ったな……)

つまりは、彼は並行世界を移動出来る男なのだろう。

並行世界間の転移が自身の意思であろうが突発的であろうが、ユーゼスと類似している事は間違いない。

だが、それだけでは彼がユーゼスについて知り得る事には繋がらない。

仮に門矢士、早川健によつて伝えられた事も考えたが、士は二課の潜水艦に乗り続けていた為にそんな余裕などない。

早川が漏らしたという点だつてあり得ないが、わざわざ誇大妄想と捉えられかねない事を言うだろうか？

いずれにせよ、ユーゼスについて知っている人間が新たに現れた事

は吉とも凶とも転がりかねない状況になりつつあった。

「——全く、問題は山積みだな」

ユーゼスは含むようにそう呟いた。

一方、外で警護の任を任せられていたアクセル・アルマーは、一緒に警護していた自衛隊員達と共に談笑していた。

「——それじゃあ、君は記憶喪失なのか？」

「そうらしいが、正直、記憶が無くても何一つ不自由ないぜ」

そう言いながらアクセルは腕をグルグルと動かす。

「……ま、時々夢で出てくる奴については、何か知りたいんだがな、これが」

「夢に出てくる奴？」

隣で話を聞いていた若い自衛隊員の男は、アクセルのその言葉に食いついた。歳が近いのか、割と早期に打ち解けたのである。

「ああ。なんかこう、デカくて、銀と赤と紫っぽい色してる巨人でなあ……」

臃げな記憶を頼りにそう呟くアクセルを、隊員は少し笑いながら言った。

「ああ、それは『ティガ』だよ」

隊員が語った言葉が、アクセルの脳裏によぎる。

——何とも言えない、悪寒の様な物を背負って。

(……やっぱり、俺は何か知っているのかねえ?)

アクセルはそう自問自答しつつ、隊員に訊き返した。

「一体、何だよそれ」

隊員はそう問われると、重い装備を外して立ち上がった。

「人類の味方で、地球を守る正義のヒーロー！俺達のウルトラマン
さー」

シュワツチ、と言って隊員はポーズをとる。

構えたり、手をL字に組んだりして、『ティガ』というモノについて精一杯教えようとしていた。

なるほど、ウルトラマンティガという者は巨大なヒーローなのだろう。

アクセルはそう結論付ける。夢に出てきた例の巨人とも一致している様な気がする。

「しっかし、ティガの事まで忘れてるなんて、とんだ男だなお前も」
「仕方ないだろ、名前とミズチ・ブレード以外については、殆ど忘れちゃったんだからよ」

そう言いながら、二人は笑いあっていた。
すると、後ろから足音が近付いてくる。

「あつ、ギリアム少佐！……どうなされましたか？」

それは、テントの外で通信を受けていたギリアムであった。
彼の顔はいつにも増して険しくなっている。

「TPCの連中にしてやられた……。彼等の目的は、最初から『ルルイエの遺跡』だった様だ」

ギリアムはそう言いながら、全隊員に向けて無線を送り始める。

———どうやら、深刻な様だ。

「コチラはギリアム・イエーガー少佐だ。全隊員に通告。これより10分前、南太平洋沖にて謎の高エネルギー反応が確認された。恐らく、TPCの強硬派が『例の計画』を実行に移したのだろう———」

『———それと同時に、ルルイエ付近から怪獣の反応が多数出現し、世界各地へと飛来しているとの事だ。……その内の一匹が、日本に向かってきている。全隊員は直ちに戦闘準備を行い、各位PTにて待機だ』

「敵、だど？ 怪獣といったな……」

テント内にいたユーゼスと安西もまた、その通信を聞いていた。

ユーゼスは持ち前の性格故に非常に落ち着いていたが、安西は少し焦る表情である。

「怪物がコチラに接近しているなんて……！ 地球平和連合は動いているのでしょうか……？」

安西達が口にする「TPC」「地球平和連合」とは、国連とは別系統で動いている防衛組織の事である。

例のGUTSもこの組織の一部であり、地球の為に働いているのだ。

「さあな。だが、安西博士は逃げた方がいいだろう。表の車に乗り込め」

そう早口に言いながら、ユーゼスは自身が持ち込ませた機材の撤収準備にかかる。

テキパキとコンピュータを分解し、小分けにしながら外のジープに載せた。

安西もその車に乗り込む。

「あの、ユーゼス博士は!?!」

「私は後で逃げる。今はお前を逃がす事が優先だ」

——それに、丁度良いテストでもある。

ユーゼスは不敵に笑った。

「出してくれ」

隊員にそう言うと、車は颯爽と逃げていった。

残されたユーゼスは一人、再びテント内にて残った機材の片付けを行い始めた。

「——おい、ユーゼスって人！ 俺も手伝うぜ」

表にいたアクセルが、テント内に入って来た。そのまま片付けに加担する。

「……何故残っている？ お前も逃げればいいものを」

「へっ、俺に課せられた任務ってのは、アンタの護衛だけ？」

そう言いながらアクセルは機材をコンテナに積み込む。二人掛かりで片付けを行い、テント内はあっという間にガランドウとなった。

「さて……どうするよ、博士?」

「決まっているだろう、戦うんだ」

ユーゼスはそう言いながら、身に着けていた白衣を投げ捨てた。そして、備品からちよろまかした双眼鏡を覗き込む。

「……ギリアム少佐、怪獣は目視出来る距離か？」

耳に付けたインカムの電源を入れ、マイクに語り掛けた。すぐにギリアムから返答が帰ってくる。

『コチラからはまだだが、先程、極東支部の先遣PT隊が交戦を開始した様だ。飛行するタイプの怪獣らしい』

飛行型の怪獣、と聞いて、ユーゼスはすぐさま自身の記憶を手繰り始めた。

かつてEFTで知り得た怪獣の情報を算出する。

この世界にEFTに存在した怪獣が出現しているのならば、幾つかの対策が取れる可能性がない訳ではない。

そうでなくとも、多少は応用が利く可能性もあった。

ユーゼスはギリアムに返答した。

「その怪獣、主な特徴はあるのか？」

少しの静寂の後、ギリアムは答えた。

『——未確認だが……邪神戦争で出現した「ゾイガー」と呼ばれる怪獣に類似している』

「ゾイガー……ふむ、これか」

端末を操作し、即座にゾイガーなる怪獣のデータを確認する。

画面に表示された情報を読むユーゼス。アクセルもそれを見た。

「鳥つていうか、蝙蝠つていうか……気持ち悪いヤツだな、これ」

「羽が付いたその怪獣——ゾイガーは、海上から内陸目指して侵攻中らしい。」

データには、かつてウルトラマンティガ、そしてGUTSによって数体撃墜した事が書かれていた。

パーソナルトルーパーでも撃墜出来なくはないだろうが、空中戦が不得意なPTでは苦戦を強いられる事だろう。

「我々に出来る事は何かないのか？」

ユーゼスはそうギリアムに訊いた。

『私の権限でパーソナルトルーパーなら確保出来るが、ユーゼス博士は操縦は無理だろう?』

正体を知っているギリアムは、そう言った。

要は、ゼストに変身するしかない、と言う事か。

「仕方ないか……アクセル、お前は二課に連絡を取れ。そこから応援を要請してもらうのだ」

そう言うとうーゼスは足早にその場から離れる。

だがアクセルはそれに付いて来ようとして、一向に離れる気配がない。

「おいおい、護衛なしでいいのかよ!? 俺だってあんな化け物とくらいなら戦えるぜ」

「なら、私について来たまえ」

ふと横を見ると、ギリアムが車に乗って来ていた。

手で「乗れ」と合図している。

「行け、アクセル。……私には、やらねばならない事があるのだ」
改めてそう言った。

少しの沈黙の後、アクセルは何か察した様に「はあ」と溜息をついた。

「分かった。アンタのその眼が本気だつて分かったからにや、俺も手出ししないぜ」

そうか、と呟くと、うーゼスはギリアムに目配せしながらその後にした。

(……頼んだぞ、うーゼス)

そう心で呟き、ギリアムは助手席のドアを開けた。

「アクセル君、急ぐぞ」

頷き、助手席に座るアクセル。

それを確認したギリアムは目いっぱいペダルを踏んだ。

第十二話 招かれざる異邦者（Ⅳ）

【数時間後 日本海域 海上】

ゾイガーが日本へと向かっている中、国連軍極東支部のパーソナルトルーパー部隊は海上で奴と接敵していた。

汎用PT、アルブレード6機で構成されたその部隊は、ジャイアント・レールガンを手にはゾイガーと射撃戦を繰り広げる。

既に一機中破し、中々にダメージを与えている筈だが、ゾイガーは倒れる事なく口から光弾を吐き続けてきた。

『ライディース隊長、奴め効いていません！』

「くっ……！ やはり、パーソナルトルーパーの武装では奴の皮膚を貫く事は出来ないか……！」

部隊を臨時で率いる隊長、ライディース・F・ブランシュタインは歯噛みしながら唸る。

彼の乗るアルブレードは全身が蒼く塗装され、また他機体と違い肩部に二連装ビームキャノンを取り付けられていた。

月のマオ・インダストリー社が次世代量産PTとして試作した機体『アヴァランチ・エルシュナイデ』と呼ばれるこの機体の特性と操縦者の腕が絶妙にマッチする、と言う事で数日前からライディースがトリアルを行っていた。

ライはトリガーを押し込み、エルシュナイデが右手に持つマグナ・ビームライフルを連射する。

放たれたビーム弾がゾイガーの腹部に命中したが、ダメージを与えられた気配は以前として感じられなかった。

「——ギユアアアアアアアアアッ！」

雄たけびを上げるゾイガー。

周囲に展開するアルブレード達はそれに怯えるかの様に、少しだけ

動きが止まった。

「——ッ、全機、動きを止めるな！」

ライは瞬間そう叫んだが、硬直したアルブレードのパイロット達は即座に動く事が出来ない。

囲む様に展開する防衛網の脆い一点から、ゾイガーが飛び出すのは時間の問題であった。

「くっ、逃したか!？」

高速飛行出来るゾイガーと違い水上をホバーするしかないパーツナルトルーパーでは、突出した怪獣を捕捉する事は難しい。

ライはレーダーを確認しながら機体を轉身させた。他のアルブレードもまた同じく反転する。

ゾイガーは依然として東京湾から内陸部を目指して飛行を続けている。

その軌道はずつとある一点を目指している様である。

(やはり、ゾイガーの目的はブラック・エンジェルか……?)
らしくない歯噛みをしながら、ライはふと脳裏にそう思い浮かべる。

国連の情報部——ギリウム少佐から送られてきたデータに記されていた謎の機動兵器『ブラック・エンジェル』。

仮に、ゾイガーや邪神ガタノゾアがブラック・エンジェルと関連がある場合、早急に対処しなければ、再び邪神戦争と同じ末路を辿る可能性もあった。

少しずつ感じる憤りを抑えようとライは深く深呼吸する。

(……あの時と違って俺達には力が——SRXがない。今持てる最大の力で、奴を倒さなければ……ッ!)

既に対異星人用兵器は存在しない。SRX計画は邪神戦争終結後に凍結され、機体は全て解体されてしまった。

そして、ウルトラマンという存在も既に無い。

この地球は、人類の小さな力で守っていかなければならないのだ。

「全機、ゾイガーを追え！」

部下にそう命令しつつ、ライはフットペダルを踏み込む。自身の

A・エルシュナイデのスラストも火を吹き、急加速した。
長距離レーダーに映るゾイガーのマーク。
それは、既に東京へと上陸しようとしていた……。

【東京都 ブラック・エンジェル落下現場付近】

ブラック・エンジェル落下現場からほど近い場所にある、少しひらけた場所。そこにユーゼス・ゴッツォは立っていた。

「……感じる。邪悪な存在が、近付いて来ているな……」

ゾイガーの気配を感じ取ったユーゼスは、懐から菱形の結晶を取り出す。

光と闇、それぞれのエネルギーをユーゼスにコンバートする収束装置であるコレが、ゼストへと変身出来る唯一のアイテムである。

「フツ……まさかこうも早く再びゼストとして戦う事になるとはな……」

結晶を右手で掴み、それを胸の前へとかざした。

すると、淡い紫と赤の光が混ざり合う様に輝き始める。ぼんやりと、だが確実にそこに存在する様に光るそれが、ユーゼスに託された『力』である。

「……罪を償おうとは思わん。だが、せめてこの世界は護らせて貰うぞ」

——ドクン……

鼓動。

ユーゼス、そしてゼストの生きる印。

結晶——ゼストクリスタルから放たれる光が徐々に広がり、彼の周囲も包み込む。

二つの相反するエネルギーは十分に蓄積された。

「……っ、はあッ！」

ゼストクリスタルを持つ右手を、上空へと突き上げた。

その瞬間、ユーゼスは思考した。

「——私の願いを聴くのならば、私に力を寄越せッ！」

強大な力が、彼の体を覆う。意識が、徐々に力の渦に飲まれる。

「うおおおおおおおッ——」

雄たけびと共に、ユーゼス・ゴツツオという存在は姿を大きく変えた。

アルブレード隊の防衛線を突破したゾイガーは、あと少しで東京上空という所まで来ていた。

悠々と飛行するゾイガー。奴の中には、一つの思考しかなかった。

——全てを破壊し、殺せ

何時植え付けられたかすら分からないその単語だけが、ゾイガーを動かす。

眼下に広がる都市。人。

それを潰す事が、奴の存在している意義であった。

光弾の有効射程距離へと辿りつく。

口を開け、破壊のエネルギーが迸る、その瞬間——

「ディアアアッ！」

ゾイガーの視界の端を横切るナニカ。

その存在に気付いた瞬間、体は水面へと落下した。

「ッ!？」

水柱を上げながら水面へと叩きつけられる。

何が起こったのか認知出来ぬまま、ゾイガーは上空に佇むナニカを睨みつけた。

鋼色の肉体に黒の意匠。漆黒の翼がその存在が異質である事を示していた。

「……………お前が、ゾイガーか」

超神ゼスト。

『神』の名を冠する、光と闇の力を持った巨人。

「ギャアアアッ!!」

ゾイガーは一目見た瞬間に察した。

巨人の存在は、ウルトラマンよりも危険であると――

威嚇された超神ゼスト——ユーゼスの意識は、ゾイガーという怪物がどういうモノであるか理解する。

「成程……単純な思考しか持たない、邪神の尖兵という事か」

ゾイガーは腔内に溜めていた破壊のエネルギー球を数発ゼストに向かって吐き出した。

高速で射出された光弾を、ゼストは避ける事なく全て腕で打ち消す。

バリツ、という普通なら有り得ないであろう音を立てて光弾が粉々に割れる。

ゼストは少しつまらない様にしながら嘲笑う。

「そんなものか……？お前は、邪神の忠実な下部なのではないのか？」

そんな『言葉』が理解出来ないゾイガーは羽ばたき空へと飛び上がる。そして、そのままゼストに向かって体当たりした。

「……………無駄だという事が、まだ分からののか？」

右手一本で、ゾイガーの巨体を止めた。

そのままゼストは意識して右の掌に力を込める。

「デュアッ！」

殺気、と言うべきモノで、ゾイガーは吹きとばされた。

飛行速度よりも速く投げ出されるが、流星怪獣、すぐに体勢を整えて減速した。

「少しはやれる様だが……結局はそんな程度だという事か。……………私の

敵ではないな」

ゼストは両脚とゼストウイングに力を込めた。そして、生み出された反重力エネルギーで夜空を滑空する。

数キロ飛ばされたゾイガーの腹目掛けて、ゼストは左腕を振った。「ディアアアアアッ!!」

高速、いや光速で振られる腕から発せられた真空波が、ゾイガーの脇腹を引き裂く。

一瞬の出来事に、ゾイガーはすぐに理解する事が出来ない。

「ギ、ギアアアアアアッ?!」

斬られた傷口からあふれ出す血と闇。

このゾイガーの個体は初めて、痛みというものを知る事となった。

『た、隊長! あれは……?!』

「何ッ! ……ウルトラマン、なのか?」

ゾイガーがやっと有視界で視認出来る位置までアルブレード隊が来た時、彼らは驚愕を隠せずにいた。

ライは目の前に佇む黒と銀の巨人をただ茫然と眺める。

「……なんだ、この既視感は……?」

唐突に、記憶の奥底に引つ掛かる感覚がした。だが、あんなモノと出会った記憶など今までなかった。

しかし、デジャヴを感じられる。

ライは酷く混乱していた。

「クソッ、一体何だこの不快な気分は……!」

パーソナルトルーパーを視界の端に捉えたが、彼らが攻撃して来る気配がない事に少し安心した。

怪獣と間違われて攻撃されるかもしれない事も考えていたが、そうならなかった事に感謝する。

「……そろそろ、決着を着けさせて貰おうか……!」

ゼストは更に上空へと飛び上がった。同時に、両腕に力を込める。右腕には光の力。

左腕には闇の力。

ゼストの体内にある二つのエネルギーを、両腕それぞれに解放する。

「……何故だろうな。この技を使おうとすると、自然と笑いがこみ上げってくる……」

低く冷笑しつつ、彼は上空で静止した。

白い光を纏った右腕と、紫の光を纏った左腕が彼の力を示す。

「ハアアアアツ……！」

右腕で縦に、左腕で横に空を斬った。すると、そこに白と紫の混ざり合った十字が現れる。まるで照準の様に、ゾイガーを捉える。そして――

「フフフ……ゼストファイナルビーム……」

空を斬った両手を十字、スペシウム光線と同じ形に組んだ。

二つのエネルギーが一つに混ざり合い、スパークしながら腕に収束されていく。

「ギョルアアアアアツ！」

ゼストが必殺光線を出すと察したゾイガーは、腔内に残っていた光弾を連射して放った。

必死の抵抗の様に吐き出される光弾であったが、虚しくもゼストに当たる事はない。

「デット・エンド・シュートツ!!」

収束された二つの力が、一つのエネルギーとして解き放たれた。

光速で放たれる光線はゾイガーの首から腹部一体に直撃し、その肉体を削っていく。

「ギアアアアアアツ!!」

苦悶の叫びを上げるゾイガー。そして、数秒の後にはその叫びは虚空へと消えていった。

肉体も意識も魂も、全ての存在がこの世界から抹消された。

ゼストは十字に組んでいた腕を解くと、ゾイガーが在った空間を一時眺めていた。

「……悲しいモノだな。闇に生み出された存在は……」

かつての自分との決別の意も込めて、彼はそう吐き捨てた。

「……正体不明の巨人が、ゾイガーを倒したか」

コックピット内でライは呟く。

対怪獣・異星人用として開発されたパーソナルトルーパーではもう歯が立たない事、新たな巨人が現れた事、その巨人が圧倒的な力でゾイガーを消滅させた事……。

たった数分の間だが、そんな出来事にライは少し困惑していた。

——その困惑が、世界を揺るがす事態に対応出来なかった事に気付くのは、もっと後の事である。

「——ッ！ 何だ……？ この不快感……何が起こった!？」

突如、背筋が凍りつく様な感覚がゼストに伝わる。

クロスゲート・パラダイム・システムが教えているのか、または彼自体が察知したのか……。

ゼストは後ろ——東京へ振り返ると、そのままそちらの方角へとすぐさま飛び去った。

(この感覚……空間が歪んでいる……?)

嫌な空気が支配する東京へと急行していった。

「どうしたんだ……？ 東京へと向かって行つたぞ」

突然飛び去っていった巨人に、ライは首をかしげる。と、その時、無線通信のコール音が鳴った。

『ライデイス少尉、今すぐ東京へ引き返してください!』

『ギリアム少佐! 一体どうしたんですか!?!』

通信の相手であるギリアムは少し焦る表情である。

『………宣戦布告だ』

【数時間前 東京 QUEENS OF MUSICライブ会場】

ゼストが戦う少し前の事……。

『マリア・カデンツァヴナ・イヴ、風鳴翼のスペシャルコンサート』
世界トップアーティストの夢の競演。

そう題されたこのライブには多くの観客が動員され、さらには世界にも同時生中継されていた。

戦争によって傷付いた人々の心を癒す、等と銘打っているが、どうせ市場拡大を狙うそういう輩の仕組んだ事なのだろう。

そう思っていないながらも関心する城戸真司の姿があった

「……ほんと、スゲエ人気だなあ風鳴翼って」

「そうですね、世界中で人気を誇りますから」

ライブ会場の舞台裏でそう話しているのは、弦十郎から護衛任務を任された城戸と翼のマネージャーである緒川慎次である。

「でも、俺なんかで役に立つのか？ 護身術とかは、緒川さんの方が上手いのに」

そう不思議に思っていた城戸はそう言う。

「……方が一ノイズが出現した場合は、翼さんだけでもどうにかかります。ですが、舞台裏のスタッフを護るまでは出来ない。そこで、城戸さんの力が買われた……って事です」

「成程……」と納得した城戸は、舞台袖から相変わらずライブを眺める。

ステージ上で歌う彼女をまともに観るのはこれが初めてであるし、何より、彼女に対する罪の意識があったからでもあった。

(……まだ高校生なのに、孤独な戦いに投じるのは相当キツイ筈だ……。それでも、ステージでは笑顔を絶やさないと、凄いよな本当)

二年前、邪神戦争の真つ最中に起きたライブ会場の悲劇。翼がまだ「ツヴァイウイング」であった時の事だ。

彼女は相棒である天羽奏を失った。そして、代わりに響はガングニールの力を手に入れたらしい。

相当数の死者も出した、史上最悪の災害として未だ語り継がれる。

龍騎の力が戻るまで何故か忘れていた事だったが、この事件にはミラーモンスターも関わっていたのだった。

未だライダー同士で戦っていた時、ミラーモンスターがノイズと共に現実世界に現れて暴れていたらしい（その時、ミラーモンスターはノイズと思われていたらしい）。

だが、城戸はライダーバトルのせいで救援に行けず、結局はあれだけの死者を出してしまった。

奏の死にミラーモンスターが直結している訳ではないが、それでもあの事件の一端が自分にもある事が、城戸にとって重荷にもなっていた。

翼はミラーモンスターの事も、ライダーバトルの事も知らない。だから、城戸が言わなければ責任も問われないままだろう。

だからこそ、城戸をじわじわと苦しめていた。

(……俺は、護る事が出来るのかな……優衣ちゃん……)

かつて護る事が出来なかった人の顔を思い出しながら、城戸はただひたすらに彼女の歌を聴いていた。

【同時刻 QUEENS OF MUSIC会場 観客席】

「……やっぱり凄いなあ、マリアと翼のライブは」

客席に座る一組のカップル。

彼らは世界各地を周る旅の最終点として、ここに訪れていた。

「隊長から貰ったチケットのおかげだね」

未だ感動の熱が抑えられない青年、マドカ・ダイゴは隣に座るヤナセ・レナに応える様にそう言った。

かつての歴戦の戦士である二人もまた、戦いの傷を埋める様にライブを楽しんでいた。

二人は既に、GUTSの隊員としてはもう戦う事は無いと判断し、TPCの火星開拓計画関係の仕事へと異動していた。

——もう、あの『力』も無いのだから

「…………このライブが終われば、結婚式だね」

「ああ…………」

ダイゴとレナの結婚式は、もう一週間を切っていた。二人は結ばれ、はれて家族になる訳である。

ダイゴは、もう目の前に近付きつつあるこの平和を、心から望んでいた。

戦わなくても良い世界。

みんなが幸せに暮らせる世界。

未だノイズによる災害が残っているものの、それでも、二年前と比べて十分すぎる程世界は落ち着きを取り戻していた。

歴戦の戦士たちも、銃を下す時が来たのであった。だからこそその、二人の結婚式である。

GUTS隊の仲間からは祝福の言葉を贈られたし、サワイ総監にも祝電を貰った程だ。

世界が平和になる

そう、ダイゴは思っていた。

思っていた、筈であった…………

「結婚式の招待状、もう全員分出したの？」

レナはライブから目を離さないまま、そう呟く。

ダイゴは普通にそれに応え、

「殆どは出したさ。あとは――」

『……………私にはくれないの？』

「ツ！」

ふと、声が聞こえた。

女の声だ。

聞き覚えのない、だが、妙に懐かしい様な声……………。

『ダイゴ……………』

「……………誰だ？」

ダイゴは小さく呟く。

だが、返事など帰ってくる筈がなかった。

周囲を見渡すが、話しかけてくる人の姿はない。皆、ライブに集中しているからであろう。

「……………どうしたの？」

少し挙動がおかしいダイゴに気付いたレナはそう問い掛ける。

「……………レナ、ちよつとトイレに行つてくる」

なんて言い訳を一言だけいい、すぐに席から立ち上がる。

何となく感覚で、声の主を探す為に小走りしていった。

「ダイゴ！……………もう」

だが、レナは心配する様子もなくそのままライブの方を見続けた。

「誰だ！… 僕を呼ぶのは！…」

人気のないライブ会場の通路に入り込んだダイゴは、大声でそう叫んだ。

先程から何か嫌な予感がして、ダイゴは気が気でない。

ダイゴが通路を数歩歩くと、目の前が少し揺らいだ気がした。

『――会いたかったわ。……………ずっと』

「!!」

今まで何もなかった空間に、突如として女が立っていた。礼服の様な漆黒の服を着た、一人の女性。

だがダイゴはその女に見覚えは無かった。

「お前は……?」

『私の事、忘れたの? ……あの女と同じね。でも、すぐに思い出す……すぐにね……』

「何……、っ!」

突如通路内に強風が吹いた。

吹く筈がない風で目を瞑る一瞬、ダイゴは女が笑っている様に見えた。

「……っ! 何処に行った!?!」

目を開けると、既に女は目の前には居なかった。

存在が消えたかのように何もなく、ただダイゴの中に大きな謎だけが残っていた。

「……一体、何なんだ」

突如として起こった謎の現象に戸惑いつつも、ダイゴはレナの元に戻ろうとしていた。

……だが、彼の望んだ平和は、やがて壊される事となった。

【ライブ会場 ステージ上】

風鳴翼とマリア・カデンツァヴナ・イヴの特別ライブはインターバルを迎えていた。

二人とも歌を歌いあげ、ファンに向けて手を振っている。

舞台袖から見守る城戸と緒川も思わず熱が入っていた。

「ありがとう、みんな!」

翼は声援に答える様にマイクにそう言う。

「うおおおおおおおおおッ！」

その投げ掛けられた言葉でファンのボルテージはMAXを通り越してしまいそうである。

「私はいつもみんなから沢山の勇気を分けて貰っている！ だから今日は、私の歌を聴いてくれる人達に少しでも勇気を分けてあげられたらと思っっている！」

翼のその言葉に会場中の人々は歓喜に沸いた。駆け巡るレーザースポットがまた会場を飾っている。

「うおおおおおおおッ！」

「生きてて良かった〜！」

「翼さん愛してるぞー！」

熱狂的なファンたちの声援を受けて、翼は心底嬉しそうな笑顔をとれた。

その顔を横からじっと見つめるマリアは、正面に向き直ってマイクを取った。

「私の歌を全部、世界中にくれてあげる!! 振り返らない、全力疾走だ！ ついて来れる奴だけついて来いッ！」

彼女のファンサービスによって、世界中のファンたちがさらに喜びの熱にさらされる。

(なお、この時にある国では涙を流し、彼女に祈禱する者達すらいたという)

全世界同時放映によつて、世界が音楽に包まれようとしていた。

ステージ上のマリアは翼を横目で見ながら再び口を開く。

「今日のライブに参加出来た事を感謝している。そしてこの大舞台に、日本のトップアーティスト、風鳴翼とユニットを組み歌えた事を！」

初めてマリアの口から聞かされた感謝の言葉に、翼も応えた。

彼女に近付き、自身もマイクに向かって口を開く。

「私も、素晴らしいアーティストに巡り合えた事を、光栄に思う」

感謝のしるし、とも言うべきか、翼は右手を差し出した。

そしてマリアもまた右手を差し出し、堅い握手を交わした。

二人のコラボレーションに、一層観客達に熱が入っていった。

一方、マリアは翼の目を見ながら、言葉を掛ける。

「私達は世界に伝えていかなきゃね。『歌』には力があるって事を」

「それは、世界を変えていける力だ」

そうね、という様に少し笑うと、マリアは観客達の方を振り向きながらステージの前の方へと歩き出した。

「——そして、もう一つ」

なんだ？、と思いつつも翼は耳を傾ける。それは観客達も、視聴者達も同じであった。

一刻の静寂。

すると、マリアは自身のドレスをなびかせた。

——まるで、ナニカの合図の様に

その瞬間、恐怖が、会場を包んだ。

「ッ!?!」

翼はその瞬間を逃さず目撃していた。

ステージ下に、突如としてノイズが出現したのだ。……いや、それは会場中のいたる場所に現れた。観客を囲む様にして。

「「きゃああああっ!!」」

観客達は悲鳴を上げ、逃げ惑う。

だが限られた出口に人々が押し寄せればどうなるか、検討などすぐについた。

最悪、2年前の再来である。

「い、一体何が……!?!」

これまでノイズと戦ってきた翼ですらも驚愕し、その場にただ立ち尽くすばかりである。

「っ、翼!」

「駄目です城戸さん! ここでもやみに飛び出して、何かあれば……」

!!」

思わず飛び出そうとしてしまった城戸だったが、緒川の一言で静止する。

だが、城戸は駆けつける事が出来ない事に激しく歯ぎしりした。

(クソツ……！ 俺はまた、救えないのかよ!?)

「これは……!!」

舞台裏の通路から出てきたダイゴもまた、この光景を目にしていた。

逃げ惑う人々。ただ突っ立つノイズ。

「っ、レナ？ レナ！ 何処だレナツ!!」

既に逃げたのか、レナの姿はどこにも見当たらなかった。

もしかしたら、ノイズに襲われる危険性だってある。

それに、旅をしていた為にGUTS隊の銃、GUTSハイパーすら持っていない現状では、奴等に対処できる筈もなかった。

「くそっ！ どうすれば……」

ダイゴは隣にある観客席をヤケクソ気味に蹴った。

所詮、あの『力』がなければただの人間だ。

戦う力すらない、弱い人間なのだ。

そう思えてきた事に、少しずつ絶望しつつあった。

【特異災害対策機動部二課 二課仮設本部】

ノイズの出現の報は、特異災害対策機動部二課にもすぐに伝えられた。

「ノイズの出現反応多数！ 場所はQUEENS OF MUSICの会場！」

「何だと……!?!」

藤堯朔也の報告に、弦十郎は席から立ち上がる程に驚く。

未だ響たちのチームは東京へと向かっている途中であるし、ユーゼスの調査隊からも連絡は一向にないままであった。

弦十郎は歯噛みしながらモニターを睨みつける。

「こんなタイミングで……あおい君に繋いでくれ！」

「分かりました！」

朔也はすぐに通信網を確保し、帰投しつつあった士達に連絡を入れる。

彼らはヘリコプターで東京へと目指している途中であった。

「聞こえるか、あおい君、士君！ ノイズが出現した！ すぐにそちらに向かってくれ!!」

『大体分かった。……だが、まだ辿り着くには時間が掛かるぞ?』

『装者二人、それと門矢さんの現場介入までの推定時間は40分を予定……。到着次第、事態の収拾にあたります』

【日本上空 ヘリコプター内】

端末の通信を切ると、あおいは響とクリスへ振り向いた。

「聞いている通りよ。疲労抜かずの三連戦になるけど、お願い」

コクリと頷く二人。

士も「ガキ共と違って、俺は余裕で行けるぜ？」等と軽口を叩いている。

「またしても操られたノイズ……」

クリスが望遠映像を見ながらそう呟く。

「詳細は分からんが……だが」

そこで言葉を濁す士。

「だが？」

「仮に、例の杖……ソロモンの杖を狙った襲撃と、ライブ会場に出現したノイズが無関係とは言えないだろうな」

士のそんな推測に、装者二人は眉をひそめた。

今はただ、現場に早く向かえる事を祈るだけである。

(翼さん、城戸さん、緒川さん……もう少しだけ待っててください)

……)
響は無事を祈る様にそう目を瞑った。

【??】

「遅かりし……ですが、ようやく計画を始められます……」

【QUEENS OF MUSIC ライブ会場】

未だ逃げ惑う人達。出口ではすでに逃走路を巡って暴行すら起きようとしていた。

「……………るな……………」

「狼狽えるなッ!!」

恐怖が支配する空気を切り裂いた一喝。

人々はその言葉で、一斉に動きを止めた。

そして、声の主の方を見る。

人々の混乱は一時的だが収まり、重大な事故などが起こらずに済んだ。

——だが、これからが本当の恐怖の始まりである
「……………」

事態を静観出来なくなった翼は、首に付ける赤いペンダント——シンフォギア・システムに手を掛けようとした。

「——怖い娘ね」

投げ掛けられる言葉。

それは、隣に立つマリアからのモノであった。

「この状況にあっても、私に飛び掛かる機を伺っているなんて」

(……………読まれていたか)

翼は少し苦しい表情をしなくなったが、表には出さず心の中で毒づいた。

「……………でも逸らないの。聴衆達はノイズからの攻撃を防げると思ってた……？」

「くっ……………」

例え翼がシンフォギア・システムを発動しようと、護れる人間には限りがある。

三人ならまだしも、一人で戦うとなればそれ相当の被害が出てしまう事は確かであった。

それをマリアに指摘され、翼は反論する事が出来ない。

「それに……………」

マリアはじつと遠くを見つめる。

その先にあるのは、全世界生中継を伝えているモニターとカメラであった。

先程までもそうだが、今現在の状況も、世界中へと配信されているのである。

「ライブの様子は世界中に中継されているのよ？ 日本政府はシンフォギアについての概要を公開しても、その装者については秘匿したままじゃなかったかしら？ ……ねえ、風鳴翼さん？」

そこまで知り得ている事には、もはや驚きもしない。

だが、彼女が情報を知っているという事は、裏に何か組織があるという事でもあった。

(シヨッカー等という下賤な組織か、あるいは……………)

だが、今は模索している暇などない。

この時間にも、もしかしたらノイズが暴れ出すかもしれないからだ。今は大人しく静止していても、いつ動き出すか分からないのが現状だ。

「甘く見ないで貰いたい。そうとでも言えば、私が韃走る事を躊躇う

とでも思ったか！」

マイクを突き立てながら、そう反論する翼。

彼女には、覚悟があった。

戦う為に、何もかもを捨てる覚悟が。

護る為に、自身が積み上げてきた全てを捨てる覚悟が。

「……………貴方のそういう所、嫌いじゃないわ。貴方の様に誰かが誰かを護る為に戦えたら、世界はもう少ししまともだったかもしれないわね……………」

「なん……………だと……………?」

「世界はもう少ししまともだった」という彼女のその言葉に、翼は少し揺らいだ。

この時、少しだけ思ったからであった。

(彼女もまた、何かを護る為に戦うとでも言うのか……………!?)

その雑念が、翼を鈍らせている事に代わりはなかった。

「マリア・カデンツァヴァナ・イヴ……………貴様は一体……………」

その問いに応えるかの如く、マリアはマイクを再び握りしめる。

「そうね……………そろそろ頃合いかしら」

マイクを持ち、そして、重く口を開いた。全ての者に向かって。

「私達は、ノイズを操る力をもつてして、この星の全ての国家、そして地球平和連合TPCに要求する!!」

「世界を敵に回しての口上……………!!? これはまるで——」

【ライブ会場 裏通路】

ライブ映像を放映している管制室へと向かう途中の緒川慎次は、ライブされているモニターを見ながら一言呟いた。

「……………宣戦布告!」

【ライブ会場 ステージ上】

「——そして」

そこまで言うと、彼女はマイクを上空へとブン投げた。回転するマイクはそのまま宙を舞う。

「……………はっ！」

その瞬間、翼は何かを悟った様にマリアを見た。

そして、翼のその予想は見事的中する事となる。

——Granzibel fen gungnir z
izzel——

光。

そう、光だ。

マリアを包む様に現れる光。

そして、その次に放たれるのは一種の波であった。

空気を揺らす、振動の波。

そしてそれは、マリアという存在を鎧で包み込む。

「まさか……………!?!」

翼は自身の直感が当たった事に驚き、更に有り得ないであろうその現象に戸惑っていた。

【特殊災害対策機動部二課 二課仮設本部】

「この波形パターン……………まさかこれは……………!?!」

コンピュータによってはじき出された波形の鑑定結果が、管制モニターへと投射される。

そこに映し出されていた文字は——

〈GUNGNIR〉

「ガングニールだとオツ!？」

【ライブ会場 ステージ上】

「……………な……………」

先程までとは一変、純白のドレスから漆黒の甲冑を纏ったマリア・カデンツァヴァアナ・イヴの姿がそこにあった。

「黒い……………ガングニール……………」

翼はそのまま開いた口がふさがらない。

驚愕の出来事に、ただただ立ち尽くす事しかできなかつた。

「……………私は……………私達は『フィーネ』。そう、終わりの名を持つ者だ!!」

第十三話 動き出した歯車

【??】

「始まった様ね……………」

「この世界の『武装組織フィーネ』が動き出した。つまり、ここから新たな戦火と混沌が始まるという事だ」

「……………そういえば、『彼』からは連絡はないの?」

「定時連絡にも答えない。奴は何処かで油を売っているのだろう」

「でも、『彼』の事だから上手く潜入しているでしょうね。……………一応、保険は掛けておいたつもりだけど」

「……………人形どもを使うのか?」

「中でもW17は完璧よ? 私の自慢の娘、みたいで」

「フン……………好きにしろ。いずれにせよ、計画に支障が出ているのは確かだ。早急に事を進めなければいけないぞ……………」

「その為にも、『この世界』のフィーネと大シヨツカーに赴かないと、ね?」

「そうだ。……………闘争が永遠となる世界の為に」

「……………貴方は何をしているの、アクセル……………?」

第十三話 動き出した歯車

【QUEENS OF MUSIC ライブ会場】

「我ら武装組織フィーネは、各国政府及び地球平和連合に対して要求する！……そうだな……差し当たっては、国土の割譲、そしてTPCの解体を求めようか！」

フィーネと名乗ったマリアのその口上に、隣に立つ翼は絶句した。

「馬鹿な……!?!」

そう、馬鹿な話である。

たかが一テロリスト集団が、全国家に向けて宣戦布告するという事自体、馬鹿げた話である。

だが、彼女たちにはそれが出来る自身があった。

ノイズを操る能力。

それは今や、核兵器よりも恐ろしい力である。

「もしも24時間以内にコチラの要求が果たされない場合は、各国の首都機能がノイズによって不全となるだろう！」

全世界へ生中継されている故に、それは全ての国家の首脳の元へと容易に伝わる事となる。

既に対策を始める者がいれば、慌て狼狽する者、ただ事態を静観する者……。混乱が始まる予感がそこにはあった。

【???

暗闇の部屋の中で、生中継を見る女が一人。

車椅子に乗ったその年老いた女性——ナスターシャ教授は画面上に移るマリアを眺めながら一言だけ呟いた。

「……あの娘ったら」

【ライブ会場】

「何処までが本気なのか……」

歴戦の防人である風鳴翼すらも、この事態が何処へと行くのか全く分からないでいた。

ここまで大事になるのは、それこそ2年前の邪神戦争以来である。

「——私が王道を敷き、私達が住まう為の楽土だ。素晴らしいと思わないか!？」

「何言ってるんだよアイツ……! アイドル大統領って事かよ!？」

城戸は舞台袖からその場を静観するしか出来なかった。

彼が動いても何も出来ない事は百も承知であったし、何よりノイズがいつ暴れるか分からない現状で動くのは得策ではないからだ。

「くそっ、何か……何か出来ないのかよ!」

行動する事が出来ない自分に心底苛立ちを隠せない城戸は、手に持ったモノをチラッと見た。

龍騎のライダーデッキ。

この力があれば、今の現状をどうにか出来るかもしれない。

城戸は機会を伺いつつ、舞台袖からステージ上を睨み続けた。

ノイズが動かないとはいえ、人々の中で徐々に動揺と混乱が再び生まれているのは見らずとも分かる事であった。

それ故に、翼はマリアに噛みつく。

「何を意図しての語りか知らぬが……!」

「私が語りだと……?」

「そうだ！ ガングニールのシンフォギアは、貴様の様な輩に纏えるモノではないと覚えろ!!」

そう叫ぶと、彼女は首のシンフォギア・システムに強く念じた。

(私の甘えを……………今日ここで消し去る!!)

そして、ゆつくりと口を開いた。

「Imyuteus……………」

シンフォギア・システムを起動させる詠唱。

翼はゆつくりと、心に念じる様に詠っていく。

「……………これ以上、計画に支障をきたすわけにはいかない」

ライブ会場の一角に、一人佇む女。

まるで生気がない様なその眼は、風鳴翼をじつと睨みつけていた。

そして、眼の奥でナニカが起動する様な音が響いた。

カチリ、と。

「……………」

「……………ん？」

マリアは、ふと視界の端でモゾモゾと動くモノを捉えた。

それは、フィーネが操作しているノイズである。今はその場で静止と教えていた筈だが、少しモゾモゾと動いている様にも見える。

「……………つつ、……………!」

すると、そのノイズはまるで糸が切れた人形の様に、突如として動き始めた。

「なッ……………!?!」

マリアはあくまでも「静止」を命じていた。だが、それを何等かの

手段で突破し、一瞬で凶器となって襲い掛かった。

無論、その光景はバックステージで静観していた城戸の目にも映る事となった。

「あ、危ないッ！」

瞬間、彼はライダーデッキをかざしながらステージ上へと飛び出していた。

「anmenohaba——ッ!？」

それは、翼が再び目を開けた時に気付いた。

ノイズがステージ上へと上り、槍状の形態へと変形して彼女を攻撃しようとしている事に。

だが、いくら何でも瞬間的に動ける程の運動能力は身に着けていない。

翼は、その一瞬で死を覚悟した。そして、走馬灯が彼女の脳裏をよぎる。

(死ぬのか、私は……………?)

(何も護れないで、このまま……………)

(奏……………私は……………)

瞳の裏にかつての相棒の姿を映し、彼女は目を瞑った。

「——変身ッ！」

叫び声と共に、ノイズの目の前に滑り込む様に立ち塞がった。そし

て、即座にカードをロードする。

——ガードベント——

「き、城戸、さん……?!?!」

翼とノイズとの間に割って入った城戸真司——仮面ライダー龍騎は、即座にシールドで攻撃を防ぐ。

弾かれたノイズはそのままライブモニターへと流れ、モニターを粉々に粉碎した。

液晶が割れ、表面を覆っていたガラスがステージ上にも散らばる。

「大丈夫か、翼?!」

「え、あ、ああ……」

唐突の出来事に、彼女は一瞬だが混乱した。

すんでの所で、龍騎がノイズの攻撃を防ぎ護ってくれたのだ。その事実を理解すると、彼女は安心した。

翼の無事を確認した龍騎はすぐさまマリアの方に向き直る。

「おいアンタ、どういう事だ！ 攻撃はしないって約束だったろうが!?!」

「こ、コレは私ではない！ 断じて、私はそんな卑怯な手を使う筈……」

狼狽するマリア。彼女自身が、一番この事態に驚いていた。

「そんな事、信じられるかよー！」

龍騎はそう言いながら臨戦態勢を取った。

すると、観客の中からもマリアの非道を非難する声上がり始めた。

「騙し討ちか!」

「卑怯だぞー!」

「鬼、悪魔アー!」

マリアは城戸達が自身の言葉を聞き入れない事に苛立ちを覚えた。音がする程の歯ぎしりをする。

自身が手に持つマイク兼杖を振りかざし、目の前の龍騎に向ける。

「お前の様な者が現れなければッ……………」

そう言うと、マリアは一気に踏み込んだ。

シンフォギア・システムで強化されているせいか、城戸は一瞬だけ遅れを取る。

「ッ、何?！」

再びシールドで防御しようとしたが、彼は即座に機転を利かせた。シールドを突っ込んでくるマリアに向けて投げると、すぐさまデッキからカードを引き抜く。そしてそれをドラグレッダーに差し込んだ。

——ソードベント——

「うりやあああつー！」

天から降って来たドラグセイバーを即座に掴むと、そのままその峰でマリアの杖を防いだ。

「な……………いつ、シンフォギア・システムではない?！」

マリアは絶句した。

目の前にいつ紅い戦士もまた、てっきりシンフォギア・システムかと思っていた。だが、先ほどの剣を召喚した事等も含めて、これはシンフォギアとは全く別の存在である事が分かった。

そして、シンフォギア・システムでないにも関わらず、さつきノイズの攻撃を防いだ事もまた、彼女に心理的ダメージを与えていた。

(何だこいつは……………!? ノイズ相手に物ともしないなんて……………!)

一方の城戸は城戸で、シンフォギア装者について考察していた。

(成程な……………ライダーと違って対ノイズ専用だから、人体を護る装備は比較少なくても良いって訳か。こりゃ少し手を抜かないといけない奴か……………?)

シンフォギアはあくまでもノイズ殲滅用であり、ライダーの様に様々な敵と戦う事など想定されていない。

よって、位相差障壁を無効化、更に炭化攻撃を無力化する事だけに特化されている為に、実体物から肉体へ攻撃された場合は普通にダ

メージが加わるという事であった。

城戸はらしくない程にそう考えた後、鏢迫り合いをしていた間合いからバックステップで抜け出す。

マリアも城戸が離脱した事で同じく距離を取った。

「……おいアンタ、もう諦めて負けを認めろ！ その方がアンタの為にもなる！」

「ふざけるな……ッ！ ここで私が負けを認めれば、『あの娘達』の思いはどうなるッ！」

あの娘達、という単語が城戸の脳裏に引つ掛かった。

マリアもまた、何かの為に戦っているのだ。それも、自分とは桁違いな重荷を背負って戦っている。直感的にそう感じた。

その事を認識した城戸はドラグセイバーを投げ捨てた。それはステージを囲っている壁に突き立つ。

「っ!？」

「マリア・カデンツァヴァナ・イヴ！ 俺はアンタのその行為を認めない！ だから、俺がアンタを止めてみせる！」

そう言うと、再びデッキからカードを一枚引き抜いた。そのカードに描かれている意匠は紅龍の頭である。

——ストライクベント——

すると、ドラグセイバー同様、空から龍の頭——ドラグクローが降って来た。

うまくそれを手に装着し、マリアに向かって構える。

「お、おい待て！ マリアを殺す気か!？」

後ろに隠れる翼は龍騎の背中をバンバン叩きながら抗議の意を知らせる。

「大丈夫。シンフォギアが護ってくれるだろ？」

だが龍騎はシンフォギア・システムの防御力を信用しているらしく、構えを解く姿勢を見せない。

そうこうしている内に、ドラグクローの腔内に炎のエネルギーが充

填されていく。

「遠距離からの攻撃か！」

マリアは瞬時にそう理解し、マントを盾にする様に自身の前に広げた。

「ハアアアアッ！」

龍騎はドラグクローを突き出す。同時に口から火炎弾を吐き出した。

ゴウツ、と音を立てて吐かれた炎がマリアを直撃する。

「っ、グツ!!」

事前に展開していたマントによってその威力は殆ど減衰出来たが、熱エネルギーだけは防ぐ事が出来ず彼女に襲い掛かった。

だが、多少の火傷を負いながらそれでも毅然として立つマリア。

龍騎と翼はその執念に少し恐怖を覚えた。

「まだ……こんな攻撃で倒れる訳にはいかないッ！ あの娘達の……為にもッ！」

「なんて奴だ……」

「おい翼、そんな事を言ってる暇があったら早く逃げろ！」

龍騎は振り返るとそう叫びながら翼の肩を持った。

「駄目だ！ まだ多くの人がいるではないか!？」

未だ囚われの身になっている観客達はステージ上で行われている謎の戦闘に釘付けで、自身の身の危険を忘れてすらいた。

翼は彼らの身を案じ、自身よりも観客の避難を最優先としていた。

「くっ……おい、マリア！ せめて観客だけは解放しろ！」

龍騎はそう叫ぶ。

翼がシンフォギア・システムを発動させる為には、まず観客達を逃がす必要があった。それに、全世界に中継され続けているカメラも止める必要がある。

マリアが信念の為に戦っている以上、案外まっすぐな人間であると思っただから龍騎はこんな行動に出れた。

「何……解放だと？」

「ああ！ 何も関係ない人間を巻き込むな！」

龍騎はそう叫ぶ。

それはかつて、無力な市民を護る為に戦った経験がある城戸故に出た言葉であろう。

「アンタが何を企んでいるのか知らないが……いや、それが語りかどうかすら分からないけど、他の人を巻き込む事に何か意味があるのかよ！」

「意味……だと?」

そうだ、と言う様に龍騎は更に叫び続ける。

「これだけ大勢の人質を必要としてまでも、こんな事をやらないといけないのか!? こんな事をするのが、お前の意思なのか!」

「私の意思……」

マリアは龍騎のその言葉を聴いて、少し俯く。表面上は冷静を装っているが、かなり動揺していた。

(私の、意志……それは何だ……? 私は……私は……?)

【ライブ会場 通路裏】

「……………再び計画遂行に支障発生。このままでは順序通りにはならない」

先程まで観客席にいた女は、いつの間にか関係者通路に立っていた。

そしてそこで彼女は一連の流れを視ていた。

——だが、そこにはモニターなど存在しない。

彼女の瞳、その中から、事のしだいを視ていた。

「……………排除プログラム第二弾を発動。速やかに例のモノを召喚する」

無機質かつ機械的な口調でそう一人でに呟くと、懐から一つの物体を取り出した。

全体が沈んだ青、紺色をした、リング状のアイテム。リング部分のみが赤く怪しく光り、まるで返り血の様に見えるもない。

そして、彼女は懐からもう一つ取り出した。

一枚のカード。

それは龍騎のアドベントカードやディケイドのライダーカードとも違う。

中央に描かれるのは、禍々しい姿をした人である。

瞳は黒く、全身が紅、黒、銀の三色で覆われたその存在は、カードながら周囲の空間に重いナニカを振りまくようである。

女はその黒いリングを右手に掴むと、左手に持ったカードをリングに通そうとした。

——その時、

音がした。

優しく、撫でられるような音。ハーモニカであろうか？

何処からともなくメロディーが突如として流れ出し、女は困惑する。

「……周囲の人間は、既に全員殺した筈だが………」

そう言いながら振り返る。

そこには一人の男が立っていた。

茶色のジャケットを羽織り、ハーモニカらしきモノを口に行っている男。

「……貴様か、この雑音を発しているのは？」

女はそう尋ねる。

「……だったら何だ？」

手にするハーモニカから口をはなすと、青年は女を一瞥しながら言った。

「……………見られた以上、ここで殺す」

そう呟くと、女は青年に飛び掛かった。

手にするリングを、青年の後頭部目掛けて振りかざした。

ガツ、という音が響く。

「!?」

「……………残念だが、俺を仕留めるのは叶わなかったようだな」
青年は攻撃を防いでいた。

——女の持つリングと同じモノ。

いや、正確には色が違った。

コチラのリングは銀、赤によって意匠が刻まれている。

それは、オーブリングと呼ばれるモノ。

「貴様……………何者だ?」

女はすぐに後退りしながらそう訊ねる。

青年はリングを懐にしまうと、女の眼を見ながら叫んだ。

「俺はガイ! クレナイガイだ!」

【ライブ会場 ステージ上】

少しの間、沈黙を保つマリアが口を開いた。

「……………会場の観客諸君を解放する!」

「な……………!?!」

翼はその言葉を聴いて少し困惑する

(城戸さんの言葉を聴いて……………だが、何が彼女を動かしたというのだ……………?)

一人そんな疑問を抱きつつも、マリアの言葉を聴き続ける。

「ノイズに手出しはさせない! 速やかにお引き取り願おうか!」

そう宣言すると、彼女は龍騎の方へと振り向いた。

「……………これが、私の意志だ」

「そうか……」

龍騎はそう応える。

本当なら、このままお縄に付く、という所まで行って欲しかったが、流石にそこまではいかない様だ。

だが、これで観客達に犠牲者が出る事はまずないだろう。

龍騎は安心して、小さくため息をついた。

『——何が狙いですか？ コチラの優位を放棄するなど、筋書きには無かった筈です。……説明して貰えますか？』

マリアの耳に装着されたヘッドセット、そこから女性の声が聴こえてきた。

フィーネの一員であり、マリアの指導者、ナスターシャ教授からの通信である。

「このステージの主役は私。……人質なんて、私の趣味じゃないわ」
龍騎の言葉によって揺れ動いた彼女は、自身の意思でそう言った。

『血に汚れる事を恐れないで！』

——血に汚れる

これから彼女は、幾つもの戦いを通して血を浴びる事となるだろう。

だからこそ、ナスターシャはここで彼女に決意を示す一環として立って欲しかった。

……だが、そうはいかなかったようだ。

『……調と切歌を向かわせています。作戦目的をはき違えない範囲でおやりなさい』

「了解、ママ………ありがとう」

そう応答した直後、通信は切られた。

そして、マリアは決意を決めた目をして龍騎と翼を見つめた。

【ライブ会場 通路裏】

「クレナイガイ」と名乗った青年と女は、人知れずそこで格闘戦をしていた。

バシユツ、という人間では出せないような音が響き渡る。

女の放った鉄拳を掌で受け流すと、ガイはその腕を掴んで動きを封じる。

「一体何が目的でこんな所に居る！　そして、そのダークリングは何だ！」

問い詰める様にそう叫ぶ。

だが、女は力尽くでガイの拘束を振り払った。

「……………貴様に話す口など、ない」

そう言うと、女は拳銃を構えた。

「なにッ!？」

ガイは咄嗟に回避をしようとしたが、直後に間に合わないと感じる。

女は右に転がったガイを完全に追従する様に拳銃を向け、そのトリガーを引いた。

「死ね」

バン、という乾いた音。

それと共に、一瞬大きくナニカが輝いた。

「っ、危ねえ……………」

「な……………」

ガイは無事であった。

何故か？

彼の右手に握られている一振りの剣、オーブカリバーによって銃弾を防いだからである。

「……………お前、人間じゃないな。異星人か何かか？」

オーブカリバーを女に向けながら立ち上がる。

「話す口は無いと言った」

女はそう言うと、ガイを振り切ろうと飛び出した。

ガイの脇から抜けようとしたが、無論の事ながらオーブカリバーによってその道を防がれる。

「なら……」

女は跳躍した。ジャンプした、とは比喩物にならない程に。

そのまま通路の壁に張り付く様に着地すると、そのまま三角飛びの要領でガイの後ろ——つまり、観客達が脱出している通用口へと続けて跳躍した。

「何ッ!？」

咄嗟の事に対応が遅れたガイが後ろを振り向くが、既に女の姿はそこには無かった。

上手く逃げられてしまった。

「クソ……逃げ足が速いな……」

ガイが溜息を付きながらリングを懐に直すと、オーブカリバーは光の粒子となつて彼の手の中から消えていった。

そして、彼は女の行方を追う為にその場から姿を消した。

【関東圏 上空 へり内】

ライブ会場への移動を急ぐ響たちの元に通の連絡が入ったのは、マリアが観客の解放を宣言してすぐの事であった。

「よかった！ じゃあ観客に被害は出てないんですね！」

被害がない事に喜びの声を上げる響。

だが通信モニターに映し出される弦十郎、藤堯の顔は依然厳しいままである。

『現場で検知されたアフヴァアツヘン波形については、現在調査中………だけど、全くの偽物（フェイク）であるとは………』

ライブ会場からは、ガングニールのアフヴァアツヘン波形が検知された。

だが、それは本来立花響の駆るシンフォギア・システムが放つものであり、マリアが持っている筈はないのだ。

——第一、ガングニールのシンフォギア・システム自体、前装者である奏、そして響以外に使いこなせる筈などないのだ。

響は自身の胸に手を当て、そして感じた。

自身の胎には、未だ gangs ニールの聖遺物が存在している事を。

「私の胸の gangs ニールが無くなった訳ではなさそうです」

その応えにモニターの向こうの弦十郎は顔を一層厳しくした。

「……………案外模倣は簡単かもしれないな」

横からそう言ったのは士であった。

『どういう事だ……………士くん?』

弦十郎は士の言葉に疑問を覚え、こう投げ掛けた。

「……………まあ仮の話だが、例えば、このフィーネとかいう組織の裏に……………シヨツカーの姿があつたとしたら?」

その言葉に、一同が息をのんだ。

「俺のデイケイドライバー……………これだって、元はと言えばシヨツカーが開発したモノだ。あいつ等の並外れた科学力をもってすれば、gangs ニールのコピーだって容易かもしれないという話だ」

つまり、何処からか gangs ニールの聖遺物の欠片さえ手に入れば、失われた部分の修復、完全模倣も可能ではないかという話である。

「うーん……………理解できるような、できないような……………」

今の士の言葉を聴いて、響は頭をこんがらがせていた。

「お前、今のは分かり易かつただろ……………」

隣でクリスが頭を抱えているのは言うまでもない。

こんなおバカとコンビを組まされている事に、改めて哀しさを覚えた。

『……………つまり、フィーネの裏にはシヨツカー、又はそれに並ぶ組織が関与しているという事か……………』

「あくまで推測の域だ。だが、それぐらいは想定していてもいいんじゃないか?」

『……………もう一振りの、撃槍（gangs ニール）……………』

「それが……………黒い gangs ニール……………」

【関東圏 上空 ヘリ内】

観客の避難は完了し、会場に残るのはマリア、翼、城戸、緒川だけ

となっていた。

もの寂しくなった観客席を眺めながら、マリアはふと口を開く。

「……………帰る所があるというのは、羨ましいものね」

それは彼女の本心か。

龍騎は未だ身構えつつも、彼女のその言葉の意味を理解しようとした。

「マリア……………貴様は一体……………?」

翼もまた、その意味を理解しようとして投げ掛けた。無論、言葉が返ってくる事はない。

彼女には「帰るべき居場所が存在しない」という事だけが、事実として残っているだけである。

「……………悲しいやつだな、アンタは」

龍騎の仮面の下の顔は、哀れむ様に彼女を見つめ続けた。

「……………観客は皆退去した! もう被害者がでる事はない……………翼、それでも戦えないというのなら、それは貴方の保身の為!」

そう言うと、マリアは再び彼女に向かって啖呵を切った。

「つ、戦うのなら、俺が相手だ!」

龍騎はドラグクローを構えながら翼の一步手前に飛び出す。

だが、その行動を見越していたのか、マリアは翼ではなく龍騎目掛けて脚を繰り出した。

「ハアッ!」

「グッ……………!?!」

マリアのしなやかな左脚の蹴りが龍騎の脇腹に直撃した。シンフォギア・システムによって何倍にも強化された物理エネルギーは、ライダースーツの防御能力すら容易く破る勢いである。

龍騎は蹴られた衝撃でステージ上からはじき出された。

眼下にあるのはノイズの群れである。ハイエナの如く獲物を待ち続けていた奴等は、すぐさま龍騎に襲い掛かる。

「城戸さん!」

「俺に構うなッ!」

ライダーシステムのおかげで炭化攻撃は無効化できる龍騎は、その

ままノイズ達相手に戦い続ける。

だが、ドラグクローだけでは限界があるのは明白である。

「よそ見をする余裕があつて？」

「くっ……………」

マリアは翼の懐に迫ろうと突貫してくる。

翼はそれを辛うじて避けるが、生身の人間ではいつか避けきれなくなるのがオチだ。

(シンフォギアを…………天羽々斬を纏わねば……………だが)

未だ全世界に中継されている中でシンフォギア・システムを発動させる事は、彼女の歌手人生を棒に振るのと同じである。

自身の夢を捨てきれない故に、変身する事は拒み続ける。現状をどうにかしようと、翼はそのままステージ袖に走り出した。

(ステージ外に、カメラの外に出てしまえば……………！)

「…………その魂胆か！」

行動の意味を悟ったマリアは、彼女をそのまま追従する。

そして、目の前にあつた剣状のマイクを彼女の脚目掛けて投げだした。

「それ位の攻撃ツ……………！」

翼はそれをジャンプで回避する。

そして着地した、その瞬間——

——パキン

「……………っ！」

走る事に慣れていないヒールが、負荷に耐えられずに折れた。

そして、一瞬生まれたラグが彼女をひどく動揺させた。

「貴方はまだ、ステージを降りる事は許されない！」

先の龍騎同様、足蹴りを腹部に叩き込まれる。

「グ……………あっ！」

苦悶の表情を浮かべながら吹っ飛ばされる翼。

彼女の着地点には、龍騎と戦い続けるノイズの姿があつた。

その幾つかが、彼女に照準を定めたかのように向き直る。

「な……、勝手な事を！」

だが、マリアの指示を聞こうともしないノイズ達は、彼女を殺そうとする為だけに集まり続ける。

「ッ、翼アツ！」

龍騎が助けに入ろうとするが、無数のノイズ達が立ち塞がった。

(……決別だ……歌女であった私に……)

もはやシンフォギア・システムを発動するしかない事態。

彼女は、自身の歌を捨てる覚悟を決めた。

それは、自身の夢を捨てる事。

後悔はない。

だが、それと同時に脳裏に浮かぶモノ……

(翼さん！)

(翼さん！)

(翼！)

自分の歌で喜びの顔を浮かべる響、いつも陰ながら支えてくれた緒川、助けてくれた城戸、そして――

(翼………)

友でありパートナーであった奏……

(奏………私は………)

翼はただ目を瞑りながら、口を開いた。

「Imyuteus amenohabakiri tron………
！」

その瞬間であった。

——ズドンッ！

「！」

その場にいた全員の視界が、暗く歪んだ。

「遅かったか………！」

通路から急ぎ飛び出したガイは、見上げながらそう呟いた。

目の前に広がるのは巨大なナニカ。

何時からそこに居るのか、たとえば、つい数秒前からという事になる。

55mという巨体。銀の体に紅のラインが光っているそれは、かつて誰もが信じた者にそっくりであった。

「ウルトラマン………」

ガイはそう呟く。

だが、その姿は未だ誰も知る事のない者である。

「……まさかアレにそっくりなニセモノが出てくるとはな………」

ガイだけが、その存在を知っていた。

——いや、正確には、限りなく近い存在を知っていた。

「ウルトラマン………『ダイナ』……いや、『量産型ウルトラマンダイナ』か……？」

微動だにしない巨人——ウルトラマンダイナは、ただただ虚空を眺めていた……。